明治三十二年二月七日發兌

女鑑

第百七十四號

東京國光社

女鑑第百七拾四號

目録

赤福餅店頭の圖



馬鹿正直

今の世は、おしなべて、ものに氣のきゝたる人を以て、こよなきものにもてはやすめれど、それのれは今の世によろこぶさるたぐひの人を好まず、なか〳〵に、今様の人にいはしめんには、馬鹿正直といひあなづべきやうなる人物を愛す。

昔、垂仁天皇の御時に、皇子火牟津別の君、御年二十に成りたまふに、なほものいふことおはさざりければ、天皇つねになげき給へるに、一日天ゆく鵠を見たまひて、皇子、れば、えずも、あれは何といふ鳥ぞとはせたまへり。天皇、皇子のものいひたまへるをきゝて、いたくよろこばれ、誰か其の鳥とりて奉るものかあると仰せられけるに、天湯河板擧と申す者、かしこまりて、命を奉じ、是非にその鳥を捕へむとて、とぶがまゝに、あとをおたひ行きて、はる〴〵と越のはてまで追ひすがり、

つひに捕へて奉りたりといふ。今の世の人の、これをきかば、何ぞ氣のきかざるの甚しき、似たること鳥をとりて、それといひなし奉りてもよろしきものを、その鳥に限りたるでとくに、さばかり遠きあたりまで追ひ行きたるこそ、馬鹿正直なれ。氣のきゝたる人ならむには、かくはあらじと、必ずや今樣の人は、をこの事にいひ笑はむ。

けに氣のきゝたるをのみよろこぶ今樣の人には、かゝる昔の人のふるまひは、をかしからむ。されど、れのれは、さる人を愛す。

また、おなじ天皇の御時なり。橘の菓をもとめたまひしかば、但馬毛理と申す者、うけたまはりて、これをもとめんとて、八年の長き、幾あら鹽の海にたゞよひ、幾重の山をふみわづらひ、やう／＼に常世の國にもとめて歸り來ぬ。さるに、もとめたまひし天皇は、既にかんざりたまひてありければ、但馬毛理いたく悲しみ、もちかへりたる木の實を、天皇の御墓にたむけ、なきとなきて、つひに御陵のまへにてあへなくなりたりといふ。これも、今の世の口のはにかゝらむには、必ずや氣のきか

さる馬鹿正直とや笑はむとするらむ。されど、おのれは、今様の人の笑ふべきかゝる人を好む。

また、仁徳天皇の御代の事なり。皇后、御心にすまぬ御事ありて、山城の筒城の宮に出でたまひて、大宮にかへりたまはず。天皇、幾度かよびかへしたまへど、うけひきたまはねば、いたくかなしみたまひて、口子の臣なる者を召され、筒城の宮にまゐりて、是非に皇后の御心をとき奉るべきよしを命じたまへり。口子の臣、かしこまりて、山城の宮にまゐりて、仰せを傳ふるに、なほうけひきたまふけしきもれはさず。口子の臣は、御庭にひれふしたるまゝ立ち去らず、をりから、雨いたうふりて、庭たつみは、腰をひたすばかりになれば、紅き紐つけたる青き摺衣を着たりけるが、ぬれそぼちて、青き衣の紅に染むまでになれど、なほ、乞ひなげきて去らざりしといふ。これをも、今の世の人のきゝたらむには、あはれ庭ならずとも、軒のかたすみもあるべし、小屋のはしもあるべし。雨にうたれて御庭にうづくまり居らずとも、君の命はかりは傳へらるべきを、あはれ、氣のきかざる人もありけるか

な、馬鹿正直の限りやと、笑ひに笑はむ。されど、おのれは、また、このやうの人を愛す。

今様の世の中は、すべて、うまくいひ、うまく立ちふるまひ、うまくはかり、うまく工み、きのきゝたるを以て、こよなき人ともてはやす如し。されど、おのれは、さる人を好まざるのみならず、最も恐ろしとこそ思へ。如何となれば、かゝる人は、畢竟、幾すぢ多き心をもてる人なりと思へばなり。幾すぢの多き心あるからに、かくうまくもはかり、うまくも工み、うまくも立ちはたらくを得るなれど、幾すぢの心もちたれば、なか〳〵に、頼むべき方はおぼつかなき心地す。而して、こゝにあげたる如き昔の人は、皆、君を思ふ一すぢの心の人なり。されば、おのれは、かゝるをこそ好むなれ。一すぢの心の人なれば、誠に頼むべき方あればなり。一すぢの心の外を知らねば、今の幾すぢ多き心の人には、馬鹿正直とも見ゆるならむ。されど、かゝるこそ、すなはなる誠の人にして、深く頼むべき方なれ。かゝる昔の人の一すぢの心の、よく我が國民の腦髓に遺し傳へられたればこそ、我がしきしまのや

まとの國は、かく一すぢにいやながくつゞきも榮えも來にたるなれ。古より忠臣義士の名をとゞめたる人は、皆、この一すぢの心の人のみ。おのれは、さるからに、今の世のもてはやすなるうまき氣のきゝたる人を好まず、かゝる馬鹿正直の人、やがて、一すぢの心の人を愛するなり。かゝる一すぢの心こそ、誠に君を守り國を守るべき頼むべき人なれはなれ。



論説

女子の父母に對する道（承前）

岸田松二郎

抑女子は多く他家に生涯を終るを以て常經となす。我邦にては二十歳前後を以て婚嫁の時期と定まれり。然れど女子が父母の膝下にある間は甚だ短くして、父母の恩に報ゆるの時は頗る鮮少なれども、其の恩を荷ふこと頗る大なり。即ち女子は體質孱弱にして病に冒され易きが故に、父母の擁護を待つこと頗る多く、又其の衣服頭髪の如きは、其の

年齢の愈多きを加ふるに隨ひ、父母の配慮愈重きを加へ、既に婚期に達すれど、家の貧富によりて同じからずと雖、父母の心志を勞せしむることは決して輕少にあらず、既に嫁して他家の人となれど、舅姑良夫の命令に支配せられて、起居進退皆己の意の如くなる能はず、又既に子女を擧ぐるに至れど、假令舅姑良夫の許すあるも、子女養育の任務に羈されて、亦己の意の如くする能はず。故に父母の病を聞き、其の湯藥に侍する能はざるのみならず、其の終りをも見ること能はずして、長く千秋の憾を遺すこと、往々見聞する所なり。されど、女子は生涯終に父母の恩を報ゆること能はざるものと云ふべき歟。又如何なるものが女子の父母に對する報恩の道となすべき乎は、大に研究を要する所なり。

凡父母の恩に報いんと欲せど、先づ己が荷へる恩の如何に鴻大なるかを確認し、又其の父母が己に盡すに、其の身體を勞し心思を苦しめたる懇到の有様を知悉して、然る後に其の父母に對する酬恩の道を悟了し得るなり。父母は生涯子女に對して、常に親愛の情露を沾はし、其の心身を勞して休まざることは、上來述ぶる所を見て知ることを得べし。畢竟父母の子女に於けるは、其の心を苦しめ、其の體を勞して厭はず倦まざるものなれど、子女の父母に對するも亦、己の心身を勞して厭はず倦まざるの耐忍を以て、常に父

母の心身を慰安せんことを勤め、常に深高の恩を思ひて之を敬し、終始渝はらざるもの、是父母に報ゆる所以の道なり。

偖、人には貧富の差あり、長幼の別あり、其の境界年齢により、父母の恩に報ゆるの次第も亦、大に同じからざるものあり。即ち幼少の時にありては、思慮淺く身體弱きが故に、何事も父母の庇護にのみ賴るものなれど、此の時期にありては、父母心身の勞に代ること能はざるを以て、己の力に應ずるだけの勞を致して、其の勞の幾分を輕からしめんことを欲し、又己の身を愛して、父母の心慮を安からしめんことを欲し、若其の疾病痛苦の事あるに當てや、其の容色を察して痛痒意思を知り、苟くも其の心身を慰さむべきことは、假令その命なしと雖、己の心力の限りを盡して、聊かも嫌色なかるべし。是中流者の幼兒の孝なり。若、夫、上流者の子女に到りては、大厦高樓の內に在りて、美味を食ひ美服を裝ひて、出入寢食皆婢僕をして其の勞をなさしむるを以て、敢て幼女の力を待たざるが故に、殆ど父母に事ふるの道なきが如しと雖、常に自ら其の身を愛し、朝夕怡々として膝下に侍し、其の病あるに當ては、假令僕婢の待するありとも、常に其の傍にあり　其の心を慰藉せど、是即父母に事ふるの道なり。漸く長じて己の心身に供すべき事物は、己之を處理し得るに到れど、衣服飲食の事より百事に到るまで、皆父母の

勞苦に代りて之を營み、又其の弟妹老幼の庇助誘導の勞も、勤めて其の父母に代り、又其の補助たらんことを心掛くべし。是父母の心身を慰安するの道なり。若、夫、良家の子女に到りては、從僕婢妾のあるありて、皆其の勞を致すを以て、敢て子女の力を待たざれども、父母に代りて從者の監督を親らし、又其の妹弟を愛撫して之を誘導し、又其の父母の奉養を親らし、勤めて從者に委ねざるやう心掛くべし。是、即ち父母に事ふるの道なり。然れども、獨斷擅行は決して之を爲すべからず。些末と雖、皆父母の命を稟けて遵ひ行はざるべからず、假令父母の言ふ所行ふ所のものにして、理に悖ることありとも、事の利害に關せざるものは、愼みて之を行ひ、苟且にも其の不理を聲らし、或は之を怨み譏ることなど決してあるべからず。若、事の利害榮辱に關することあらば、其の顔色を和らげ、其の聲音を卑うして、事の是非得失を陳べ、勤めて父母の心を激せしめざるやうに諫むべし。是父母を敬するの道なり。

世の女子たるもの、稍もすれば、己旣に生長して、父母心身の勞に代るに足るあるも、兎角に其の勞を厭ひて之を他に讓り、學に就くものは其の學業の習練を名として、家務の補助を怠り、或は稗史小說に其の眼を晒すの隙あるも、坐して縫針の勞を親らするを厭ひ、或は雜談遊優に時を移すも、恬として省みざるものあり。而して口に女子の任務を

論じ、又父母親族に對するの道を談じ、人をして其の說に感服せしむれども、翻て其の實想を詮じ來れば、一見其の虛談を笑はしむるもの、往々聞く所なり。之を要するに、教育を受けたるものは、婦女子の道を講ずるを聞くこと多くして、之を實踐するの念慮篤からざるより、其の言行の背馳を招くものなれば、女子の本分を失はざらんことを心掛けて、此等の弊に陷らざるやう勤むべし。

既に嫁して他家の人となるや、其の己の父母に報ゆるの道茲に全く絕ゆるが如しと雖、舅姑に事ふること猶父母の如くせば、舅姑は大に其の眞實從順を愛し、良夫に事ふるに誠實貞潔を致し、良夫の兄弟姉妹に交るに猶己の兄弟姉妹に於けるが如くせば、婚家は和氣靄々として能く齊ひ、夙夜家務を營みて怠ることなければ、其の家必ず隆昌す、一家能く雍ぎて且隆なれば、兩家の親しみ益厚くして、父母の心を慰さむるもの之に加ふることなけん。父母は我が身の嫁するに至れば、其の齡既に傾き、哀樂喜憂の影響を蒙むること洵に甚しきものなれば、勤めて其の哀憂となるべきことを避けて、聊かも其の心を安せしめんことを思ふべし。若、父母の訪ひ來ることあらば、婚家の雍らぎ睦ましき有樣を睹せしめ、又其の家運の益〻擧るを知らしめば、假令父母に珍膳滋味を供せずと雖、其の心を慰安せしめて、父母の喜びを致すことは、却て珍羞に勝ること萬々なり。然

るに父母に面するや否や、己の孝養如何を省ず、又己の愚を思はずして、先づ舅姑の不慈を語り、又良夫兄弟の不實を歎き、或は家計の豐ならざるを訴ふるが如きは、是其の父母の憂ひ哀しむべき種を播くものにして、決して父母に報ゆる所以の道にあらざるなり。若、遠隔の地にありて、容易く相見ゆること能はざるときは、假令繁劇の間にありとも、努めて時々の音信を親らし、父母の心を安せしめんことを忘るべからず。父母に報ゆるの道は種々ありと雖、其の歸する所は、身體を養ふと心思を慰むるの二途に過ぎず。故に幼より老に到るまで、父母の心身を慰安し、又其の名を顯影せんことは、是父母に對する所以の道なり。

（完）

女德のしをり（二十）

三輪田眞佐子

第三章　身命上の女德

をさ〳〵人の一擧足一搖手の動作も、心意の傳達より起らざるなし。されば、女德の本源は、心の中樞に存するを以て、その一身の德不德は、須らくその心中の善不善を以て判定すべきなり。故に前章にものせし心術上の女德は、女子たるものゝ行爲一切の根本たるを以て、これを研究せば既に足りぬべしや。曰く未だなり。

固より人は、心の主體ありて行動するものならんも、心は、外界、すなはち近くは各人の肉體、遠くは自然の實體等より、種々の影響、及び樣々の刺擊を受けて以て、心意現象に變化を及ぼすべきものなれど、別に精神界以外の方側よりも、女德を講究せんこと肝要なり。これに由りて、おのれは、本章に主として身體上と生命上との女德をものし、なは章を追ひて、他の觀察點よりも女德を論ふべし。

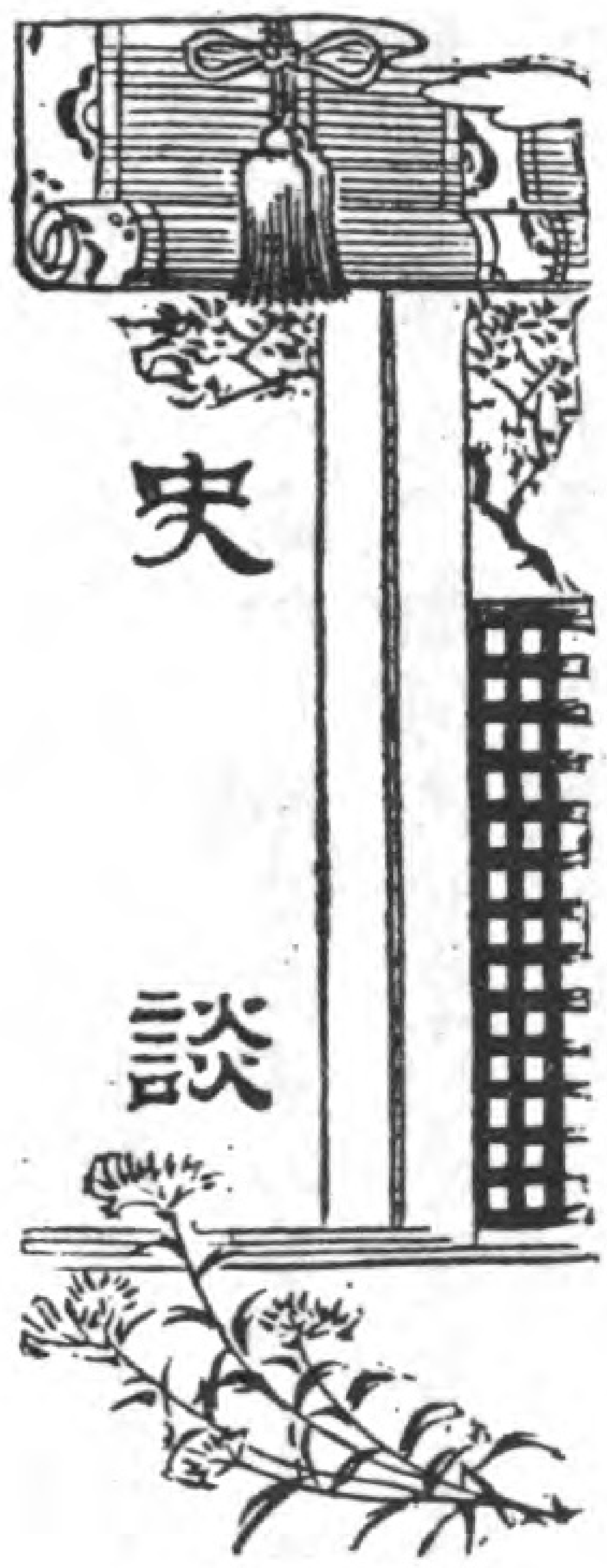
其一部　體軀につきて

第一人格及び女品　人は萬物の靈なりとは古人の言なりけり。今人は人は動物の進化せしものなりといふ。思ふに、いづれにしても、宇内の生物界中に於て、最高位を占むるものは人類なり。されど、人は萬物に超然として、人格を全うせざるべからず。蓋し威儀棣々選ぶべからずといふ如き人は人格ある所以ならんか。女子の既に男子と相貌相異なる以上は、女子に適應する女品なかるべからず。昔日、和泉式部は、その夫の君なる藤原保昌の心に適はざりけるを痛く憂ひて、貴船神社に祈りけるが、禰宜の言ひけらく、斯る祈禱には、神樂を終へんのち、赤き幣を持ち、衣の裾を高くかゝげて、三度回り給へよかしと。式部これを聞き、今日の祈願も、良人の心に適はゞやと思へばこそ、然るを何ぞ今醜態をば神前に示し、重ねて良人を辱むべきと、

確乎と心を定め（ちはやふる神のみるめもはづかしや身を思ふとやみをやすつべき）と詠みけり。保昌ひそかにこれを聞き、且つ見ていみじく感動し、翻然と惑を放ち、いもせの契を再び結びけりとかや。苟も女子たるものは、如何なる事變あらんも、女品を乱すべからず。

身體の強弱が精神に影響するが如く、身の清淨なるか、將た汚劣なるかは、れのづから心術上の女徳にも感染するに至るべし。況して深く考ふれば、心を尊く懐くが女徳たると同じく、身を良く保つも亦女徳たるを失はざるべし。故に讀者は、朝な夕な、我は人なり。亦女なりとの觀念を有ち、以て人格と女品を傷けざるべし。





飯尾傳右衛門の妾

鹽井ふく子

ひまゆく駒の足はやみ、日ははやく月とつもり、年とたちて、いつか其の年も去年となり、今年は春はやくより飯尾江戸へ下りぬ。云ひかはせし如く、坂田は飯尾が江戸詰の留守の心入れ、例にすぐれ、ねんごろに老母を訪らひ、召仕の者までに心づくれど母は唯生みもせぬ孝子をまうけたる心地、しみ〴〵とよろこべど、召仕の者も嬉しがり、他處目もたゞれろそかならぬ眞情と思はぬはなかりけり。妾は不思議をれもはずき、たれど、後前知らぬ事とて、人々にはれろか、老母にも漏らさず、かすみの空、ひとり心にこむるまに、春も立ち、夏も去り、燕鳥歸り、雁來り、冬の日足のはやき瀬は流れ、如何にねてか、昨日はまた去年となり、鶯はふる巣を出で、梢にうたふ春邊となりぬ。飯尾江戸の任恙なく果て、古郷へ歸るべき折り來りけれど、先づ江戸を發し、因州鳥取まで歸り飛脚を以てひそかに坂田へ云ひ越しけるは貴殿が御恩によりて、稀なる御奉公しどしながらも相勤め、前後首尾よく鳥取まで着しぬ。留守中老母に御懇情、こま〴〵御心つけられしことども委しく承はり、過分至極に存るなり、今は江戸在勤の任も果て、聊ながら君にも仕へ奉りぬれど、心を殘すことは努御座なく候間、今こそ命を貴殿へ相渡すべく思ふなれ、道まで御出合候て本望を遂げらるべきや、また如何やうとも貴殿の御差圖にまかし申すべくと、先づ是れに指控へ候、御望みの所へ、直に立ち越え申すべしと、先づ玉章して送りけるに、坂田も御念入りたる儀なり。永々江戸詰め首尾好勤められ、留守御母君御そくさいに御待ち候ことなり。ま

づ御歸宅候て、久しき御對面も之れなき、御母公へも御逢ひこれあるべしとの雁の歸へしに、飯尾も歸宅し、坂田も迎へ、歡びの盃かはしなどして坂田は歸れり。さて二日、三日たちて、二人ひそかに云ひ合ひ、小林寺と云ふ寺のうしろに人遠き松原のありける中へ出であひ、討ち果たすべきよし約しける。かやうの事あるとも、努人は察すべきやうもなけれど、妾はひとり、去去年の冬、深夜に書院の庭にて、ふとき丶し事、忘るるまもなく不思儀とおもひ居りしに、飯尾江戸詰して歸り、長途の勞れ、何れも家内を取形付なんとするに及ぶ時ならぬに、他門の勤をさし置きて、忽ちに物騷しく取りかたづけなんとするさまより、はじめ殊の外飯尾が忍ぶさまもあやしく、心得ぬことかなとつくづく思へど、女心のあさましく、此事うち出し尋ねたりとも、母君にさへあかし給はぬものを、よも知らせ玉ふまじ如何にせん、如何にせましと案じまどひしが、中々にかくてあるべき所ならず、何事もかしこき人を頼んよりはと思ひ、その儘かの老母にもつげず、何事もそしらぬ體にもてなしつ丶、そと叔父角野の家に行き、ひそかに、夫が去々年よりのあやしき事を語りけるに、角兵衛は不思議やうこそ知らせたり。此の後とも知らぬさまにもてなし置くべしと云ひつ丶、やがて同町の者ども呼び集め評定しけるに思ひ合すは去々年荒尾が宅にて、碁の口論今に恨を殘しけるにや、隨分心を付けよと、飯尾の宅も坂田も一町なりければ兩人が他出をば跡を慕ふべしと云ひ合せ、たえず遠見を付けおけり。翌日申の刻ばかりに飯尾、麻上下を着して宅を出でたり。其の日角野方には、五六人寄合て件の事を評判し居りける所へ、遠見はやく此の事を告げければ、皆門内へ立ち出で、角野は馬の毛をなでさせてそれを見物の體にもてなして、待つ間ほどなく、飯尾は何心なく通らんとす。何れも口を揃へて、何方へ行かる丶ぞと云ふ。小林寺邊へ相つとめ、ついでに墓所へも參詣申すべくと存ずと答ふ。先づ之へ立ちよら

れよと云へど。日斜めに及び候、暮れ申さぬ間に相つどめ、やがてまかり歸るべし。各方は先づそれに御語り候へと云ひて、足ばやに通り過ぐ。何れも顏を見合せて心に掛り候體たらく、合點行かずと云ひけるが、彼は江戸より戻りて勤することもあるべしと覺兵衛云ひつゝ、坂田が方を守らせ居たる處へ間もなく、坂田、是も麻の上下ゆゝしう出で立ち、片手に念珠もちて家を出でたり。そやこそ坂田家を出でぬ。あやしや、不思儀と、人々語り合ひ、まつほどに、角野が門前へ來かゝりぬるに、角兵衛つと立ち出でゝ、是れ坂田、何れへとて、只今麻上下にてぎやう／＼しくは出らるゝぞと咎めたり。角野は七旬に近き男、坂田はまだ三十路にたらはぬ青侍ひ、常に老人故に言葉も慇懃に應答しけるが、今も少しくはゝ笑みて、小林寺へ墓參に罷越し候にて候と例のつゝしみ答へけるに、角野は坂田が、父母兄弟の命日までよく覺え居たり。其の日を繰り數へて、之は不思儀、今日も明日も御手前は御兩親、御兄弟の日にては之なく、何れの志ぞ。先づ是れへ立ち寄られよ、尋ね度事あると云ふ、坂田はなは慇懃に挨拶して、否、夕陽のある內に參詣をもとげ、後刻必ず是へ罷り歸り、宵の內は是にて物語り仕らん。先づ／＼失禮御免候へとて急ぎ行かんとする處を、二三人立ち出で戲ぶれ、一言云はまほしきことあり、まづ立ち寄られよ、夕陽は傾くとも、日は明日また出でぬべし。何はともあれど、さま／＼云ひ戲ぶれ、遂に手を取り、角野が座敷へ强ひて入るれど、坂田は迷惑至極、さま／＼にわび言し、やがて戻るべし、少しの間いとまを給れと、强ひて行かんとするを、人々はいつかな放たず、貴殿を止め申すこと戲ぶれ事には候はず、承れど今晩飯尾と御討ち果しあるべきにて、小林寺松原へ出で合はさるゝ由、傳へきゝ候ひぬれど、飯尾をもとくに、荒尾方へ同道して、人々をぞつけ置きたり、最早當所の者共、一同に聞きつけて打ち果たする事はゆめ／＼相ならずと云へど、坂田は驚きたれど、なはさる色

を見せず、さらぬ體に遁れんとすれど、人々は許さず。又人して、小林寺へ至れど、飯尾は本堂により、念珠をつまぐり居たり。此の者馳せ込みて、やは、飯尾、もはや知れたるぞ、果させはせぬぞ、坂田は角野氏宅へ引き入れて、何れも強く尋ねたるに、今晩貴殿と打果す約束のよし白狀に及べり。今は廣く人の知りたることゝ、果たさせはせぬ、早く歸られよ、いざ迎ひに參りたるぞと云へど、飯尾はおどろきもせず、一も心得ぬ事哉と空うそぶきて居たるを、人々何をあらがはれ候とも、論よりは證、相手白狀に及どれぬれどもはやかへし給ふも詮なし、いざ僞り給はで、我々と共に歸られよとあるに、さては坂田われほどはやり立ちたるを今更に腰拔けして云ひけるか、坂田が誠を申せしならで非是なし、まづ歸り申すべしとて立ち出る、人々前後に添ふて荒尾文右衛門方へ連れ行き、さて人して守らせて、その者は又角野方へ來り、飯尾が白狀せしよし云へど、坂田今はつゝまれず、大に赤面し、さるにては、飯尾、かやうに腰拔けて、武士の道を違へ、云ひ合せたることを背ける腰ぬけ武士、さりとは知らず、大事の命を延べくれよと僞りしを實と思ひしくやしさよと且つ怒り且つ悔い、是より扱ひになりたれども、兩人中々堪忍せず今は下にてさしおくべきことならず鳥取へ人を馳せて告げたり。荒尾も此の事を聞き、倉吉へ來り晝夜双方を扱けれども互に申切りて堪忍せず、武士が云ひはなちたる矢ごろ今更にたはむ事は叶はず此の段は幾重にも御免あるべしとて一かな聞かぬに人々もてあましけるが、さらど、今一度各へ申し入れたきむねあれど、何れも宅へ同伴あるべしとて但馬角野の宅に二人を招き、倉吉中の士を其の後に詰させ、さて曰ふやう、此の日頃、二人のことにつきて、肺肝をくだく數度なるも相州殿の御爲めの大切を思ふゆゑなり。さるを雙方とも同心なく、老人が辭は塵芥となり、今は、誰れ止むる者も是なく、心のまゝに本望遂げらるべきなり。さあれ、我れ不肖の身なりとも、家世々

長臣として、此度の口論和談の扱ひを取り結ばんとすれど、兩人共、武士の一言は身より出る汗の如くとて、互ひにひかれず、我も一度發せし言の葉を空しく捨てられて、白髮の不面目、之に過ぎさる事なし、われ思ふに、兩人は、是れ義心金鐵の如き勇士連なるさやうのものを、二人が二人ながらに果して、相州殿に對し、大不忠と存ずる故に言の葉を盡したるぞや、さるに徒らに廢棄され、長臣の恥辱祖先の面を汚す無念至極、此の上はまづ、我が皺腹を屠り、恥辱を見ぬ先きに終るべし。御邊等は、我が終生を見て後、兎も角も心に任すべしとて、羽織をなげすて、介錯來れと呼はりざま、もろ肌脱んとするに、兩人れどろき、左右にとりつき、只今の仰せ、一義、誠に膽に銘じ、感謝し奉る所、私如き葉士のため、御生害あらん事ゆめゆめあらせ給ひぞ、此の上は仰を背き奉らじ、御扱ひ畏れ入り奉ると、兩人互みにわび入りけるに、但馬顏色とけ、大に喜悅して、此の老人を助けらるゝと云ひ、相州殿へ忠節ぞと云ひ、旁以て必妙なりとて、其日直ちに酒肴を調へ、あいさつなほしの盃を取りかへさせけるが、其後飯尾、坂田、前の如く懇を通じ、間もなく二人共に役人になりて鳥取へつめたりとぞ。總じて女子は思慮あさく、玄ぞし變事、れどろきたる事あれど、あとも先きも省みず、云ひ出でゝ、中々に損ずるか多かるを、此の女、不思議をひとりむねにこめて、忘れず、もらさず、遂にかしこき武士が狗死をとゞめたる心ざま、あつかひ方かしこしとれもふまゝに、なが〳〵しくもかくは引き出でにけり。

赤福餅開業祖　濵田智惠子の小傳（承前）

岡田杏次郎

祖母の君身まからせ給ひし後は、唯祖父の君のみなれど、朝夕怠りなく仕へられにき。扨其の年も暮れて慶應と改元せられしが、翌二年に至り、父君の弟岡田傳

氏を失ひぬ。氏の齡僅に二十四歳、誠に惜むべきなり。此の年九月三男某生る。これ後に岡田氏を繼げるものなり。明けて慶應三年に至りて御蔭參と云ふもの起りぬ。五畿内中國より伊勢參宮するもの雲霞の如く群集せり、誠に前古未曾有の盛況なりき。然れども、此の御蔭參は施行主義にて、飲食宿泊等殆無料なり。所謂

エジヤナイカ〱御蔭ジヤ〱

とはやし立て〻一市狂奔、唯徒に騷擾喧號せしのみ。或人當時の狀況を語りて云ふ。此の時宮川以内は別天地の有樣なりき。男女互に裝を易へ、老少競ひて奇異を衒ひ、道路相逢ふ人、知ると知らざるとに拘はらず、揶揄相挑み、賢となく愚となく諧謔を弄して、狂戲百出、癡態萬狀、人をして其の醜に堪へざらしむ。例せば、馬に乘るものは無料にて乘り、駕籠かつぐ人は無料にてかつぐ。然も其の人本業の馬丁にあらず、本來の雲助にあらず。唯一時の演戲のみ。眞にこれ白日官道公々然として一種の假裝會を開けるなり。されど、馬丁は馬を山林に追入れて乘客を困らしめ、舁夫は故らに迂路を廻り、客を曲巷に放ちて其の方向に迷はしめ、歸途又人を要して乘らしむ。强ひらる〻人拒むを得ず。怒れば即エジヤナイカ〱と云ふ。滑稽笑ふべしと云へども、惡戲も亦甚からずや。店頭に釣り下げたる草鞋、並べある果物など、客の取去るに任す。客もし多く價を投ずるも敬禮を施すことをなさず。行人時に或は隊伍を組みて富豪の家に闖入し、放食暴飮去るに臨みて御蔭ジヤ〱を連呼せりと云ふ。亂暴狼藉こ〻に至りて實に大不敬と云ふべきなり。

當時吾が家未微々たりしかど、幸にして此の厄を免れたり。されど、翌慶應四年のはじめ、傷寒病流行し、不幸にも父君これに傳染せられたり。此の時母君は一女兒を分娩して僅に五日を經過せしのみ。未産床に在りて任意に看護すること能はず、こ〻に家妹二人其

の勞に服しけるが。次て二人とも亦之に傳染し、終に一家を擧りて同じ枕に伏すに至りぬ。他病と異り傳染病の事にしあれど、今は誰とて近づくものなかりしが、曾て父君を德とせし某氏と、母君の兄上姉上とは、此の有樣を傍觀するに忍びずとて、自決心して看護の勞を取らせ給ひき。此の際最感ずべかりしは、一僕二婢の行狀になむありける。彼等は姻親あるにあらず。唯一時の勞役者のみ。然も吾が一家を擧りて傳染病に罹るに方り、自家の招還に應せずして云ふ樣、たとひ傳染して此處に斃るとも、如何んぞ己を全くして棄て去るに忍びんやと、三人詞を同くして終に動かざりき。後皆これに傳染して、一僕終に之が爲に斃れぬ。嗚呼實に痛しき哉。義によりて命を捨つ。そもこれ何の因緣ぞや。既にして父君は二月十二日、僅に三十二歲を一期として空しく此の世を棄てさせ給ひき。母君後に此の時のことを語らる丶樣。

父君は生來憫み深き性質なりしが、死病の原因も全く憐憫の情より起りしなり。其は曾て隣町より雇ひ入れし下婢ありしが、兩親ともに病に臥したりとて、介抱の爲に暇申出でたり。父君は其を許されしが、兩親一時に病に罹りては、介抱定めて困難なるべし。家の樣子や如何にかあると、一日その家を訪はれしが、極貧のものなりけれど、日々の生活さへ覺束なく察せられしにぞ、持合せの一分銀を投じ、尙又その下婢たりしものに云はる丶やう、打ち見る所にては、早速全快すべき病人としも思はれず。斯く親子共に空しく病床にさまよひては、日々の生計も困難なるべし。汝一人は我方より食通ひにて看護せよ。此儘にては續き難からんと云へど、一家のものども皆々感涙に咽びたりとぞ。やがて其の如くせしに、豈料らんや此の家の病氣こそ、實にチブスにてありけめとは、吾が家終に之がために襲はれて、一族前後十有九人、同じ枕に伏すに至りぬ。

父君既に身まからせ給ひぬ。看護の人々、この事をも

も母君の聞かれなど、共に空しく成らせ給ふべくもやと、秘して知らしめざりしが、送葬の當日に至りて、母君の姉上なる人の云はるゝやう、假令ひ此の事知らしめて、其の場に絶え入るまでも、夫妻一生の訣別なれど、此の事聞かしめてよと乞はせ給ひしかど、然らどとて告げ參らせしに、母君は聞き給ひて暫し茫然たりしが、やがて人々に抱き扶けられて、父君の遺骸の前まで運ばせられけり。打ち見る所、その御顔ばせの骨高く痩せさせ給ふ姿、その唇舌など、邪熱の爲に純黑に染められし樣をつくゞゝと眺めさせ給ひけるが、やがて人々を顧みて、斯くまで病の激しくありしからは、迚も助からせ給ふべき御命にてはあらざりけり。今は歎くとも詮なし。跡に殘りし祖父の君はじめ、小兒等の介抱こそ肝要なれと、茲に翻然として斷念せられければ、看護の人々も始めて胸なでおろしぬ。母君時に年三十三。後にて語らせ給ふ所によれど、

かゝる大悲憂の時には、決して涙の出ぬものなり。涙の出づるは泣くべき餘裕あればなり。此の時吾が身は、父君をも、兼て家事萬端に當らざるを得ざりしかど、悲哀の情も目前の危急に排斥せられて、泣くさへ心のまゝならず。況して涙の出づべきものかはど。

あはれ人の命や、白露の朝をまたでこぼれゆく玉の緒にさへ結びかねるぞはかなかりける。父君今は世にまさず、無くてぞ人の忍ばるゝならひ、乞ふ少しく父君のことを語らしめ給へ。

先考諱種助。幼時稱龜之助。祖父長治郎君第二子。天保八年某月生宇治鄉。性眞摯敦厚。夙好學受業神風館爲田只靑氏。然家道貧窮不能專心從事。嘉永七年二月十日娶宇仁氏主宰家政。時年十八。方此時家道益窮乏。先考即與妣相謀各別其業内外協力以整理家政。先考執業夜以繼日。其辛苦勤勞殆有不可名狀者。然而先考處此際仕親至孝。朝則迎意歡承夕則撫摩省察。未嘗怠一日也。先考又注意家業改良。幼爲精製

之餅名赤福餅。吾家之聲價證於此矣。既家道稍優。即爲他謀而不辭已勞人多德之。生平喜俳諧又嗜生花茶技。忙裏偸閑翫之云。慶應四年二月十二日病歿。年三十二。

ことし十月三十一日、われ母君を喪ひまつりて引籠りけるに、生前のこと何くれとなく書きしるさむやと、日々筆とりて、涙ながらに心慰めける折しも、父君の妹なる人、志摩の國より罷越して、過ぎし昔のことなどいと懇に物語せられけるに、吾等が幼くて知らざりしこと、又聞もらしたる事などありて、耳新しく打聞かれ、特に父君のことは最も詳らに話されけれど、聞くたび毎に鼻うちかまれて、眼もあやなりき。今その打聞のまゝ一二逸事を摘録せんに、

◎赤福餅と云ふ名は、此方父君の名付けられしにて、其れまでは唯餅屋々々とのみ云ひ來りしなり。吾等父上の時は、並製の餅のみなりしが、此方父君に至り、初めて上製を作られ、其れより赤福餅と呼びなせしなり。今の餅盆の上下二等に別れしも此時のことなり。盆の作り方、茶碗の形など、皆こなた父君の考へられしなり。

◎此方父君の家業に熱心なりしこと、驚くべく感ずべし。例へば夜分など家にて働かるゝ時、客人が此の赤福餅を如何に品評すらんとて、客人が立去るや、直に其の後に尾してひそかに其の評判を探られき。こは度々の事にて、いつも浦田坂あたりまで到らせ給へりとぞ。扨又その品評を聞きて、誰が家の餅は價廉なり。某家の餅は味美なりなど云へば、直に人して其の家々の餅を取寄せ、まづ自家の餅に標準を取りて、其の量目を比較し、次に其の味を吟味して、成程甲は美味なり。乙は廉價なり。吾は之を兼ねざるべからずとて、自家改良を加へらるゝこと度々なりき。又この品評會は、爾後多くは砂糖餅米などの相場高下の際にありて、開かるゝを例とせられき。

◎此方父母は、唯この地方にて競爭せられしのみな

らず。年々御師の代官として諸國へ旅行せらるゝ人に賴み、必歸途には其の國々に名ある餅を購ひ來らしめて、廣く諸國の同業者と競爭せさせ給ひしなり。草津の姥が餅、大津の走井餅などは、年々この品評會に入りき。扨此等品評會にて、自家の餅が最優等を占めたる時は、其の喜び喩ふるに物なく、家人一同を呼び集めて說き諭さるゝやう、吾が赤福餅は今日このまゝの製方にて宜し。此の通りして客あしらひ油斷なく働かば、家の繁昌疑ひあるべからざるなり云々。

扨送葬も形ばかりに營みしが、餘の病人は枕を並べて病床に在り。誰か此の次ならんと安き心もなかりしが、間もなく當歲兒の身まかりたれど、大事の前の小事なれば、さまで哀しむべくもあらず。唯他の病人の氣遣はしくて、母君は自身の病さへ打忘れて、他の看病をぞ勤められけるが、氣勢や張らせ給ひけん。そのうち日々に元氣を回復せられしかば、やがて他の看病人をも謝はらせ給ひて、一人專看護の勞にぞ當らせ給ひける。

精神一到神も憐み給ひけん。跡に殘りし病人も、日を追ひて漸次に快方に赴きしに、此に又他方に托けありたる次男の、今は長子なる某が、更に此の同じき病に犯されて家に歸りけれど、漸う力づかせ給ひし母君の氣勢も、此に至りて又萎れ、殊に祖父の君は父君のうせさせ給ひしより、此の長子をこそ杖とも柱とも賴まれつるに、今まのあたり斯る憂目を見せられけれど、身も世もあられぬ心地して、一時に失望落膽のあまり、此の年五月十八日終に父君の跡追はせ給ひぬ。あな痛はしとも痛はし。母君の悲歎思ひ奉るさへ愚なりや。家は暫らく淚にて漂ひたりき。覺めては泣き泣きては覺めて、晝夜のけぢめさへもわかず唯淚にひちて明し暮しつ、人々眼より眼に淚を以て迎へられ淚を以て送られけり。斯くても命はありけるものよとは、後にて母君の語らせ給ふことなりき。

さる程に、春過ぎ夏來りて、夏もやう／＼白妙の衣ひきかづく頃となりぬれど、病人皆々本復したりけり。此に始めて愁眉を開きぬ。されど、家政は困憊疲弊のあまり一時に舊貧に陥りてき。母君の當惑それはた如何に、今や良人なくして遺子四人あり。長子僅に十一歳。誰と共にか此の貧家を經理せん。茲に母君は二人の家妹を助手としてかつ／＼に家業に從はれけるが、此の年明治と改元あり。明くれど明治二年なり。折しも兩宮式年の遷御式ありて、其の繁昌せしことをさ／＼御蔭參にも譲らざりき。されど、故なくして狂奔せし先の御蔭參とは其の撰を殊にし、孰れも皆曠世の大典を拜觀せんとて群集せしものなれど、誠心面に溢れていとも敬虔なりき。吾が家何の幸ぞ、ゆくりなくも此の餘澤を被りて、こゝに家政を回復することを得たりける。扨當時吾が家の狀況は左記の赤福亭記に詳なり。叙事や、先後するところあれども、亦以ちて其の大概を知るに足らんか。今その全文を謄録す。

赤福亭記

亭面鑾川而背皷岳右仰神林而左望月宮。四時之景皆奇。此宜以目福名者而特名以赤福者。蓋亭主誌其所感也。其所謂赤福者何。曾祖創製之餅也。何以名赤福。其外膚塗豆餡如塗塗附然。故味美而色赤。土人因稱曰赤福云。傳至其父早死。四子半在襁褓。一貧如洗。錢篋中僅存山田鈔四葉耳。然而未亡人奮勵刻苦不敢以赤貧減赤福之味。適際

太神宮奉遷之季。賽客之自四方來者皆喜其價廉而美味日麕集其亭。數月之間忽得巨資而赤福之名亦遂駕阿部川糕而軼乳母餅矣。時亭主季纔十有一。猶能記阿母之艱苦。今茲又屬　奉遷之年。阿母既老家道愈優。亭主兄弟皆有感於往年之事。乃將又益廉其價而美其味上以答。　神恩下以酬母德。於是先脩其亭來乞記焉。余亦因有所感。古人云憂勞可以興家逸豫可以亡身。凡來啗此餅者能知赤貧之生大福則此赤福不啻爲其口福也。亭主爲誰。姓濱田名種助也。

明治廿二年九月識於林崎寓堂

羽港　有馬　轍

（未完）



包の記

故有住齊先生教授

門人　なみ子　鑅子　筆記

櫛包　二枚にて折る、表大奉書、裏紅奉書。紙取は

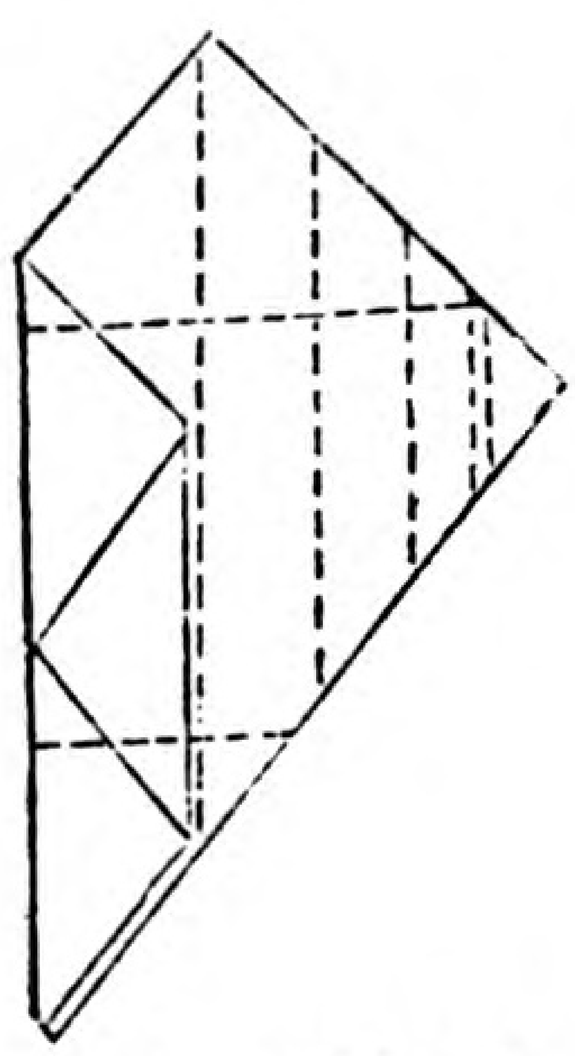


裏曲の法による。には

ひを採り、形紙を造りて折り上る等常の如し。

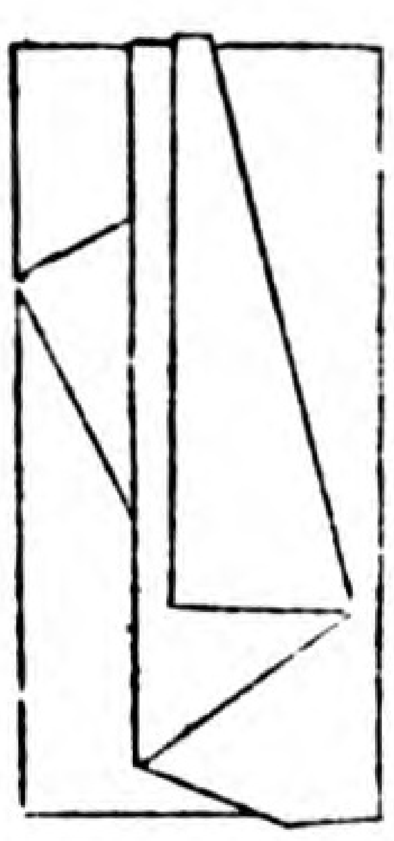
圖に示せる上下の點線は裏に折り反す印なり。

解の圖

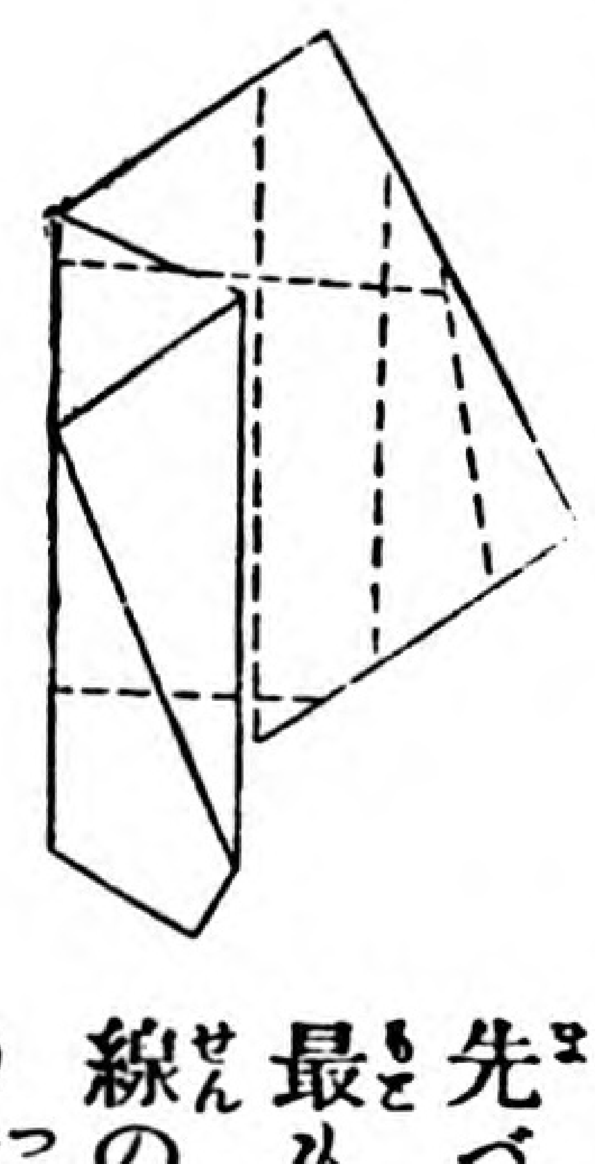


左の方を折り、右の方を開きたる圖なり。其の最も右の端に在る點線は外に折り、其の次は内に折り、其の次も亦内に折りて、第四線目のは外に折り、最も左にあるを内に向けて折り、上下の點線を裏に折り反せむ折り上るなり。

櫛包　是も櫛包なり。總て折りかたは前に仝じ。



解の圖（一）

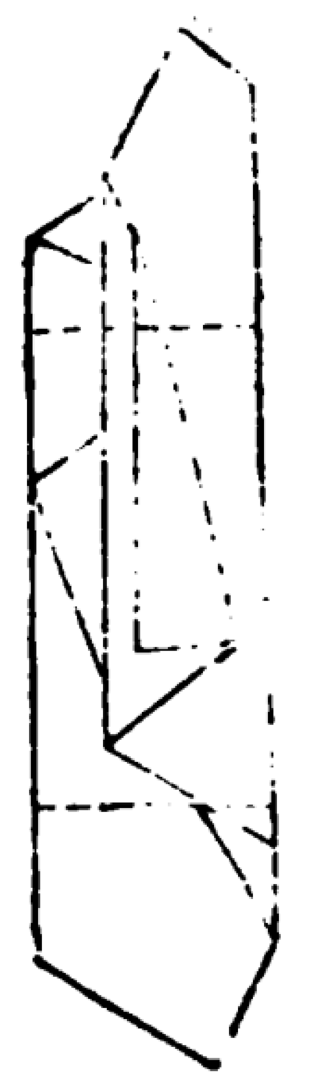


先づ圖の如く折りて、最も右の端に示せる點線の處を内に折り、其の次のは外に折り、最

圖に示せる上下の點線を裏に折れば

も左に示せる點線の處を內に折れば解の(二)圖の如くなるべし。

解の圖(二)



斯の圖の上下の點線を裏に折り反せば折り上る。

茶の湯

孤峰菴篠仙齋不羨
關　葦雄

茶禮初學(續)

座したらば不敢、左手にて柄杓を取(但し柄の中節の下の方直際を持)柄杓の合を左の方へ起しながら右手を添篤と搆へ、右手にて飜器の中の蓋置を出し、(但し茶の湯式正には、必ず青竹を用ゆ)例の定席へ置付、右手にて柄杓を引、居前を直し、體格を正し、精神を調、呼吸の息を平等になし、而後飜器を左手にて僅少進め、(但し此進める所以は居前に合せるの必要在爲なり)一禮をなすべし、衆客も一同辭宜すべし。(次に亭主濃茶を點る手續の事は、本誌一百四拾七號以下五十一號迄に掲げたれば今爰に再出せず)次に上客は先以菓子の挨拶をなすべし。偖御菓子は如何にも結搆に御座候、御思付も格別にて、御心入幾層相顯れ難有存候、調製は何方へ被命候哉と尋ぬべし。答辭は手製と歟、或は壺屋、出羽、風月、藤村、越後屋、野村、等、製造家の實際を詳に答ふべし。(但し菓子の品目は、何品と爰に名稱しがたし、其種類甚だ多く、又亭主の好み注文もあるべけれど、宗匠に相談して指敎を受べし。次に上客、御茶は美麗に有之、此初咲は珍花に有之、御庭花にても有之哉、御生方も能調、ながめ一際目立候樣

拜見仕、長短能修り、又御花入も御取合宜敷、何人の作製に有之歟不眼には一向相分り不申伺たし、亭主は其作者及銘あらむ子細に告示べし。其他濃茶點前中寂寞ならさる樣、閑話あるべしと雖、餘り俗談世間咄しに流れ、物價の高低を論じ、或は政事談に流れ、政憲派の盛衰曲直、是非を論ずる事を禁ず、亭主方へも同樣清談あるべし、されども、茶を茶碗へ入るを認めたらむ、咄を仕掛べからず。是は自然茶碗につむきの飛入を忌む故なり。其他前號掲載の如く心得へし、茶點終り、道具客方より戻りたらむ、亭主出て一禮取入べし。此時上客は勿論、客方茶入、茶杓、袋等觀識者あらむ、亭主へ對し言て差閊なし。又鑑定難及時は、亭主へ尋ぬべし。亭主は無包臓答ゆべし。總て箱書付類の拜見を乞べし次に亭主は右三器持入、直に出で御退屈に可有之と云、偖廣間有時は、彼方へも釜掛置候間、何邊より御通り可被降、又居付ならは、炭を直し、薄茶を點まゐらすべしと申述べし。亦此處より居付の付薄茶と、披の間へ通ると、事柄兩端に亘り、難認塲合もあれむ、次號に區別して讀者の解し易きを旨として可掲

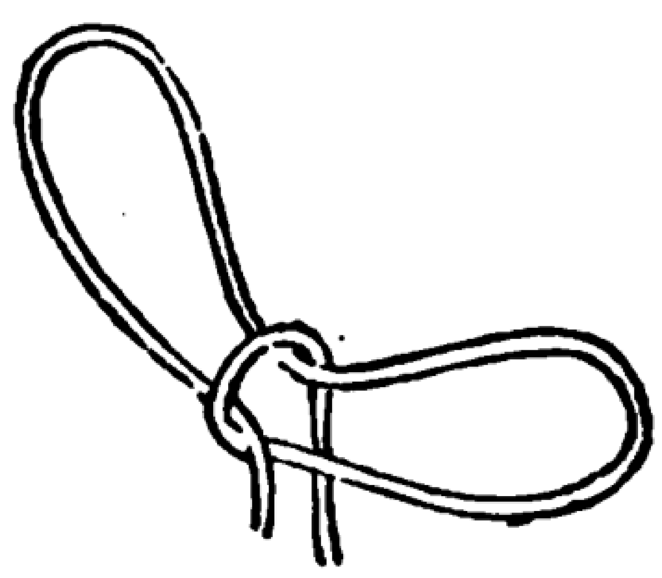
新撰　結物百種

百草庵一無

四方封　26

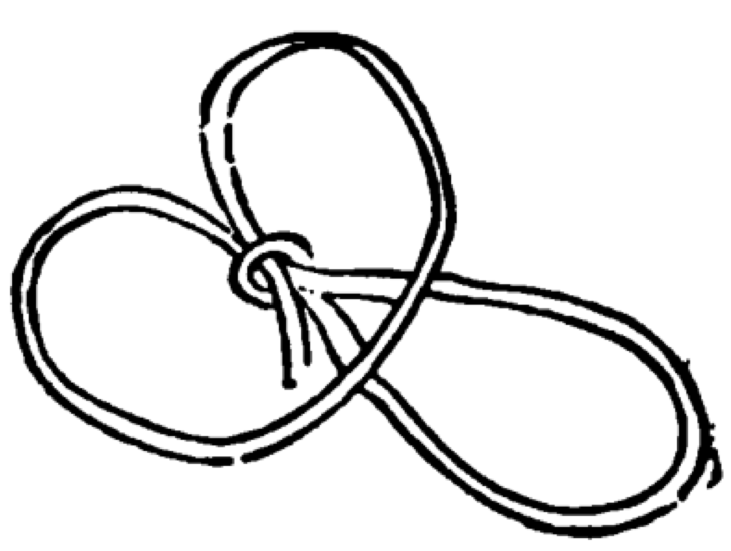
是は袋の紐の結び樣なり。茶碗の袋の緒、又は茶箱の緒等に用ゐてよろし

第一圖



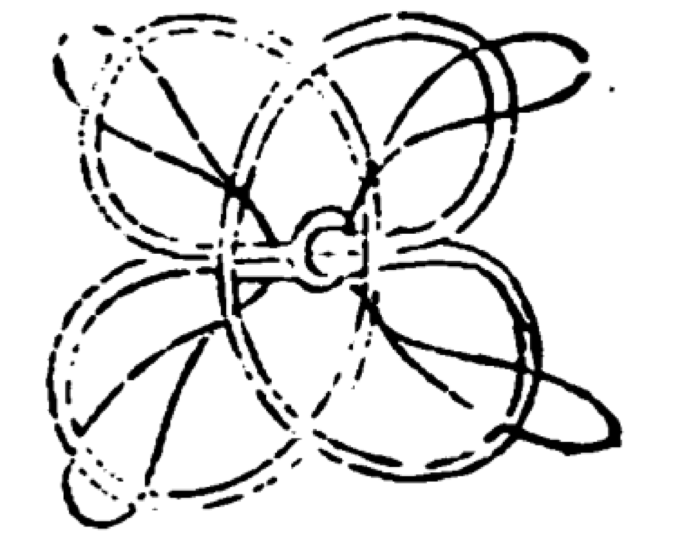
左の方を上に折りかけて第二圖の如くす

第二圖



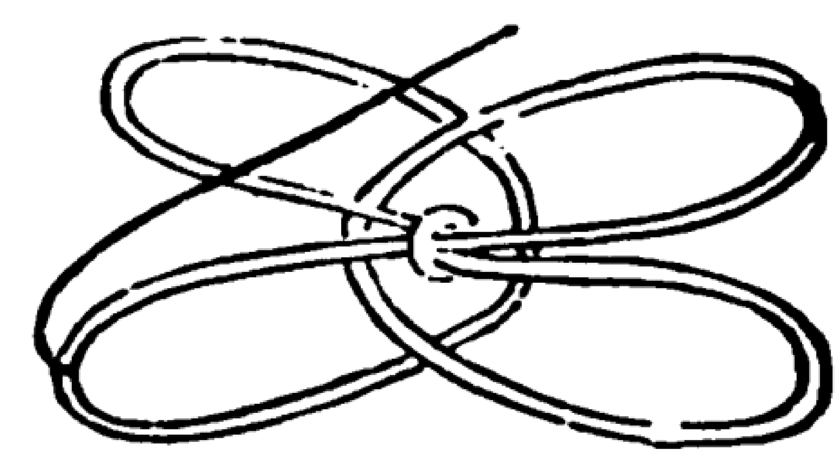
右の方を折りかけて第三圖の如くす

第三圖



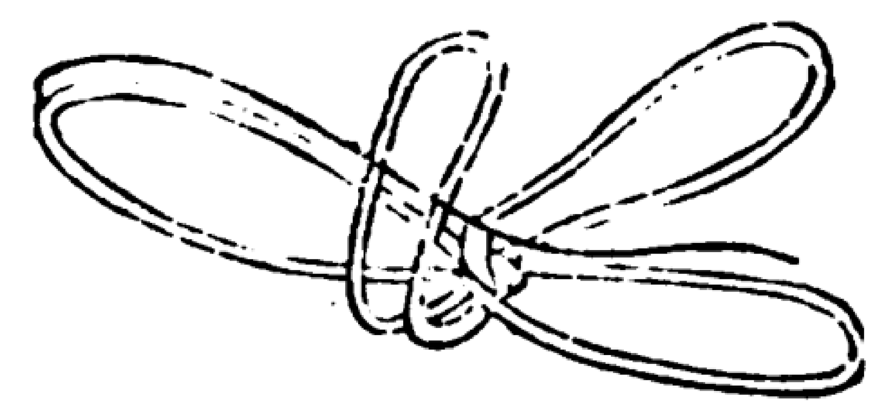
黒線の通りに引出せば第四圖の如く四手になる

第四圖



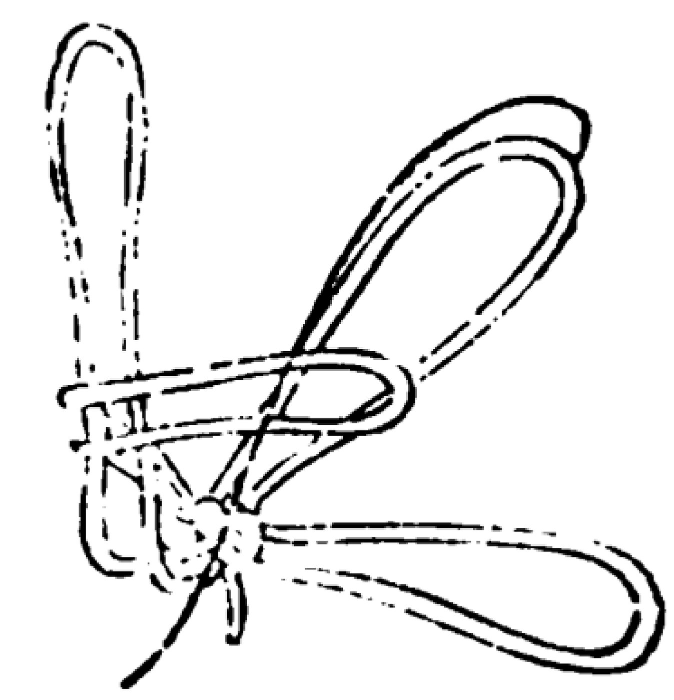
黒線の通りに折りて第五圖さなる

第五圖



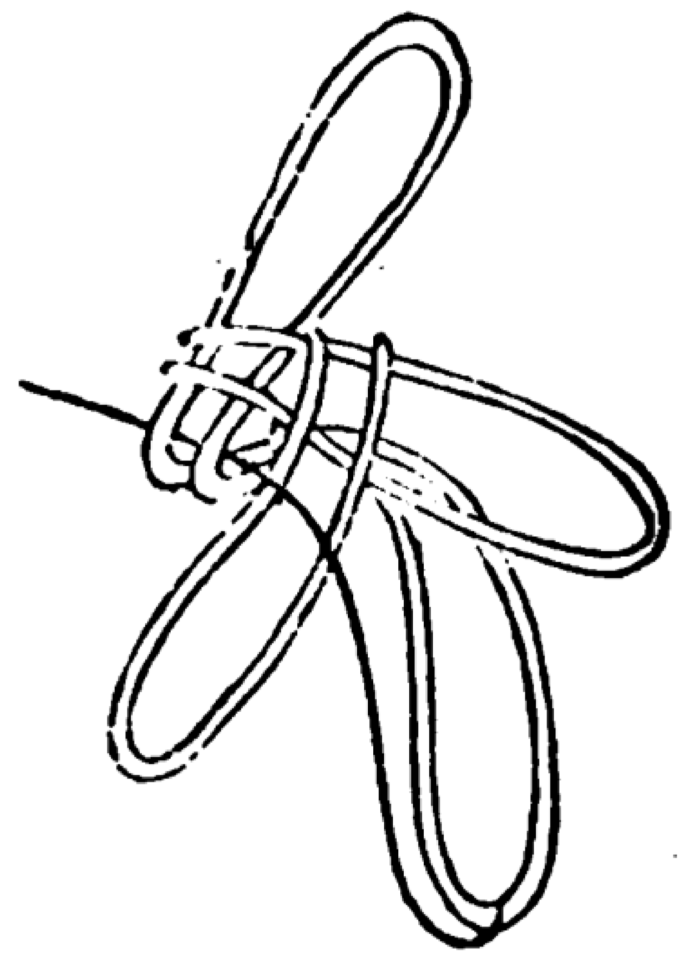
黒線の通りに折りて第六圖さなる

第六圖



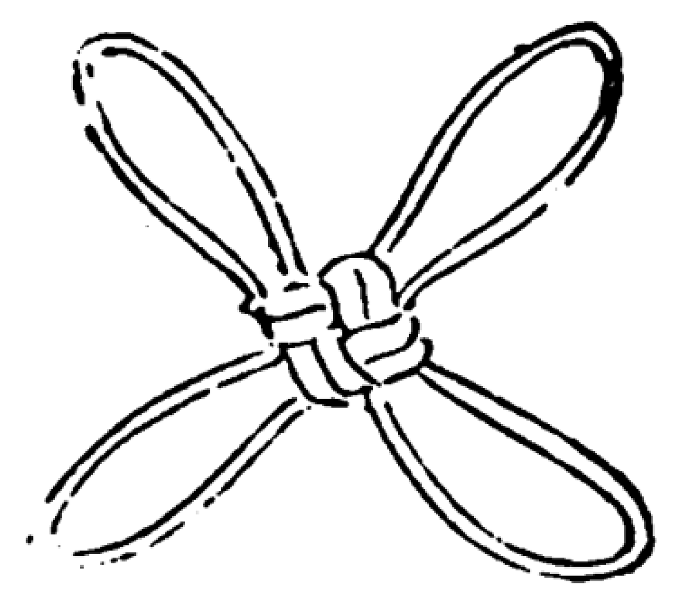
黒線の通りに折りかけ第七圖さなる

第七圖



黒線の通りに引き通して第八圖さなる

第八圖



結び上り

たちぬひ

西山たい子

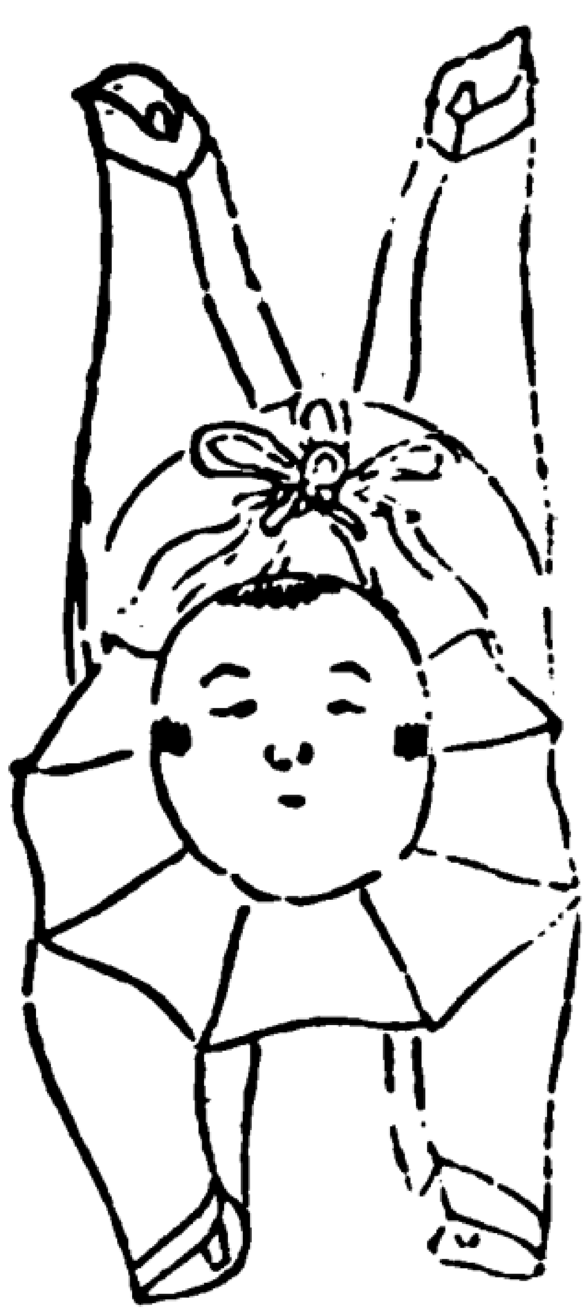
(百三) 這ひ人形袋

此の袋は、二寸四方ばかりの布、縮緬、唐縮緬、更紗、金巾、何にてもよろしきを二つと、それと同じ大さの布二つと、口布、巾七八分、長さ四寸ばかりなると、又袖口裾の布、巾三分、長さ一寸ばかりの布四つと、他に小さきよだれかけの布とを要す。

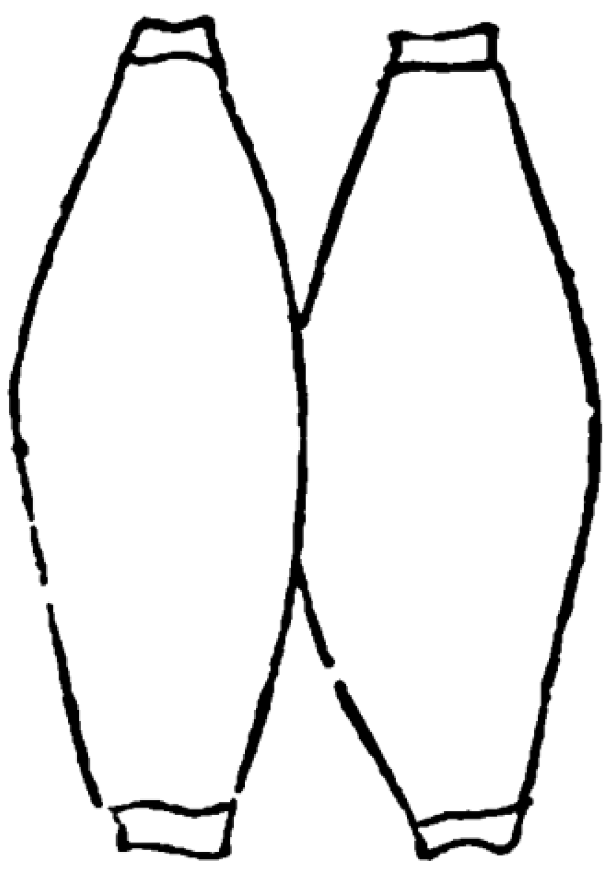
まず首を丸く少し平ためにくゝり、それに目鼻口を書きおき、胴布を裏表合せて、五分ばかり一方をづらせて、二つに折り、その折りたる所に、袖口布、褄布を各細く二つに折りてぬひつけ、三四分ばかりあけおきて、斜めに上までぬひ、四隅をさやうになして、底になる方、即ちその短かくなしたる方の下を左右ぬひ合せ、又長くなしたる方の四隅ぬひたるをもぬひ合せ、口

布を表にぬひつけ、裏にてくけ、首を兩手になさんと思ふ上の眞中にとぢつけ、又四つの口を手と足に見て、之にも白き布を、極めて小さく折り、口の間にはさみつけ、小さきよだれかけをぬひて、首のまはりに結びつくるなり、而して、口布に穴をあけて、口糸をよきほどに通しつくるなり、此の形誠に愛らしく、春長の細工におもしろけれど、此處にものなすなり。左の圖を見て、よろしく推しはかり給ひてよ。

その圖



底の圖



だいどころ

四季料理の取合（續）

夏の部

椀盛

鷄卵、はんぺん、じゅんさい、いはたけ○むしり海老新さといも、いんげん、花柚子○鱸脊切、じねんじよ、冬瓜のせん○鯛、火どりゆば、いんげん、花柚子○あひ鴨、竹のこせん、いとみつば○煮ぬき豆腐、竹紙こぶ、花菜○こち、青ずゐき、柚子○ひとしほ、鯛、冬瓜、じゅんさい○ばんつくり身、うちはなす、柚子○ばんそぼろ、新いも、花柚子○青さぎ薄作り、早松茸、冬瓜、柚子○すゞきおろしみ、へぎなす、せんまい○うづらそぼろ、青ずゐき、柚子○片身おち、むしり冬瓜、さき茄子○すゞき作り身、さきなす、茗荷たけ、○鹽くじら、茗荷せん、うちはなす○はもの骨切、さやゑん豆、青山椒

燒物

鯵の鹽やき、しん生姜○あゆの鹽燒、青山椒○いさきの鹽燒、すり生姜、大鯵鹽燒、たで酢○鯛の松笠切、青山椒、醬油付燒、○魴魚一鹽、酒の付燒○鮎をひらき、たで醬油付燒○じねんじよ串にさし、柚子味噌田樂



學園

秀歌集（三十九）

○

鹽井正男

月清みねざめて見れどはりまがた
むろのとまりに舟ははてにき

○これは八田知紀の歌にて、しのぶ草にあり。京への旅ね、むろのとまりにてよめるなり。○月清み、月の清さにといふことなり。月の光りの清くすみたるなり。○むろのとまり。播磨にあるなり。むろは地名にて、とまりとは泊にて、舟のとまる所の意なり湊といふもおなじものなり。むろは、東西の舟路、舟の泊る所なりし故に、むろのとまりといへるなり。
○舟ははてにき。舟行の終りたる意にて、やがて、舟のとまりにつきたるをいふ。
○一首の意は、月の光りの清さに目をさまされ、見れば播磨潟の室の泊りにいつしか舟は着いたといふことにて、舟の中にていつしかねむりて何處とも知らず漕がれ〳〵行きけるが月のあまり清きにふとねむりさむれば舟は既に室の泊りにつきたりしけしきなり。をりからの實況目に見るごとくうかびていと面白く且つ優にみやびやかなるけしきの歌なり。

○

別れ路はなれたるみちと思へども
けふをはじめの心地こそすれ

○これも仝人のなり。おなじ時、故郷を出づるをり

から別れをしみてよめるなり。〇別れ路。人と別れて行く道の意なり。やがて、故郷のこひしき人に別れて行くことをいへるなり。

〇一首の意は、人とかく別れて行くことは今日はじめての事にあらず、かねても幾度か馴れたるみちとは思へども、なほ別れはをしくて、今日はじめて別れ行く心もちがするワイといふ意にて、別れの毎時にをしき人情のまことをうたひて、あはれなる歌と云ふべし。

〇

別れぢを思ふばかりの旅ならで
　　かくまで袖はぬらさざらまし

〇これも仝人のなり。一とせ國にくだりける時、旅裝なにくれの事いとねもごろにあひはかりける人々の心しらひをかたじけなくて、知紀のよめるなり。

〇思ふばかり。思ふのみといふことにてやがて、人と別れ行く道のかなしさを思ふのみといふ意なり。

〇袖はぬらさざらまし。袖をぬらすとは涙をこぼすことをいへるなり。ましはむに仝じ。むの轉じたるなり。袖はぬらさざらむといふも仝じ。

〇一首の意は、別れて行く道のかなしさのみを思ふ旅ならむには、かくまでいたくは泣きて袖はぬらさざらむ。別れ路の悲しさのみにはあらじ、人の厚き情ありがたくなつかしく思ふからに、一層涙のこぼれかゝるなりといふ意にて、さしたるところはあらねど、これまたまことを得たる情歌とやいはむ。

見るがうちになみぢへだてゝ山のはの
　　ほそくなり行くわが心かな

〇これは、おなじ時、海路にてよめるなり。〇見るが中に。俗に見て居る中にといふことなり。別れ來し陸路の方を見て居る間に海路のいつしか遠くなりゆくけしきなり。〇なみぢ。波路にて海のことなり。舟の行くなれば路といひ、且つ海は波のある所なれば波路といへるなり。なほ、空のことを雲路といふ如

し。○山のはの、山のはの如くといふ詞にて、見る山のはの遠くなりて細くなりゆく如くといふ意をいへるなり。

○一首の意は、別れこし陸の方を見て居る間に、いつしか波路はいよ〳〵遠く隔たりゆきて、來し方に見ゆる山のはも次第に遠くなれど細くのみなりゆき、その山のはの如く、いよ〳〵遠く別れゆくわが心も心細くなりゆくワイといへる意にて、誠にけしきこゝろあらはれてやさしき歌といふべし。

○

たらちねの袖にすがりて下り立ちし
　　むかしこひしきはや川の水

○これも、仝人の歌なり。○たらちね。母親のことなり。乳を足らはし育つるといふ意にて、もと母親の枕詞に用ひたるを後には、直ちに母親のことをいふ詞ともなれり。また、兩親に通じていふやうにもなれり。○下り立ちし。河邊に下り立ちて遊べることのことをいへるなり。

○一首の意は明かなるべし。もとすみたるわたりのはや河邊をすぎて、昔、母親の袖にすがりなどして其の河邊に遊びたる時の事など思ひ出してこひしく忍びたる歌なり。それといふところはあらねど、やさしき歌とやいはむ。

○

朝霧にしつまりはてしをやま田の
　　はなみのすゑをわたるかりがね

○これも仝じ人のなり。○しづまりはてし。俗に靜まりきつたるといふことにて、極めて靜になりたるけしきなり。○をやま田。山田といふに仝じ。をは單に語調を助けむ爲に添へたる詞のみ。○はなみ。稻の穗のなびくさまの、波のやうに見ゆるより、それに取り立てたる詞なり。○わたるかりがね。飛び行く〳〵といふことゝなり。

○一首の意は、朝霧立ち極めて靜まりきつたる山田

の、波のやうになびきて見ゆる稲穂の遠く列なりたる彼方を厂が飛び行くよといふことにて、誠に土佐派の山水畫にも見るべき様なる麗はしき歌にこそ。

○

あらしよりまづうづもれてあはだ山
　雪こそつもれ岸の松はら

○あらしよりまづうづもれて。松ふく嵐が、先づ第一に埋れてといふことにて、嵐が埋るとは、降る雪に嵐のたえてきこえずなりたるけしきなり。雪ふる時は、なか〳〵にものしづかなるものなり。○あはだ山。京都東山の隣なり。この歌は岡崎に住みける頃の歌なり。○雪こそつもれ。雪が降りつもるといふことなり。○みねの松原。栗田山の峯の松原なり。松原とは松の多く生ひたれぞいふなり。

○一首の意は、松ふく風が第一に雪にうづもれて、いとしづまりに靜まりゆきて、栗田山の峯の松原に雪がいよ〳〵深くふりつもるよといふ意にて、いと明けし。いとしづかにふかくふりつもりゆく雪けしき見えて、いとおもしろし。

源氏物語講義（二十）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

參りてはいとゞ心苦しう、心肝もつくるやうになむと、典侍の奏したまひしを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、實にこそいとしのび難う侍りけれとて、やゝためらひて仰事つたへ聞ゆ。暫時は夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひ合すべき人だになきを、忍びては參りたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝを、疾くまゐりたまへ、などはか〴〵しうものたまはせやらず。むせかへらせ給ひつゝ、かつは人も心弱く見奉るらむと、思しつゝまぬにしもあらぬ御氣色の、

心苦しさに、うけたまはりも果てぬやうにてなむ、罷りいで侍りぬるとて御文奉る。

○參りてはいとゞ心苦しう云々

命婦は北の方の言葉に誘ひ出されて、今やう〳〵口を開きて語り出せるなり。この一句は、先日勅使となりて此の里亭へ參りたりし典侍が、禁裡にて陛下へ申上げし詞を、そのまゝ北の方に噂する所なり。此のないしのすけの御使に參りしことは、この物語の表面には顯れぬ事なれども、蔭の幕にさることのありしなり。夫を、此のゆげひの命婦の言葉を假りて顯したる所なり。此の物語には、かゝる筆法甚多し。これ文章にれくあることを知らしめたる作者のたくみなり。さてその典侍の言葉に、二條の里亭へ參りて、實際其の光景を見ては、內裏にありて思ひはかりしよりも一層心苦しく氣の毒にて、眞實心も亂れ腸もちぎるゝやうに御座りましたと、彼の人が陛下へ奏上げられたるを、私も傍にて承りて居りましたが、唯今自身に爰に參りて、まのあたり御樣子を見奉りますれど、私のやうな深い思慮もなく、淺果敢な心のものにても、其の折のことまで思ひ合せられて、內侍のすけのごとき感情深き人は、なるほどさも在つたであらうと、憚ながら御いとをしさの餘りに、忍びこらへ難き程に存じ奉りますといふ命婦が挨拶の詞なり。○物思ひ給へ知らぬ心地にもとは、吾が身を卑下して言へるなり。內侍のすけの詞をかりて、堪へ難き情を述ぶる所に、一層感情の深きものあるを覺ゆ。○つくるやうになむの下に、侍りしといふ詞を含めて省きたるなり。○奏したまひしをの下には、命婦も其の折御傍に候ひて承り居りしが、唯今自身爰に參りて、現在に御有樣を見奉れむといふはその意を補ひて見るべき所なり。○內侍のすけとは職員令に、尙侍、典侍、掌侍とあり。卽其の典侍のことなり。

○やゝためらひてれはせでと傳へきこゆ

前段一渡の挨拶を述べ畢りて、女ごころの涙もろさに、命婦はまたも口隠りしが、暫時こらへて御勅諚を傳へたとなり。ためらひては、しばしこらへむとて躊躇したる意なり。

○しばしは夢かとのみたどられしを云々

以下陛下の御勅諚を、その儘に命婦の語るなり。陛下の仰せらるゝには、御息所の世を去り給ひて後の當座、暫時の間は現とは思召されず。夢ではないかとばかり御心迷ひが致されたが、夢ならば今は醒めねばならぬ。夢にはあらぬ故に心はれちつきても、猶醒むべき方もない。さてはいよ／＼亡き人となら別れたと思へど、こらへやうもない。せめては誰かゆかりのものにてもありて、亡き人の噂話でもしたらば、まぎるゝこともあらむかと思へど、其の人もない、誰噂しあふ人のなきのみならず。此の歎きをいかにせばよからむと、語りあはすべき人さへ宮中にはなき故、せめて其方なりとも宮中に居れば、亡き人の噂なりともして、心を慰むべきに、其の話相手に、何卒參內しては下さるまじきか。表面の參內が憚り多しとならば、內々夜陰をはかりてなりとも參られよ。若君源氏君も、其方にのみありては、甚不安心でならぬ。其方にて、女房たちの泣き哀みて居る露つぼき中に日頃を送つて居らるゝも、小供心に哀しからうと思へど、一層不憫に思召さるゝ故、其方もそこを思ひやりて、若君を引連れ、共々に參內するやうにしたまへと仰せらるゝなり。○たどるとは手取るなり。暗き所などにて物を手してまさぐることをいふ。それより遷りてこゝは覺束なく月日を經過するよしの意に用ゐたり。○露けき中にとは、二條の里亭の涙しげく悽愴たる中にの意なり。秋の景物なれど草の縁を加へ採りて斯くいへるなり。

○などはか／＼しうものたまはせやらず。むせかへらせたまひつゝ　陛下はかやうなことなど仰せらるゝやうなりしかども、これらを仰せらるゝ間も、御

胸せきあへさせたまはで、はき〳〵とも仰せられたまはず。半を云ひかけてせきくる涙にむせかへらせたまひておはしましながらの意なり。○などとは、御勅諚は猶この外にもありしを省きて、典侍が吾が詞をそへていへるなり。○はかゞかしうとははき〳〵ともなり。○のたまはせやらずは、云ひきらせたまはずなり。むせかへらせは涙にむせかへらせなり。つゝは前回にて解きたる第一の意。即ながらの意のつゝなり。

○かつは人も心よわくみたてまつるらむと、おぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの云々　かつと云ふ詞は、一方にはしかありつゝ、また一方にかくあるといふやうなる時に用ゐる接續詞なり。　陛下は、一方にはなき更衣を慕はせ給ひながら、また一方には陛下には陛下の御擧動を女々しく心弱きことなりと、禁裡の人々の見奉るならむかとおぼしめして其の邊の御遠慮あそばさるゝ御様子が、いかにも御氣の毒なりしによりて、猶委しく　陛下も語りもし、吾も承りもしたきはぞなりしも、さまでは却りて人目をかねさせたまふやうなるが、御痛はしきにより態と委しくは承り果てもせぬやうに、こちらより程よく切上げて宮中を退出しましたとなり。

○とて御文たてまつる　斯々の次第であるとて、以上のごとく陛下の御傳言を物語りて、更にまた御宸翰を取出して、北の方へ奉りたるなり。



主從心得草（後編續）

諏訪 忠元 寄贈

如何様楠正成公のやうに心得たき者也。主從といふけれ共、主は家來を主人と思ふべしとの仰せなり。か

やうな心持でなくては、大事の御用に立者なし。此事は主從三へん下の卷楠の所阿部大藏の所を見て考ふべし。又家來をちりあくたのやうに思ふ主人の下には、大事の用にたつ人なし。孟子のいわく、君臣を視る事土芥の如くなれど、臣も君を見る事寇讐の如し、といふは是也。又いわく、君仁あれど仁あらざる事なし、君義あれど、義あらざる事なし。とある聖語を以てもよくしるべし。是は君の心得を申す迄にして、臣たる者は君の仁不仁にかまわずと、忠義一途に主用を勤むべし。是は君たらず共臣は以て臣たるべしと、聖語なり。又主人は、家來の非分を一々せんさくすべからず。あまりせんさくしては、かへつて不和となる事あり。心得て使ふべし。又家來は主人の非を少しも見ず、忠義金鐵の行ひをすべし○忠孝の二ッの道は平生に人のうへこすやうにつとめよ○忠孝の守りを常に放さずど、いかな惡魔も寄付ぬ也。此歌は家來の守り本尊、福德安穩の根本なり。惡魔を拂ふの御祈禱なり。是等の歌をよく心得て、不忠不孝は少しもなきやうにすべし。扨主人といふ者は、外目より見る時は樂なやうに見ゆれ共、殊の外大儀なる役にて、中々ねた間も心の休まる事なし。我身一ッでさへ世話の多き者なるに、まして大勢の奉公人のからだを預りし事なれど、其苦勞筆紙に盡しがたし。手を組で考へ見るべし。家來の病氣は則ち主人の病氣となる、家來が耻かく事あれど主人の耻となる、家來の事は善惡共に皆主人へかゝる者故に心配なり、是にて萬事察すべし、祝儀不祝儀共に主人の苦勞となる、家來たる者この事をよく知つて忠義を盡すべし。

新瓦（續）

余欲レ遺ニ道川先生書一曰若思言ニ彥阪公執筆一。秩秩德音。賜レ敎實多。若思不佞。斯之未レ能レ問。既鬻ニ於市一。又耕ニ於野一。不下敢與ニ士君子一齒上者。十二年ニ於今一矣。況敢狂

言以犯二執事之威嚴一。雖レ然。疾痛慘怛。未三嘗不レ呼二父母一也。執事豈非二民之父母一哉。願矜二其情一。不レ錄二其罪一。而熟察レ之。若思聞レ之。丈夫生而願二其有一レ室。女子生而願二其有一レ家。此親之所三以憂一也。夫親憂レ之。子敢恝然。詩曰。求レ我庶士。迨二其吉一兮。可三以見二其憂一矣。若思將下以二姊之女一喩上焉。其未レ笄也。家貧親病。殆無二以鞠一レ之。將下屬二諸人一以爲中後圖上。若思不レ可。乃謂レ女曰。唯君子能憂二人之憂一。如レ己有レ之。細人不レ能也。女懼。欲下待二其人一而後往上焉。執事閔レ之。乃命二若思一。獻二諸藪公一。公普遇レ之。施及二其親一。是若思雖レ窮二居草莽一。然未三嘗不レ被二二公之澤一也。敢忘二其德一。今此女也。旣以二君子一爲レ君矣。見二其事レ上也。見二其臨レ下也。見下其與二賓客一言上也。皆將二國家之憂是憂一。而有二以解一レ焉。庶其波二及已一。以慰二親一乎。待レ之十餘年。猶未レ有レ家。而年三十矣。君子將レ聽二諸無聲一。視二諸無形一。而爲レ之慘然也。況其親乎。夫藪公之德。可レ謂レ厚矣。若思豈不レ望二其有一レ終哉。又豈不レ望二執事贊襄以卒二大惠一哉。若思老矣。不レ得下復就二下風一而承中後命上。故敢獻レ書以布二腹心一。唯執事圖之。又與レ女書。以觀二其志一。女固止レ之。故不レ果也。女名仲合原勝房之子也。性孝友以二余此擧一爲レ不二已知一。乃復書曰。我家多難。老母及弟。實集二于蓼一。吾所三以得レ救二其急一者。君之賜也。若使二我嫁一。將二唯人是從一。雖レ欲レ如レ此豈可レ得乎。是使二親窮一。以自爲也。是於二親之憂一。損二其一一。而益二其十一也。何以嫁爲。余未二肯從一。欲二微勸一レ之。乃詢二諸周一。然後知三其不レ可二以不一レ從焉。嗟乎仲之孝也。不レ踐レ迹。不レ阿レ世。變而通レ之。非二能權者一。未レ易レ及也。

樵者利レ山。魚者便レ水。冬裘夏葛。男唯女兪。易レ此必亂。王公自稱二孤寡不穀一。謙。它人則僭。陽虎曰。爲レ富不レ仁矣。爲レ仁不富矣。此好言也。亦莠言也。公甫文伯死。其母不レ哭焉。疑二其好一レ內也。論者謂二此賢母一也。不レ然必妒レ妻也。它如二好レ賢之與レ悅レ色同一レ辭。習レ儀之與下善二於禮一齊上名。或美或惡。存二乎人一焉。是故孝子不三自言二其勞一也。忠臣不三自言二其功一也。慈父不三自言二其恩一也。

新瓦終

新瓦の後に記す

予、既に、東里先生作る所の新瓦を讀み、慨然として大息して曰はく、久哉斯道之岐也、何ぞこの文を問ふに遑わらんや。昔者、王新建、洛に在り、李何諸子に參伍し、以て彼古文辭を攻めしといふ、猶これ東里、壯歳南郭春臺に徵逐せしに酷肖せざらんや。是を以て新建の詩、往往にして老杜の遺音を聞き、東里の文、優かに秦漢の壘に摩するを覺ゆ。夫虎豹の鞹、安んぞ羊犬の鞹ならんや。文質彬彬、而して後、君子を見る、東里の謂乎。藤樹、執齋は野、一齋は史、予、以ふに、日本、姚江を學ぶの士、唯、東里、庶幾からんか。何ぞ、聞ゆるなきの太甚しき哉。

又、歎じて曰はく、規模はそれ大ならん哉。朱王を攻むるの徒、何爲れぞ狹少なるや、今それ生理を談るものは未だ以て文章を語るべからず。今夫れ、文章を語るものは未だ以て性理を語るべからず。何ぞ況んや道德文章の士に於てれや。菅神廟碑、一篇、新瓦附錄に載する所たり。文の雅健、詞の頸拔、之を宋頭巾者流に求むべけんや。

戊戌十二月於東台山中　　聽劍生記す

菅神廟碑

夫他山之石。可以攻玉烏喙之毒。可以愈疾。君子之患。可以觀德。何則彫琢不至。孚尹不全。刳殺不備。痛痒不除。艱難不及。至誠不著。是故獯鬻侵豳。大王以興。四國流言。姫公益尊。陳蔡圍解。尼父彌高。蓋損而益之。抑而揚之。去而就之。天之所以表章其德而耀諸萬世者。於是乎。爲無憾焉。而知天者。有以順之。故古公亶父來朝走馬有以安之。故公孫碩膚赤舃几几有以樂之。故七日絕糧。弦歌不衰。豈翹動心忍性以弗怨焉乎哉。吾故右丞相菅公。雖未之逮。亦其細也。何以徵之。公諱道眞。字三。天穗日之胤也。昌泰中。以儒雅謹愼爲上及上皇所親信。其登泰階也。元首股肱。聚精會神。穆穆在上。明明在下。雖有讒慝。將無能爲。不虞末幾。衆口嚣嚣。使公西

遷也。然後公之德可得而觀焉。何則吞舟之魚。非溝瀆所容也。棟梁之材。非部婁所有也。騏驥固不可以與罷驢爲驂焉。鳳皇固不可以與雞鶩同群焉。君子固不可以與細人共事焉。則公之不遇天也。彼憃爾者焉能使之。公固欲退。踰月三請。非知天者。能如是乎夫唯知天。是以弗怨。夫唯欲退。是以安之。但樂之。則未也。何以知之。誦公之詩。觀公之禮。而知其能弗怨也。思其所學。視其所尚。而知其未能樂也。自公薨後。京師屢災。讒人多死。蓋天動威以討有罪爾。而好事者莫之能辨。乃謂公爲厲以報怨焉。朝廷爲之建祠。然後止也。無乃比諸良霄乎。於是造怨言。設鬼事。脩怪語。以附會之。非賊德也。奚翅讒口。凡百君子。蓋攻其非八百年矣。而未能勝也。今於公之事。擇其尤大者。而討論之。因野史所書。而折衷之。所以左擅君子也。下毛之野。有公祠焉。屬天明卿。其承祭者。松村廣休。出井從陽。松村師文等。實能知公。而尊奉之。乃欲頌其德剋之于石。以諭[illegible]及無窮也。屬予代之。辭不許。乃敢然也。銘曰。

昊天靡常。作威作福。夢夢游衍。昭昭來復。儆予臨女。前倚後伏。非心淫志。進退維谷。今此下民。曾不是虞。且信且疑。若有若無。違命悖德。自速其辜。遂逢彼怒。瞻望號呼。維聖及賢。順之樂之。與俱周旋。莫敢差池。朝坐廟堂。夕臥茅茨。不以彼喜。不以此悲。公之末喪。伊乃周。執圭。鳴玉。誰知其憂。遭世罔極。特舟西流。奉命海隅。不怨不尤。漁人舟子。以君以親操杖授几。如子如臣。沒世不忘。采蘩采蘋。日薦月祀。號爲天神。無人不尊。靡國弗悅。立廟作寢。奕奕布列。松柏垂陰。梅華如雪。侯神所愛。勿翦勿折。彼昏不知。以巳視賢。忘德脩怨。謂神亦然。欲樹之威。祇碩其寃。其寃孔碩。不啻左遷。維二三子。寔在天明。事神以禮。克敬克誠。仰贊洪輝。永存風聲。嗟爾來世。熟思茲酩。

謁菅相公祠詩

衡茅露爲霜。蟋蟀鳴荊扉。幽棲莫與歟。田野誰相知。開帙懸前脩。曳杖望廣畦。廣畦坦且靜。中有菅公祠。鬱鬱松垂蔭。森森梅交枝。就階脩禮容。憑軒想昔時。昔時何罔極。紛紜亂是非。路險豺狼嘷。林昏鴟鴞飛。休勳淪西海。遺愛泣群黎。況復流離子。感物心傷悲。仰歎桂華落。俯惜蕙草萎。風厲誦甘棠。天寒懷緇衣。恨恨不能去。含情涕漣洏。聊和巴人曲。以比祝史辭。辭殫情未巳。徘徊恨晩暉。（完）

うらめしの雪

白松園主人

夜をこめてふる雪に、今朝はいたう積りて、野も山も、玉しく庭となりぬるぞ、いとめづらかなる。よべより塒失ひつる雀の、ちよ〳〵と鳴く聲の、悲しげなるに、空稍や晴れて、朝日花やかにさし出でたれど、軒端にむれ來ていとかしがましうなくものから、なほあさりかねたる、いと哀れなり。

まだきにたき出でゝ、茶などわかして、朝餐したゝめつゝ、かねて用意したる、草鞋とう出、股引はきなどして、二階の窓、すこし開きて見渡すに、まだ踏み分けたる人のあとだになく、尺ばかりも、つみつらんとおぼしきに、あたりの犬なん、勇ましげに、走りきはひて、まろびなどする、いとをかしき。こはこれ、今より五とせ前なる、年のくれに、おのれが故郷なる、西の國のある山里に、歌枕求めにとにはあらで、よに口惜しう、たづきなき折なりけれど、里の學びの舍に童等を集へて、物いひ聞かせなどしける時の事なりけり。されど學びの舍の二階に、起きふしゝて、自ら炊ぎ、自ら煮て、且つ食ひ、且つ寢ぬるに、片山里の心安さは、怪む者もあらで、なか〳〵に憐む者もありて、隣の嫗が、衣濯ぎくれなどするもうれし。

冬季休業にもなりぬ、待ちたはすらん母にあひ見んうれしさに、皈る心の急がれて、明日はつとめてと、

思ひたるに、よひのうちより、かきくらしふり出でぬ。あやにくの雪やと、うちかこてど甲斐なし。歸心矢の如き身の、雪ふりたれどとて、思ひ止みなんやうもなければ、風呂敷包取りて、肩に投げかけ、脚半草鞋を、はきしめ／＼、立ち出でたるに、吹く風は骨に徹れども、野山の氣色、云はん方なくめでたし。むかひに立てる、番山しげ山、白玉しき連ねて、麓を流るゝ砂川のみぞ、黑う見えたるに、賤が伏屋の改まりたるさま呉竹の撓みたる、松が枝のをかしげなる、中にも、枯木のさまなん、すぐれてうるはしく、げに繪にも言にも、及びなくめでたくて、しかも、こちたき思ひせざるは、春秋のながめにも、たちまさりてればゆ。寒さも之れに忘られて、行きと行くほどに、或は峰を攀ぢ岾をこえて、幽溪雪のとづる處、白雲嶺を包む處、寂寞として乾坤沈めり。只藪鶯の忍びねど、妻呼ぶ鹿の聲のみす。人跡ふつに絕ねて、雪の谷間に、梅が香とむる風流士もなく、筍堀らんずる孝子も見ねず。折柄再びふり出でゝ、風飄々とれもてを撲つに、いと／＼困じはてつれども、道に休らう家もなければ、とかくして十里の道をぞ、日もくれて、燈火つくる頃ほひになつかしき我屋の門につきぬ。袖なる雪を拂ひもあへで、戶をほと／＼とうちたゝき、今なん歸り侍りたると、いへども母のいらへもなし。いぶかしみつゝ、隣なる下僕が行きて、母はいづらととふに、叔父君のもとにといふ、叔父なる人は、近きわたりにあなれどそがまゝ急ぎ行きて見るに、家内何となく、うちしめりたり、訝りつゝ足を濯ぎて、坐に上りけるに、母は出で來給ひて、武一なん、病重きと告げ給ふ。武一とは即ち、れのれの從弟にて、年さへれなじく、只れのれより、一月の兄なり、さる官立の學校に、在學したりけるが、いぬる秋季の修學旅行の折に、ふと腸加答兒にかゝりて、さまでにはおらねど、學校にも出でゝ、療養中なる由は、其頃告げこしたるふみにて、知りつれども、やがてをこたるなるべしと、心にもとめざり

しに、今猶癒えずあらんとは、かけてもおもはざりけれど、大方ならずおどろきて、急ぎ枕邊に進みよりて、今こそ歸りたれ、心地は如何にと、尋ぬれど、枕をあげは丶笑みて、いと久しう隔りつるものを、病の床にてあひぬるこそ、本意なけれ。心地には障らねども、疲れのみいやまさりて、物にも似ずなんといふ、そは心苦しき限りにこそ、しかはあれど、心ひとつをゆるやかに療養し給へ、春にもなりなど、をこたりはてん事、疑ひなし。只本意なきは、こたびこそ、例の唱歌ならはんと、ふる雪の道すがら、思ひいりて歸りしものを、いとうらめしと笑へど、君もにこやかに、まことにさなり、此の正月こそ、痛飲すべく、思ひ期しつれ、二豎の神のあれまさるに、少名彦のおん神の、くすしく妙なる藥もあらで、乞ひ得て救ひ給へといふも、苦しげなりけり。

年も改まりぬ、注連縄引きはへて、立つる門松の、緑濃やかに、知巳朋友うちつどひて、酌みかはしなど、世の中すべてさゞめき賑へども、憂ある家の門には、柳の糸の芽も、春の色だに見えず。あるひ、君はおのれの母を招きていふやう、叔母の君よ、この病は、とても癒ゆべしとは思ひ侍らず。おのれも末はるかに、志ざす事の侍りけるに、かくては草木と共に、空しくなりなんこそ、死にての後のうらみに侍れ。いかなる業果の、あなれどにや、此のなやみにはあふならん。思ふに苦しき父をせめて、學資出させつる報いの來たるにて、本づく處は、不孝の罪になんといつゝ、さめ〲とうち泣きけるよし、母のおのれに告げ給ひけるを、聞きぬるおのれも、思はず涙迸りて、只泣きに泣かれぬ。

余りの心もとなさに、おのれは醫師がりおとづれて、此の病癒ゆるものか、癒えぬものか、包まず聞かし給へといへど、醫師は容を正して、いといたう、心苦しき極みには侍れども、おのれの診る處にては、十中の八九は、むづかしう侍りなんと、いはれて、おのれは

いと〳〵瞻つぶれて、手に持つもの〳〵、落つるもれはねで、歸りくるに、すべて夢路を辿るが如し。うからやから集ひ議りて、又異醫師を招ぎて、見せけるに、その醫師いへらく、余の診る處は違へり、さむかり、手を措くまでの、病とも覺ねずとて、そのゆゑよしを、説き聞かすに、少し心強き心地のせられて五日六日を經るほどに、稍やをこたるやうに見ねけるを、よろこぶこと限りなかりしは、淺ましう、この道にうときもの〳〵習ひなりけり。かくてわのれは、學びの始業期にもあなれど、うしろめださは、限りなけれど、よきにも惡しきにも、俄にあるべき病ならずとのよしなれど、若しわろからんさまの見ねなど、とくに知らせ給へと、ちぎりて、また旅にのぼりぬ。あはれこれなん、長き世のわかれならんとは。

さる程に、わのれは、ふみもて屢々病を尋ねぬ。次第に癒ねぬべききさまなるよし、告げ來りぬ。胸のさわぎの、少しはなぎ行く心地のするに、自らの望みと、醫師の許によりて、遂に病院に入ることゝなりぬるよし告げ來りぬ。寒さはいよ〳〵はげしくて、雪は日毎に降らぬ日もなし、なべて病は、暑さにも寒さにも、障る習ひなれど、かくてはいかゞなど思ふに、ふつに便りもなし。さては病わろくて、皆々遑なきにこそなど、しづ心もなし。きさらぎ十六日といふ朝の、雪のいみじう降りたるに、忽ち電報は來りぬ、胸先づつぶれぬ、取る手もわなゝかれぬ、一目見し目もくらみぬ、氣をしづめて、猶よく見るに、紛ふ方もなく、けふなん、みまかりぬるとの、文字なり。今更のやうに、悔いなげゝど、せん方もなく、直ちにみ雪ふみわけて、只々心もそらに、走り惑ひて家に歸りぬ。

（未完）

梅妃傳

赤松景福　譯

本傳は唐曹鄴が著せるものにて、梅妃とは唐玄宗皇

も母君の聞かれなば、共に空しく成らせ給ふべくもやと、秘して知らしめざりしが、送葬の當日に至りて、母君の姉上なる人の云はるゝやう、假令ひ此の事知らしめて、其の場に絶え入るまでも、夫妻一生の訣別なれば、此の事聞かしめてよと乞はせ給ひしかば、然らばとて告げ參らせしに、母君は聞き給ひて暫し茫然たりしが、やがて人々に抱き扶けられて、父君の遺骸の前まで運ばせられけり。打ち見る所、その御顔ばせの骨高く痩せさせ給ふ姿、その唇舌など、邪熱の爲に純黑に染められし樣をつくづくと眺めさせ給ひけるが、やがて人々を顧みて、斯くまで病の激しくありしからは、迚も助からせ給ふべき御命にてはあらざりけり。今は歎くとも詮なし。跡に殘りし祖父の君はじめ、小兒等の介抱こそ肝要なれと、茲に翻然として斷念せられければ、看護の人々も始めて胸なでおろしぬ。母君時に年三十三。後にて語らせ給ふ所によれば、

かゝる大悲憂の時には、決して涙の出ぬものなり。涙の出づるは泣くべき餘裕あればなり。此の時吾が身は、父君をも、兼て家事萬端に當らざるを得ざりしかば、悲哀の情も目前の危急に排斥せられて、泣くさへ心のまゝならず。況して涙の出づべきものかはと。

あはれ人の命や、白露の朝をまたでこぼれゆく玉の緒にさへ結びかぬるぞはかなかりける。父君今は世にまさず、無くてぞ人の忍ばるゝならひ、乞ふ少しく父君のことを語らしめ給へ。

先考諱種助。幼時稱龜之助。祖父長治郎君第二子。天保八年某月生宇治鄕。性眞摯敦厚。夙好學受業神風館爲田只靑氏。然家道貧窮不能專心從事。嘉永七年二月十日娶宇仁氏主宰家政。時年十八。方此時家道益窮乏。先考即與妣相謀各別其業內外協力以整理家政。先考執業夜以繼日。其辛苦勤勞殆有不可名狀者。然而先考處此際仕親至孝。朝則迎意歡承夕則撫摩省察。未嘗怠一日也。先考又注意家業改良。幼爲精製

之餅名赤福餅。吾家之聲價證於此矣。既家道稍優。即爲他謀而不辭己勞人多德之。生平喜俳諧又嗜生花茶技。忙裏偸閑翫之云。慶應四年二月十二日病歿。年三十二。

ことし十月三十一日、われ母君を喪ひまつりて引籠りけるに、生前のこと何くれとなく書きしるさむやと、日々筆とりて、涙ながらに心慰めける折しも、父君の妹なる人、志摩の國より罷越して、過ぎし昔のことなどいと懇に物語せられけるに、吾等が幼くて知らざりしこと、又聞もらしたる事などありて、耳新しく打聞かれ、特に父君のことは最も詳らに話されけれど、聞くたび毎に鼻うちかまれて、眼もあやなりき。今その打聞のまゝ一二逸事を摘録せんに、

◎赤福餅と云ふ名は、此方父君の名付けられしにて、其れまでは唯餅屋々々とのみ云ひ來りしなり。吾等父上の時は、並製の餅のみなりしが、此方父君に至り、初めて上製を作られ、其れより赤福餅と呼びなせしなり。今の餅盆の上下二等に別れしも此時のことなり。盆の作り方、茶碗の形など、皆こなた父君の考へられしなり。

◎此方父君の家業に熱心なりしこと、驚くべく感ずべし。例へば夜分など家にて働かるゝ時、客人が此の赤福餅を如何に品評すらんとて、客人が立去るや、直に其の後に尾してひそかに其の評判を探られき。こは度々の事にて、いつも浦田坂あたりまで到らせ給へりとぞ。扨又その品評を聞きて、誰が家の餅は價廉なり。某家の餅は味美なりなど云へば、直に人して其の家々の餅を取寄せ、まづ自家の餅に標準を取りて、其の量目を比較し、次に其の味を吟味して、成程甲は美味なり。乙は廉價なり。吾は之を兼ねざるべからずとて、自家改良を加へらるゝこと度々なりき。又この品評會は、爾後多くは砂糖餅米などの相場高下の際にありて、開かるゝを例とせられき。

◎此方父母は、唯この地方にて競爭せられしのみな

らず。年々御師の代官として諸國へ旅行せらるゝ人に頼み、必歸途には其の國々に名ある餅を購ひ來らしめて、廣く諸國の同業者を競爭せさせ給ひしなり。草津の姥が餅、大津の走井餅などは、年々この品評會に入りき。扨此等品評會にて、自家の餅が最優等を占めたる時は、其の喜び喩ふるに物なく、家人一同を呼び集めて說き諭さるゝやう、吾が赤福餅は今日このまゝの製方にて宜し。此の通りして客あしらひ油斷なく働かむ、家の繁昌疑ひあるべからざるなり云々。

扨送葬も形ばかりに營みしが、餘の病人は枕を並べて病床に在り。誰か此の次ならんと安き心もなかりしが、間もなく當歲兒の身まかりたれど、大事の前の小事なれど、さまで哀しむべくもあらず。唯他の病人の氣遣はしくて、母君は自身の病さへ打忘れて、他の看病をぞ勤められけるが、氣勢や張らせ給ひけん。おのづと日々に元氣を回復せられしかど、やがて他の看病人をも謝はらせ給ひて、一人專看護の勞にぞ當らせ給ひける。

精神一到神も憐み給ひけん。跡に殘りし病人も、日を追ひて漸次に快方に赴きしに、此に又他方に托けありたる次男の、今は長子なる某が、更に此の同じき病に犯されて家に歸りけれど、漸う力づかせ給ひし母君の氣勢も、此に至りて又萎れ、殊に祖父の君は父君のうせさせ給ひしより、此の長子をこそ杖とも柱とも賴まれつるに、今まのあたり斯る憂目を見せられけれど、身も世もあられぬ心地して、一時に失望落膽のあまり、此の年五月十八日終に父君の跡追はせ給ひぬ。あな痛はしとも痛はし。母君の悲歎思ひ奉るさへ愚なりや。家は暫らく淚にて漂ひたりき。覺めては泣き泣きては覺めて、晝夜のけぢめさへもわかず唯淚にひちて明し暮しつ、人々眼より眼に淚を以て迎へられ淚を以て送られけり。斯くても命はありけるものよとは、後にて母君の語らせ給ふことなりき。

さる程に、春過ぎ夏來りて、夏もやう〳〵白妙の衣ひきかづく頃となりぬれど、病人皆々本復したりけり。此に始めて愁眉を開きぬ。されど、家政は困憊疲弊のあまり一時に舊貧に陷りてき。母君の當惑それはた如何に、今や良人なくして遺子四人あり。長子僅に十一歳。誰と共にか此の貧家を經理せん。茲に母君は二人の家妹を助手としてかつ〴〵に家業に從はれけるが、此の年明治と改元あり。明くれど明治二年なり。折しも兩宮式年の遷御式ありて、其の繁昌せしことをさ〳〵御蔭參にも讓らざりき。されど、故なくして狂奔せし先の御蔭參とは其の撰を殊にし、孰れも皆曠世の大典を拜觀せんとて群集せしものなれど、誠心面に溢れていとも敬虔なりき。吾が家何の幸ぞ、ゆくりなくも此の餘澤を被りて、こゝに家政を回復することを得たりける。扨當時吾が家の狀況は左記の赤福亭記に詳なり。叙事やゝ先後するところあれども、亦以ちて其の大概を知るに足らんか。今その全文を謄錄す。

赤福亭記

亭面鑾川而背鼓岳右仰神林而左望月宮。四時之景皆奇。此宜以目福名者而特名以赤福者蓋亭主誌其所感也。其所謂赤福者何。曾祖創製之餅也。何以名赤福。其外膚塗豆餡如塗塗附然。故味美而色赤。土人因稱曰赤福云。傳至其父早死。四子半在襁褓。一貧如洗。錢篋中僅存山田鈔四葉耳。然而未亡人奮勵刻苦不敢以赤貧減赤福之味。適際太神宮奉遷之季。賽客之自四方來者皆喜其價廉而美味日聚集其亭。數月之間忽得巨貲而赤福之名亦遂熾阿部川糕而軼乳母餅矣。時亭主季纔十有一。猶能記阿母之艱苦。今茲又屬　奉遷之年。阿母既老家道愈優。亭主兄弟皆有感於往年之事。乃將又益廉其價而美其味上以答。神恩下以酬母德。於是先脩其亭來乞記焉。余亦因有所感。古人云憂勞可以興家逸豫可以亡身。凡來啗此餅者能知赤貧之生大福則此赤福不啻爲其口福也。亭主爲誰。姓濱田名種助也。

明治廿二年九月識於林崎寓堂

羽港 有馬 轍

(未完)

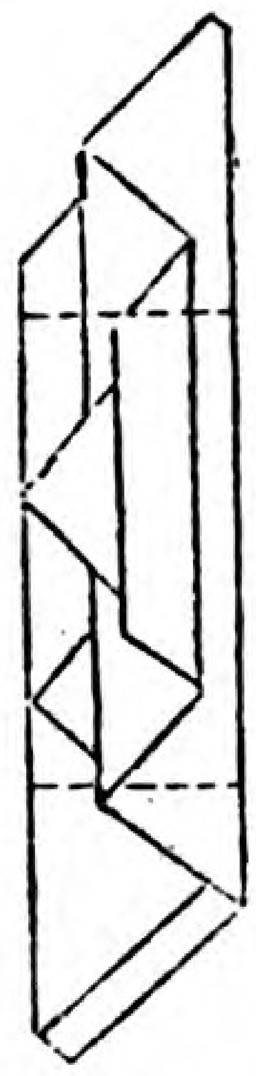


包の記

故有住齊先生教授

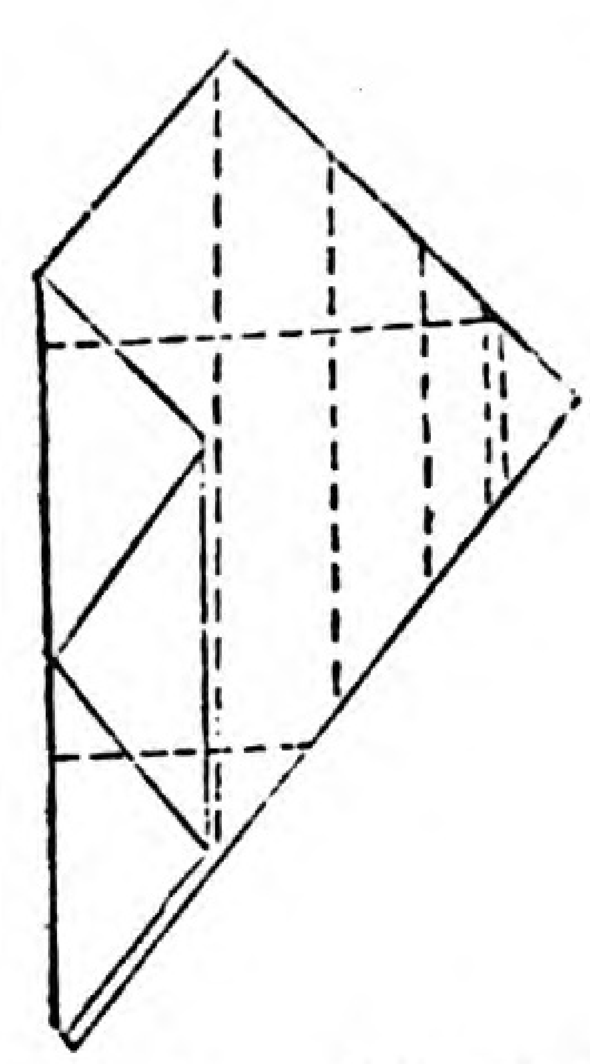
門人 なみ子 鑠子 筆記

櫛包 二枚にて折る、表大奉書、裏紅奉書。紙取は裏曲の法による。にはひを採り、形紙を造りて折り上る等常の如し。



圖に示せる上下の點線は裏に折り反す印なり。

解の圖

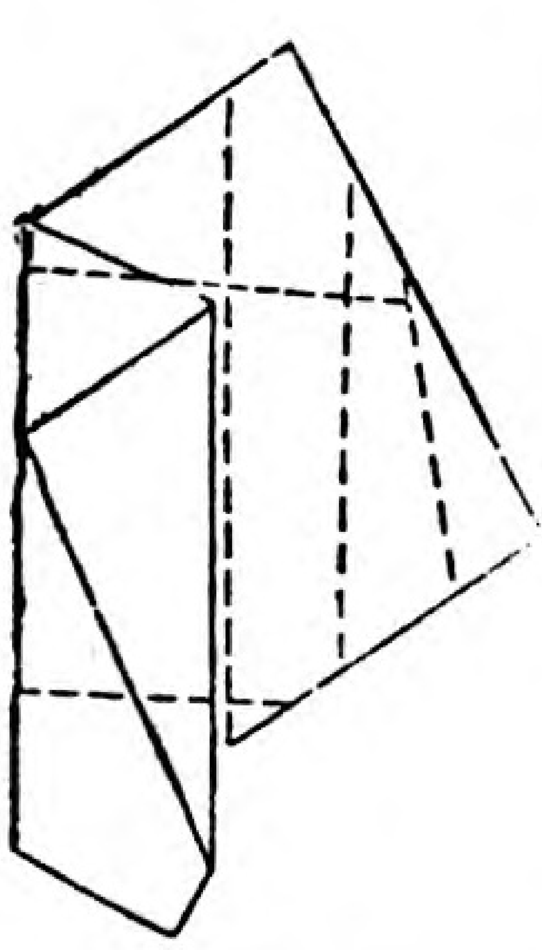


左の方を折り、右の方を開きたる圖なり。其の最も右の端に在る點線は外に折り、其の次は内に折り、其の次も亦内に折りて、第四線目のは外に折り、最も左にあるを内に向けて折り、上下の點線を裏に折り反せむ折り上るなり。

櫛包 是も櫛包なり。總て折りかたは前に仝じ。



解の圖(一)



先づ圖の如く折りて、最も右の端に示せる點線の處を内に折り、其の次のは外に折り、最

も左に示せる點線の處を内に折れば解の(二)圖の如くなるべし。

解の圖(二)



斯の圖の上下の點線を裏に折り反せば折り上る。

茶の湯

孤峰菴碌仙齋不羨
關　葦　雄

茶禮初學（續）

座したらば不敢、左手にて柄杓を取（但し柄の中節の下の方直際を持）柄杓の合を左の方へ起しながら右手を添篤と搆へ、右手にて翻器の中の蓋置を出し、（但し茶の湯式正には、必ず青竹を用ゆ）例の定席へ置付、右手にて柄杓を引、居前を直し、體格を正し、精神を調へ、呼吸の息を平等になし、而後翻器を左手にて僅少進め、（但し此進める所以は居前に合せるの必要在爲なり）一禮をなすべし、衆客も一同辭宜すべし。（次に亭主濃茶を點る手續の事は、本誌一百四拾七號以下五十一號迄に掲げたれば今爰に再出せず。）次に上客は先以菓子の挨拶をなすべし。偖御菓子は如何にも結搆に御座候、御思付も格別にて、御心入幾層相顯れ難有存候、調製は何方へ被命候哉と尋ぬべし。答餅は手製と歟、或は壺屋、出羽、風月、藤村、越後屋、野村、等、製造家の實際を詳に答ふべし。（但し菓子の品目は、何品と爰に名稱しがたし、其種類甚だ多く、又亭主の好み注文もあるべければ、宗匠に相談して指敎を受べし。）次に上客、御茶は美麗に有之、此初咲は珍花に有之、御庭花にても有之哉、御生方も能調、ながめ一際目立候樣

拜見仕、長短能修り、又御花入も御取合宜敷、何人の作製に有之歟不眼には一向相分り不申伺たし、亭主は其作者及銘あらば子細に告示べし。其他濃茶點前中寂寞ならさる樣、閑話あるべしと雖、餘り俗談世間咄しに流れ、物價の高低を論じ、或は政事談に流れ、政憲派の盛衰曲直、是非を論ずる事を禁ず、亭主方へも同樣清談あるべし、されども、茶を茶碗へ入るを認めたらば、咄を仕掛べからず。是は自然茶碗につむきの飛入を忌む故なり。其他前號揭載の如く心得へし、茶點終り、道具客方より戻りたらば、亭主出て一禮取入べし。此時上客は勿論、客方茶入、茶杓、袋等觀識者あらば、亭主へ對し言て差閊なし。又鑑定難及時は、亭主へ尋ぬべし。亭主は無包藏答ゆべし。總て箱書付類の拜見を乞べし次に亭主は右三器持入、直に出て御退屈に可有之と云、尙廣間有時は、彼方へも釜掛置候間、何邊より御通り可被下、又居付ならは、炭を直し、薄茶を點まゐらすべしと申述べし。亦此處より居付の付薄茶と、披の間へ通ると、事柄兩端に亘り、難認場合もあれど、次號に區別して讀者の解し易きを旨として可揭

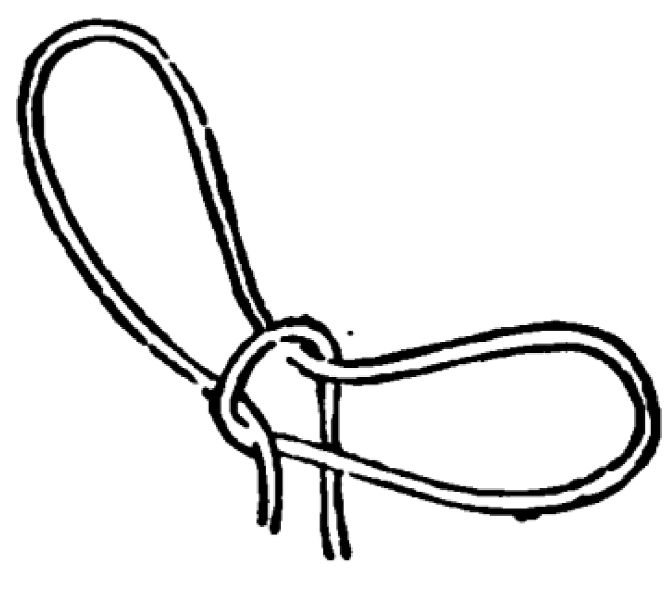
新撰 結物百種

百草庵一無

四方封 26

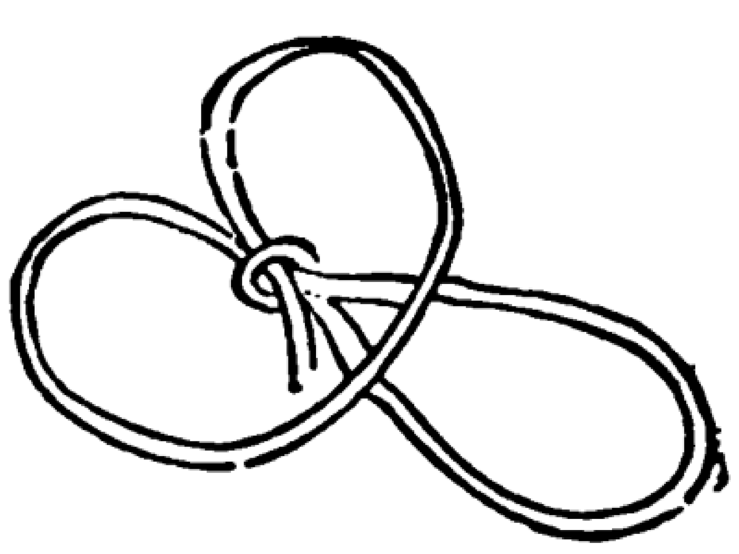
是は袋の紐の結び樣なり。茶碗の袋の緒、又は茶箱の緒等に用ゐてよろし

第一圖



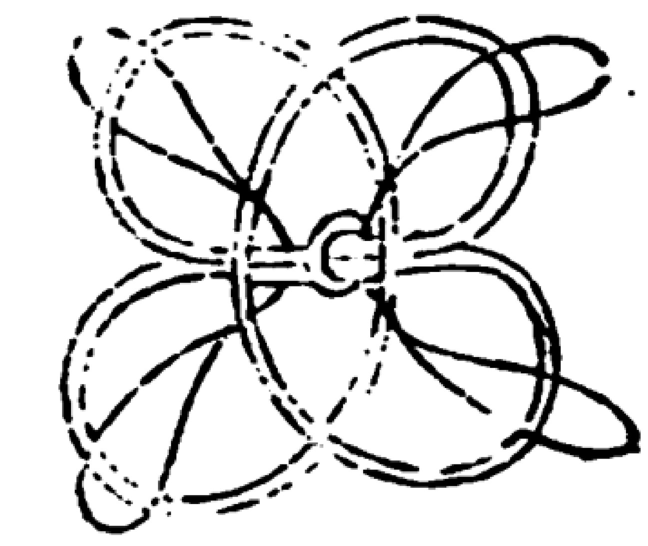
左の方を上に折りかけて第二圖の如くす

第二圖



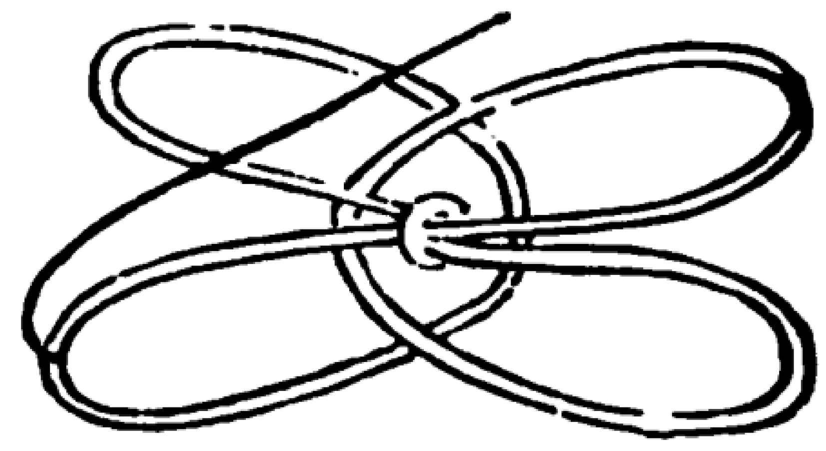
右の方を折りかけて第三圖の如くす

第三圖



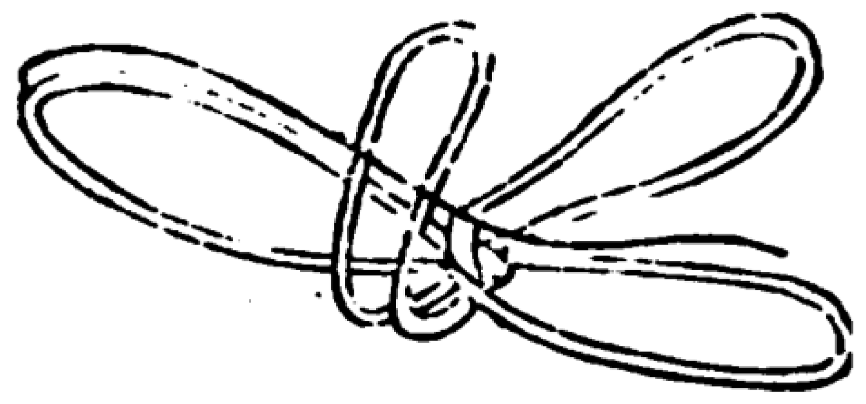
黒線の通りに引出せば第四圖の如く四手になる

第四圖



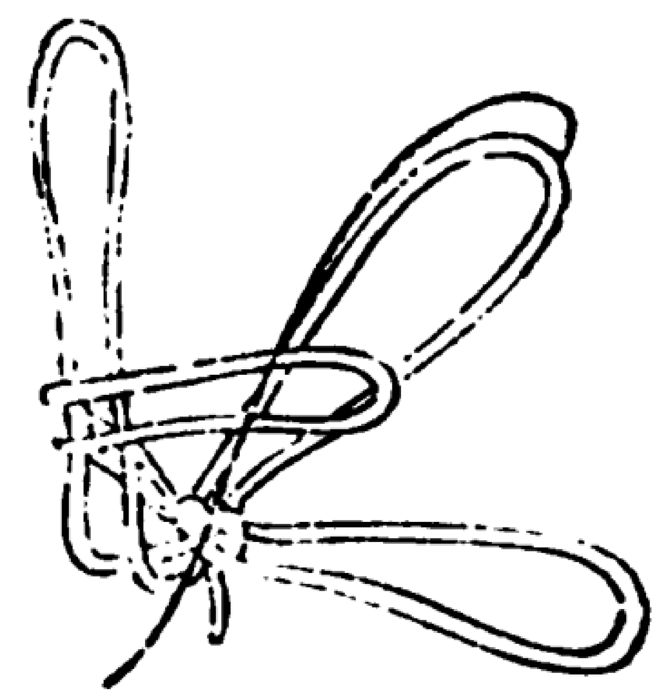
黒線の通りに折りて第五圖となる

第五圖



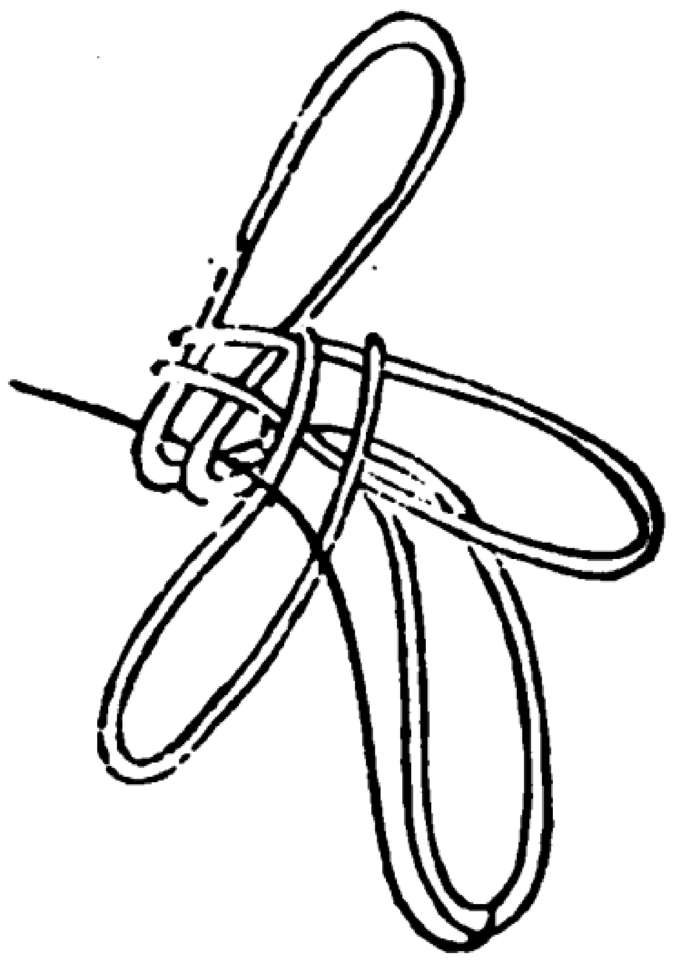
黒線の通りに折りて第六圖となる

第六圖



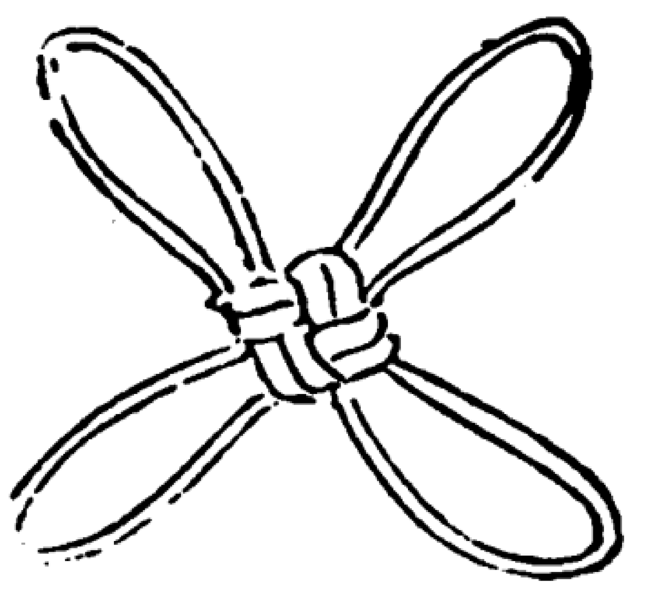
黒線の通りに折りかけ第七圖となる

第七圖



黒線の通りに引き通して第八圖となる

第八圖



結び上り

たちぬひ

西山たい子

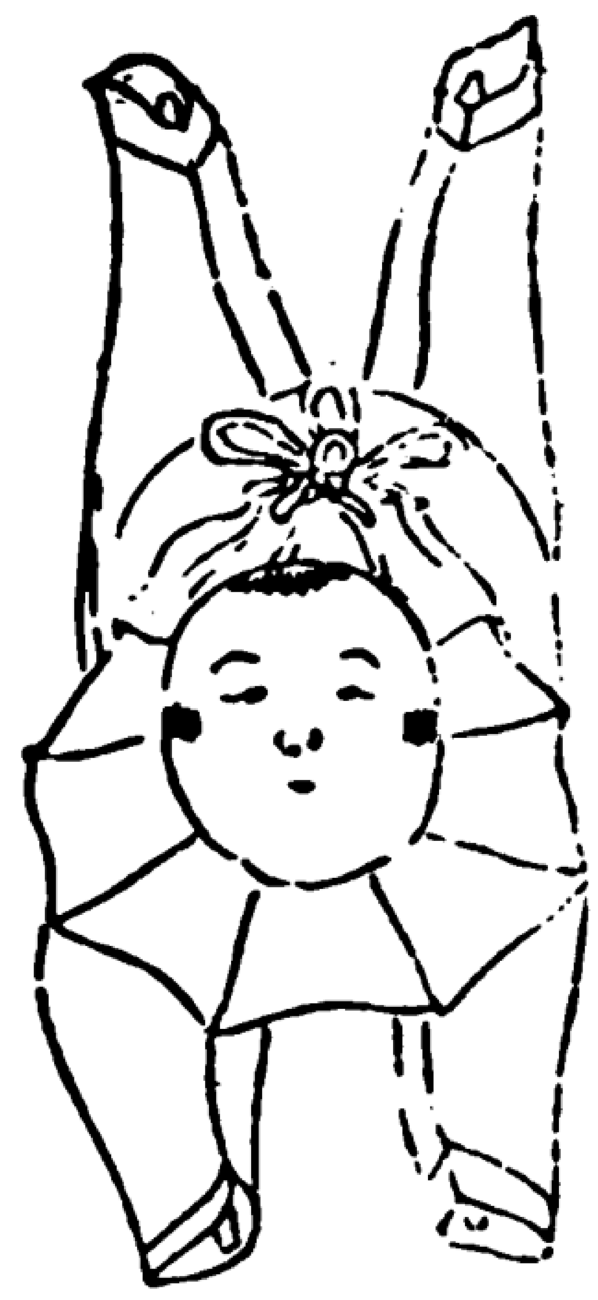
(百三) 這ひ人形袋

此の袋は、二寸四方ばかりの布、縮緬、唐縮緬、更紗、金巾、何にてもよろしきを二つと、それと同じ大さの布二つと、口布、巾七八分、長さ四寸ばかりなると、又袖口裾の布、巾三分、長さ一寸ばかりの布四つと、他に小さきよだれかけの布とを要す。

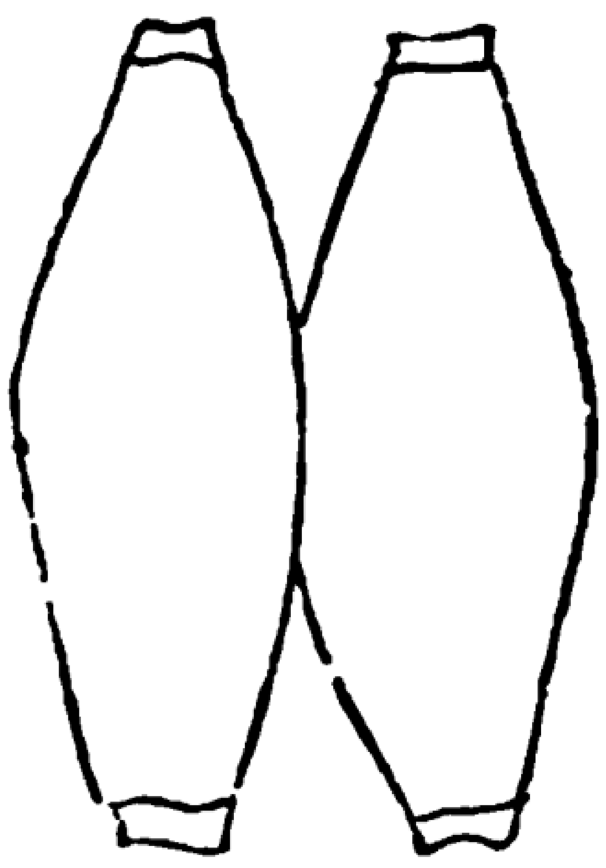
まず首を丸く少し平ためにくゝり、それに目鼻口を書きおき、胴布を裏表合せて、五分ばかり一方をづらせて、二つに折り、その折りたる所に、袖口布、褄布を各細く二つに折りてぬひつけ、三四分ばかりあけおきて、斜めに上までぬひ、四隅をさやうになして、底になる方、即ちその短かくなしたる方の下を左右ぬひ合せ、又長くなしおきし方の四隅ぬひたるをもぬひ合せ、口

布を表にぬひつけ、裏にてくけ、首を兩手になさんと思ふ上の眞中にとぢつけ、又四つの口を手と足に見て、之にも白き布を、極めて小さく折り、口の間にはさみつけ、小さきよだれかけをぬひて、首のまはりに結びつくるなり、而して、口布に穴をあけて、口糸をよきほどに通しつくるなり、此の形誠に愛らしく、春長の細工におもしろけれど、此處にものなすなり。左の圖を見て、よろしく推しはかり給ひてよ。

そ の 圖



底 の 圖



だいどころ

四季料理の取合（續）

夏の部

椀盛

鷄卵、はんぺん、じゆんさい、いはたけ○むしり海老新さといも、いんげん、花柚子○鱸脊切、じねんじよ、冬瓜のせん○鯛、火どりゆば、いんげん、花柚子○あひ鴨、竹のこせん、いとみつば○煮ぬき豆腐、竹紙こぶ、花菜○こち、青ずゐき、柚子○ひとしほ、鯛、冬瓜、じゆんさい○でんつくり身、うちはなす、柚子○でんそぼろ、新いも、花柚子○青さぎ薄作り、早松茸、冬瓜、柚子○すゞきおろしみ、へぎなす、せんまい○うづらそぼろ、青ずゐき、柚子○片身あぢ、むしり冬瓜、さき茄子○すゞき作り身、さきなす、茗荷たけ、○鹽くじら、茗荷せん、うちはなす○はもの骨切、さやゑん豆、青山椒

燒物

鯵の鹽やき、しん生姜○あゆの鹽燒、青山椒○いさきの鹽燒、すり生姜、大鯵鹽燒、たで酢○鯛の松笠切、青山椒、醤油付燒、○魴魚一鹽、酒の付燒○鮎をひらき、たで醤油付燒○じねんじよ串にさし、柚子味噌田樂



秀歌集（三十九）

鹽井正男

○

月清みねざめて見れどはりまがた
　むろのとまりに舟ははてにき

○これは八田知紀の歌にて、しのぶ草にあり。京への旅ね、むろのとまりにてよめるなり。○月清み、月の清さにといふことなり。月の光りの清くすみたるなり。○むろのとまり。播磨にあるなり。むろは地名にて、とまりとは泊にて、舟のとまる所の意なり湊といふもおなじものなり。むろは、東西の舟路、舟の泊る所なりし故に、むろのとまりといへるなり。

○舟ははてにき。舟行の終りたる意にて、やがて、舟のとまりにつきたるをいふ。

○一首の意は、月の光りの清さに目をさまされ、見れど播磨潟の室の泊りにいつしか舟は着いたといふことにて、舟の中にていつしかねむりて何處とも知らず漕がれ〲行きけるが月のあまり清きにふとねむりさむれど舟は既に室の泊りにつきたりしけしきなり。をりからの實況目に見るごとくうかびていと面白く且つ優にみやびやかなるけしきの歌なり。

○

別れ路はなれたるみちと思へども
　けふをはじめの心地こそすれ

○これも仝人のなり。おなじ時、故郷を出づるをり

から別れをしみてよめるなり。○別れ路。人と別れて行く道の意なり。やがて、故郷のこひしき人に別れて行くことをいへるなり。

○一首の意は、人とかく別れて行くことは今日はじめての事にあらず、かねても幾度か馴れたるみちとは思へども、なほ別れはをしくて、今日はじめて別れ行く心もちがするワイといふ意にて、別れの毎時にをしき人情のまことをうたひて、あはれなる歌と云ふべし。

○

別れぢを思ふばかりの旅ならば
　かくまで袖はぬらさざらまし

○これも仝人のなり。一とせ國にくだりける時、旅裝なにくれの事いとねもごろにあひはかりける人々の心しらひをかたじけなくて、知紀のよめるなり。

○思ふばかり。思ふのみといふことにてやがて、人と別れ行く道のかなしさを思ふのみといふ意なり。

○袖はぬらさざらまし。袖をぬらすとは涙をこぼすことをいへるなり。ましはむに仝じ。むの轉じたるなり。袖はぬらさざらむといふも仝じ。

○一首の意は、別れて行く道のかなしさのみを思ふ旅ならむには、かくまでいたくは泣きて袖はぬらさざらむ。別れ路の悲しさのみにはあらじ、人の厚き情ありがたくなつかしく思ふからに、一層涙のこぼれかゝるなりといふ意にて、さしたるところはあらねど、これまたまことを得たる情歌とやいはむ。

見るがうちになみぢへだてゝ山のはの
　ほそくなり行くわが心かな

○これは、おなじ時、海路にてよめるなり。○見るが中に。俗に見て居る中にといふことなり。○別れ來し陸路の方を見て居る間に海路のいつしか遠くなりゆくけしきなり。○なみぢ。波路にて海のことなり。舟の行くなれば路といひ、且つ海は波のある所なれば波路といへるなり。なほ、空のことを雲路といふ如

し。○山のはの、山のはの如くといふ詞にて、見る山のはの遠くなりて細くなりゆく如くといふ意をいへるなり。

○一首の意は、別れてし陸の方を見て居る間に、いつしか波路はいよ〳〵遠く隔たりゆきて、來し方に見ゆる山のはも次第に遠くなれど細くのみなりゆき、その山のはの如く、いよ〳〵遠く別れゆくわが心も心細くなりゆくワイといへる意にて、誠にけしきこゝろあらはれてやさしき歌といふべし。

○

たらちねの袖にすがりて下り立ちし
むかしこひしきはや川の水

○これも、仝人の歌なり。○たらちね。母親のことなり。乳を足らはし育つるといふ意にて、もと母親の枕詞に用ひたるを後には、直ちに母親のことをいふ詞ともなれり。また、兩親に通じていふやうにもなれり。○下り立ちし。河邊に下り立ちて遊べることのことをいへるなり。

○一首の意は明かなるべし。もとすみたるわたりのはや河邊をすぎて、昔、母親の袖にすがりなどして其の河邊に遊びたる時の事など思ひ出してこひしく忍びたる歌なり。それといふところはあらねど、やさしき歌とやいはむ。

○

朝霧にしつまりはてしをやま田の
はなみのすゑをわたるかりがね

○これも仝じ人のなり。○しづまりはてし。俗に靜まりきつたるといふことにて、極めて靜になりたるけしきなり。○をやま田。山田といふに仝じ。をは單に語調を助けむ爲に添へたる詞のみ。○はなみ。稻の穗のなびくさまの、波のやうに見ゆるより、それに取り立てたる詞なり。○わたるかりがね。飛び行く厂といふことなり。

○一首の意は、朝霧立ち極めて靜まりきつたる山田

の、波のやうになびきて見ゆる稲穂の遠く列なりたる彼方を厂が飛び行くよといふことにて、誠に土佐派の山水畫にも見るべき様なる麗はしき歌にこそ。

○

あらしよりまづうづもれてあはだ山
　雪こそつもれ峯の松はら

○あらしよりまづうづもれて。松ふく嵐が、先づ第一に埋れてといふことにて、嵐が埋るとは、降る雪に嵐のたえてきこえずなりたるけしきなり。雪ふる時は、なか／＼にものしづかなるものなり。○あはだ山。京都東山の隣なり。この歌は岡崎に住みける頃の歌なり。○雪こそつもれ。雪が降りつもるといふことなり。○みねの松原。粟田山の峯の松原なり。松原とは松の多く生ひたれどいふなり。
○一首の意は、松ふく風が第一に雪にうづもれて、いとしづまりに靜まりゆきて、粟田山の峯の松原に雪がいよ／＼深くふりつもるよといふ意にて、いと明けし。いとしづかにふかくふりつもりゆく雪けしき見えて、いとおもしろし。

源氏物語講義（二十）

下田義天類講義
山川鶬一筆記

參りてはいとゞ心苦しう、心肝もつくるやうになむと、典侍の奏したまひを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、實にこそいとしのび難う侍りけれとて、やゝためらひて仰事つたへ聞ゆ。暫時は夢かとのみたどられしを、やう／＼思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひ合すべき人だになきを、忍びては參りたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝを、疾くまゐりたまへ、などはか／＼しうものたまはせやらず。むせかへらせ給ひつゝ、かつは人も心弱く見奉るらむと、思しつゝまぬにしもあらぬ御氣色の、

心苦しさに、うけたまはりも果てぬやうにてなむ、罷りいで侍りぬるとて御文奉る。

○参りてはいとゞ心苦しう云々

命婦は北の方の言葉に誘ひ出されて、今やう〳〵口を開きて語り出せるなり。この一句は、先日勅使となりて此の里亭へ参りたりし典侍が、禁裡にて陛下へ申上げし詞を、そのまゝ北の方に啓する所なり。此のないしのすけの御使に参りしことは、この物語の表面には顯れぬ事なれども、蔭の幕にさることのありしなり。夫を、此のゆげひの命婦の言葉を假りて顯したる所なり。此の物語には、かゝる筆法甚多し。これ文章にれくあることを知らしめたる作者のたくみなり。さてその典侍の言葉に、二條の里亭へ参りて、實際其の光景を見ては、内裏にありて思ひはかりしよりも一層心苦しく氣の毒にて、眞實心も亂れ腸もちぎるゝやうに御座りましたと、彼の人が陛下へ奏上げられたるを、私も傍にて承りて居りましたが、唯今自身に爰に参りて、まのあたり御様子を見奉りますれど、私のやうな深い思慮もなく、淺果敢な心のものにても、其の折のことまで思ひ合せられて、内侍のすけのごとき感情深き人は、なるほどさも在つたであらうと、憚ながら御いとをしさの餘りに、忍びこらへ難き程に存じ奉りますといふ命婦が挨拶の詞なり。○物思ひ給へ知らぬ心地にもとは、吾が身を卑下して言へるなり。内侍のすけの詞をかりて、堪へ難き情を述ぶる所に、一層感情の深きものあるを覺ゆ。○つくるやうになむの下に、侍りしといふ詞を含めて省きたるなり。○奏したまひしをの下には、命婦も其の折御傍に候ひて承り居りしが、唯今自身爰に参りて、現在に御有様を見奉れむといふほどの意を補ひて見るべき所なり。○内侍のすけとは職員令に、尙侍、典侍、掌侍とあり。即其の典侍のことなり。

○やゝためらひてれほせごと傳へきこゆ

前段一渡の挨拶を述べ畢りて、女ごころの涙もろさに、命婦はまたも口隠りしが、暫時こらへて御勅諚を傳へたとなり。ためらひては、しばしこらへむとて躊躇したる意なり。

○しばしは夢かとのみたどられしを云々

以下陛下の御勅諚を、その儘に命婦の語るなり。陛下の仰せらるゝには、御息所の世を去り給ひて後の當座、暫時の間は現とは思召されず。夢ではないかとばかり御心迷ひが致されたが、夢ならで今は醒めねばならぬ。夢にはあらぬ故に心はおちつきても、猶醒むべき方もない。さてはいよ〳〵亡き人となられたと思へば、こらへやうもない。せめては誰かゆかりのものにてもありて、亡き人の噂話でもしたらば、まぎるゝことも有らむかと思へど、其の人もない、唯噂しあふ人のなきのみならず。此の歎きをいかにせむよからむと、語りあはすべき人さへ宮中にはなき故、せめて其方なりとも宮中に居れば、亡き人の噂なりともして、心を慰むべきに、其の話相手に、何卒參内しては下さるまじきか。表面の參内が憚り多しとならば、内々夜陰をはかりてなりとも參られよ。若君源氏君も、其方にのみありては、甚不安心でならぬ。其方にて、女房たちの泣き哀みて居る露つぼき中に日頃を送つて居らるゝも、小供心に哀しからうと思へば、一層不憫に思召さるゝ故、其方もそこを思ひやりて、若君を引連れ、共々に參内するやうにしたまへと仰せらるゝなり。○たどるとは手取るなり。暗き所などにて物を手してまさぐることをいふ。それより遷りてこゝは覺束なく月日を經過するよしの意に用ゐたり。○露けき中にとは、二條の里亭の涙しげく悽愴たる中にの意なり。秋の景物なれば草の縁を加へ採りて斯くいへるなり。

○などはか〴〵しうものたまはせやらず。むせかへらせたまひつゝ

陛下はかやうなことなど仰せらるゝやうなりしかども、これらを仰せらるゝ間も、御

胸せきあへさせたまはで、はきぐ〜とも仰せられたまはず。半を云ひかけてせきくる涙にむせかへらせたまひてれはしましながらの意なり。○などとは、御勅諚は猶この外にもありしを省きて、典侍が吾が詞をそへていへるなり。○はかなかしうとははきぐ〜ともなり。○のたまはせやらずは、云ひきらせたまはずなり。むせかへらせは涙にむせかへらせなり。つゝは前回にて解きたる第一の意。即ながらの意のつゝなり。

○かつは人も心よわくみたてまつるらむと、ればしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの云々　かつと云ふ詞は、一方にはしかありつゝ、また一方にかくあるといふやうなる時に用ゐる接續詞なり。　陛下は、一方にはなき更衣を慕はせ給ひながら、また一方には陛下には陛下の御擧動を女々しく心弱きてとなりと、禁裡の人々の見奉る　ならむか　とればしめして其の邊の御遠慮あそばさるゝ御様子が、いかにも御氣の毒なりしによりて、猶委しく　陛下も語りもし、吾も　承りもしたきほどなりしも、さまでは却りて人目をかねさせたまふやうなるが、御痛はしきにより態と委しくは承　り果てもせぬやうに、こちらより程よく切上げて宮中を退出しましたとなり。

○とて御文たてまつる　斯々の次第であるとて、以上のごとく陛下の御傳言を物語りて、更にまた御宸翰を取出して、北の方へ奉りたるなり。



主從心得草（後編續）

諏訪　忠元　寄贈

如何様楠正成公のやうに心得たき者也。主從といふけれ共、主は家來を主人と思ふべしとの仰せなり。か

やうな心持でなくては、大事の御用に立者なし。此事は主從三へん下の卷楠の所阿部大藏の所を見て考ふべし。又家來をちりあくたのやうに思ふ主人の下には、大事の用にたつ人なし。孟子のいわく、●君臣を視る事土芥の如くなれば、臣も君を見る事寇讎の如し、といふは是也。又いわく、●君仁なれば仁ならざる事なし、君義なれば、義ならざる事なし。とある聖語を以てもよくしるべし。是は君の心得を申す迄にして、臣たる者は君の仁不仁にかまわずと、●忠義一途に主用を勤むべし。是は君たらず共臣は以て臣たるべしと、聖語なり。又主人は、家來の非分を一々せんさくすべからず。あまりせんさくしては、かへつて不和となる事あり。心得て使ふべし。又家來は主人の非を少しも見ず、忠義金鐵の行ひをすべし〇忠孝の二ッの道は平生に人のうへこすやうにつとめよ〇忠孝の守りを常に放さずば、いかな惡魔も寄付ぬ也。此歌は家來の守り本尊、福德安穩の根本なり。惡魔を拂ふの御祈禱なり。是等の歌をよく心得て、不忠不孝は少しもなきやうにすべし。扨主人といふ者は、外目より見る時は樂なやうに見ゆれ共、殊の外大儀なる役にて、中々ねた間も心の休まる事なし。我身一ッでさへ世話の多き者なるに、まして大勢の奉公人のからだを預りし事なれば、其苦勞筆紙に盡しがたし。手を組で考へ見るべし。家來の病氣は則ち主人の病氣となる、家來が耻かく事あれば主人の耻となる、家來の事は善惡共に皆主人へかゝる者故に心配なり、是にて萬事察すべし、祝儀不祝儀共に主人の苦勞となる、家來たる者この事をよく知つて忠義を盡すべし。

新瓦（續）

余欲ㇾ遺ニ道川先生書一曰若思言ニ彥阪公執筆一。秩秩德音。賜ㇾ敎實多。若思不佞。斯之未ㇾ能ㇾ聞。既溺ニ於市一。又耕ニ於野一。不下敢與ニ士君子一齒上者。十二年ニ於今一矣。況敢狂

言以犯執事之威嚴。雖然。疾痛慘怛。未嘗不呼父母也。執事豈非民之父母哉。願矜其情。不錄其罪。而熟察之。若思聞之。丈夫生而願其有室。女子生而願其有家。此親之所以憂也。夫親憂之。子敢恝然。詩曰。求我庶士。迨其吉兮。可以見其憂矣。若思將以姊之女喩焉。其未笄也。家貧親病。殆無以鞠之。將屬諸人以爲後圖。若思不可。乃謂女曰。唯君子能憂人之憂。如己有之。細人不能也。女懼。欲待其人而後往焉。執事閔之。乃命若思。獻諸藪公。公善遇之。施及其親。是若思雖窮居草莽。然未嘗不被二公之澤也。敢忘其德。今此女也。既以君子爲君矣。見其事上也。見其臨下也。見其與賓客言也。皆將國家之憂是憂。而有以解焉。庶其波及已以慰親乎。待之十餘年。猶未有家。而年三十矣。君子將聽諸無聲。視諸無形。而爲之慘然也。況其親乎。夫藪公之德。可謂厚矣。若思豈不望其有終哉。又豈不望執事贊襄以卒大惠哉。若思老矣。不得復就下風而承後命。故敢獻書以布腹心。唯執事圖之。又與女書。以觀其志。女固止之。故不果也。女名仲合原勝房之子也。性孝友以余此擧爲不已知。乃復書曰。我家多難。老母及弟。實集于蓼。吾所以得救其急者。君之賜也。若使我嫁。將唯人是從。雖欲如此豈可得乎。是使親窮。以自爲也。是於親之憂。損其一而益其十也。何以嫁爲。余未肯從。欲微勸之。乃詢諸周。然後知其不可以不從焉。嗟乎仲之孝也。不踐迹。不阿世。變而通之。非能權者。未易及也。

樵者利山。魚者便水。冬裘夏葛。男唯女兪。易此必亂。王公自稱孤寡不穀謙。它人則僭。陽虎曰。爲富不仁矣爲仁不富矣。此好言也。亦孝言也。公甫文伯死。其母不哭焉。疑其好內也。論者謂此賢母也。不然必妒妻也。它如好賢之與悅色同辭。習儀之與善於禮齊名。或美或惡。存乎人焉。是故孝子不自言其勞也。忠臣不自言其功也。慈父不自言其恩也。

新瓦終

新瓦の後に記す

予、既に、東里先生作る所の新瓦を讀み、慨然として大息して曰はく、久哉斯道之岐也、何ぞこの文を問ふに遑あらんや。昔者、王新建、洛に在り、李何諸子に參伍し、以て彼古文辭を攻めしといふ、猶これ東里、壯歳南郭春臺に徵逐せしに酷肖せざらんや。是を以て新建の詩、往往にして老杜の遺音を聞き、東里の文、優かに秦漢の壘に摩するを覺ゆ。夫虎豹の鞹、安んぞ羊犬の鞹ならんや。文質彬彬、而して後、君子を見る、東里の謂乎。藤樹、執齋は野、一齋は史、予、以ふに、日本、姚江を學ぶの士、唯、東里、庶幾からんか。何ぞ、聞ゆるなきの太甚しき哉。

又、歎じて曰はく、規模はそれ大ならん哉。朱王を攻むるの徒、何爲れぞ狹少なるや、今それ生理を談るものは未だ以て文章を語るべからず。今夫れ、文章を語るものは未だ以て性理を語るべからず。何ぞ況んや道德文章の士に於てをや。菅神廟碑、一篇、新瓦附錄に載する所たり。文の雅健、詞の頸拔、之を宋頭巾者流に求むべけんや。

戊戌十二月於東台山中　聽劍生記す

菅神廟碑

夫他山之石。可ニ以攻レ玉。烏喙之毒。可ニ以愈レ疾。君子之患。可ニ以觀レ德。何則彫琢不レ至。爭尹不レ全。剞殺不レ備。痛痒不レ除。艱難不レ及。至誠不レ著。是故獯鬻侵レ豳。大王以興。四國流言。姬公益聲。陳蔡圍解。尼父彌高。蓋損而益レ之。抑而揚レ之。去而就レ之。天之所下以表ニ章其德一而耀中諸萬世上者。於レ是乎。爲レ無レ憾焉。而知レ天者。有以順レ之。故古公亶父來朝走レ馬有ニ以安レ之。故公孫碩膚赤舄几几有ニ以樂レ之。故七日絕レ糧。弦歌不レ衰。豈翻動ニ心忍レ性以弗レ怨焉乎哉。吾故右丞相菅公。雖レ未ニ之逮一。亦其細也。何以徵レ之。公諱道眞。字三。天穗日之胤也。昌泰中。以ニ儒雅謹愼一爲ニ上及 上皇所ニ親信一。其登ニ泰階一也。元首股肱。聚レ精會レ神。穆穆在レ上。明明在レ下。雖レ有ニ讒慝一將レ無ニ能爲一不レ廢未レ幾。衆口囂囂。使ニ公西

遷也。然後公之德可得而觀焉。何則吞舟之魚。非溝瀆所容也。棟梁之材。非部婁所有也。騏驥固不可以與罷驢為駟焉。鳳皇固不可以與雞鶩同群焉。君子固不可以與細人共事焉。則公之不遇天也。彼遜爾者焉能使之。公固欲退。踰月三請。非知天者。能如是乎。夫唯知天。是以弗怨。夫唯欲退。是以安之。但樂之。則未也。何以知之。誦公之詩。觀公之禮。而知其能弗怨也。思其所學。視其所尚。而知其未能樂也。自公薨後。京師屢災。讒人多死。蓋天動威以討有罪爾。而好事者莫之能辨。乃謂公為厲以報怨焉。朝廷為之建祠。然後止也。無乃比諸良霄乎。於是造怨言。設鬼事。脩怪語。以附會之。非賊德也。奚翅讒口。凡百君子。蓋攻其非八百年矣。而未能勝也。今於公之事。擇其尤大者。而討論之。因野史所書。而折衷之。所以左擁君子也。下毛之野。有公祠焉。屬天明鄉。其承祭者。松村廣休。出井從陽。松村師文等。實能知公。而尊奉之。乃欲頌其德刻之于石。以識[illegible]及無窮也。屬予代之。辭不許。乃敢然也。銘曰。

昊天靡常。作威作福。夢夢游衍。昭昭來復。儆予臨女。前倚後伏。非心淫志。進退維谷。今此下民。曾不是虞。且信且疑。若有若無。違命悖德。自速其辜。遂逢彼怒。瞻望號呼。維聖及賢。順之樂之。與俱周旋。莫敢差池。朝坐廟堂。夕臥茅茨。不以彼喜。不以此悲。公之未喪。伊乃周。執圭。鳴玉。誰知其憂。遺世罔極。特舟西流。奉命海隅。不怨不尤。漁人舟子。以君以親操杖授几。如子如臣。沒世不忘。采藜采蘋。日薦月祀。號為天神。無人不尊。靡國弗悅。立廟作寢。奕奕布列。松柏垂蔭。梅華如雪。侯神所愛。勿翦勿折。彼昏不知。以已視賢。忘德脩怨。謂神亦然。欲樹之威。祇碩其寃。其寃孔碩。不啻左遷。維二三子。寔在天明。事神以禮。克敬克誠。仰贊洪煇。永存風聲。嗟爾來世。熟思茲銘。

謁菅相公祠詩

衡茅露爲レ霜。蟋蟀鳴ニ荊扉一。幽棲莫ニ與歎一。田野誰相知。開レ帙懸ニ前脩一。曳レ杖望ニ廣畦一。廣畦坦且靜。中有ニ菅公祠一。鬱鬱松垂レ蔭。森森梅交レ枝。就レ階脩ニ禮容一。憑レ軒想ニ昔時一。昔時何罔レ極。紛紜亂ニ是非一。路險豺狼嘷。林昏鴟鴞飛。休勳淪ニ西海一。遺愛泣ニ群黎一。況復流離子。感レ物心傷悲。仰歎桂華落。俯惜蕙草萎。風厲誦ニ甘棠一。天寒懷ニ緇衣一。恨恨不レ能レ去。含レ情涕漣洏。聊和ニ巴人曲一。以比ニ祝史辭一。辭殫情未レ已。徘徊恨ニ晩暉一。

（完）

うらめしの雪

白松園主人

夜をこめてふる雪に、今朝はいたう積りて、野も山も、玉しく庭となりぬるぞ、いとめづらかなる。よべより塒失ひつる雀の、ちよ〳〵と鳴く聲の、悲しげなるに、空稍や晴れて、朝日花やかにさし出でたれど、軒端にむれ來ていとかしがましうなくものから、なほあさりかねたる、いと哀れなり。

まだきにたき出でゝ、茶などわかして、朝餐したゝめつゝ、かねて用意したる、草鞋とう出、股引はきなどして、二階の窓、すこし開きて見渡すに、まだ踏み分けたる人のあとだになく、尺ばかりも、つみつらんとおぼしきに、あたりの犬なん、勇ましげに、走りきほひて、まろびなどする、いとをかしき。こはこれ、今より五とせ前なる、年のくれに、おのれが故郷なる、西の國のある山里に、歌枕求めにとにはあらで、よに口惜しう、たづきなき折なりければ、里の學びの舍に童等を集へて、物いひ聞かせなどしける時の事なりけり。されど學びの舍の二階に、起きふしゝて、自ら炊ぎ、自ら煮て、且つ食ひ、且つ寢ぬるに、片山里の心安さは、怪む者もあらで、なか〳〵に憐む者もありて、隣の嫗が、衣濯ぎくれなどするもうれし。

冬季休業にもなりぬ、待ちわびすらん母にあひ見んうれしさに、歸る心の急がれて、明日はつとめてと、

思ひたるに、よひのうちより、かきくらしふり出でぬ。あなにくの雪やと、うちかこてど甲斐なし。歸心矢の如き身の、雪ふりたれどとて、思ひ止みなんやうもなければ、風呂敷包取りて、肩に投げかけ、脚半草鞋を、はきしめ〳〵、立ち出でたるに、吹く風は骨に徹れども、野山の氣色、云はん方なくめでたし。むかひに立てる、番山しげ山、白玉しき連ねて、麓を流るゝ砂川のみぞ、黑う見えたるに、賤が伏屋の改まりたるさま吳竹の撓みたる、松が枝のをかしげなる、中にも、枯木のさまなん、すぐれてうるはしく、げに繪にも言にも、及びなくめでたくて、しかも、こちたき思ひせざるは、春秋のながめにも、たちまさりておぼゆ。寒さも之れに忘られて、行きと行くほどに、或は峰を攀ぢ峠をこえて、幽溪雪のとづる處、白雲嶺を包む處、寂寞として乾坤沈めり。只數鶯の忍びねと、妻呼ぶ鹿の聲のみす。人跡ふつに絕えて、雪の谷間に、梅が香とむる風流士もなく、篁堀らんずる孝子も見えず。折柄再びふり出でゝ、風颼々とおもてを撲つに、いとゞ困じはてつれども、道に休らう家もなければ、とかくして十里の道をぞ、日もくれて、燈火つくる頃ほひになつかしき我屋の門につきぬ。袖なる雪を拂ひもあへで、戶をほと〳〵とうちたゝき、今なん歸り侍りたると、いへども母のいらへもなし。いぶかしみつゝ、隣なる下僕がり行きて、母はいづらととふに、叔父君のもとにといふ、叔父なる人は、近きわたりにあなれどそがまゝ急ぎ行きて見るに、家內何となく、うちしめりたり、訝りつゝ足を濯ぎて、坐に上りけるに、母は出で來給ひて、武一なん、病重きと告げ給ふ。武一とは即ち、おのれの從弟にて、年さへおなじく、只おのれより、一月の兄なり、さる官立の學校に、在學したりけるが、いぬる秋季の修學旅行の折に、ふと腸加答兒にかゝりて、さまでにはあらねど、學校にも出でゞ、療養中なる由は、其頃告げこしたるふみにて、知りつれども、やがてをこたるなるべしと、心にもとめざり

しに、今猶癒えずあらんとは、かけてもおもはざりけれど、大方ならずおどろきて、急ぎ枕邊に進みよりて、今こそ歸りたれ、心地は如何にと、尋ぬれど、枕をあげば、笑みて、いと久しう隔りつるものを、病の床にてあひぬるこそ、本意なけれ。心地には障らねども、疲れのみいやまさりて、物にも似ずなんといふ、そは心苦しき限りにこそ、しかはあれど、心ひとつをゆるやかに療養し給へ、春にもなりなど、をこたりはてん事、疑ひなし。只本意なきは、こたびこそ、例の唱歌ならはんと、ふる雪の道すがら、思ひいりて歸りしものを、いとうらめしと笑へど、君もにこやかに、まことになり、此の正月こそ、痛飲すべく、思ひ期しつれ、二豎の神のあれまさるに、少名彥のおん神の、くすしく妙なる藥もあらど、乞ひ得て救ひ給へといふも、苦しげなりけり。

年も改まりぬ、注連縄引きはへて、立つる門松の、緑濃やかに、知己朋友うちつどひて、酌みかはしなど、世の中すべてさゞめき賑へども、靈ある家の門には、柳の糸の芽も、春の色だに見えず。あるひ、君はおのれの母を招きていふやう、叔母の君よ、この病は、とても癒ゆべしとは思ひ侍らず。おのれも末はるかに、志ざす事の侍りけるに、かくては草木と共に、空しくなりなんこそ、死にての後のうらみに侍れ。いかなる業果の、あなれどにや、此のなやみにはあふならん。思ふに苦しき父をせめて、學資出させつる報いの來たるにて、本づく處は、不孝の罪になんといつゝ、さめ〴〵とうち泣きけるよし、母のおのれに告げ給ひけるを、聞きぬるおのれも、思はず淚迸りて、只泣きに泣かれぬ。

余りの心もとなさに、おのれは醫師がりおとづれて、此の病癒ゆるものか、癒えぬものか、包まず聞かし給へといへど、醫師は容を正して、いといたう、心苦しき極みには侍れども、おのれの診る處にては、十中の八九は、むづかしう侍りなんど、いはれて、おのれは

いと／＼膽つぶれて、手に持つものゝ、落つるもおぼえで、歸りくるに、すべて夢路を辿るが如し。うからやから集ひ議りて、又異醫師を招ぎて、見せけるに、その醫師いへらく、余の診る處は違へり、さばかり、手を措くまでの、病とも覺えずとて、そのゆゑよしを、説き聞かすに、少し心強き心地のせられて五日六日を經るほどに、稍やをこたるやうに見えけるを、よろこぶこと限りなかりしは、淺ましう、この道にうときものゝ習ひなりけり。かくておのれは、學びの始業期にもあなれど、うしろめたさは、限りなけれど、よきにも惡しきにも、俄にあるべき病ならずとのよしなれど、若しわろからんさまの見えなど、とくに知らせ給へと、ちぎりて、また旅にのぼりぬ。あはれこれなん、長き世のわかれならんとは。

さる程に、おのれは、ふみもて屢々病を尋ねぬ。次第に癒えぬべきさまなるよし、告げ來りぬ。胸のさわぎの、少しはなぎ行く心地のするに、自らの望みと、醫師の許しとによりて、遂に病院に入ることゝなりぬるよし告げ來りぬ。寒さはいよ／＼はげしくて、雪は日毎に降らぬ日もなし、なべて病は、暑さにも寒さにも、障る習ひなれど、かくてはいかゞなど思ふに、ふつに便りもなし。さては病わろくて、皆々遑なきにてこそなど、しづ心もなし。きさらぎ十六日といふ朝の、雪のいみじう降りたるに、忽ち電報は來りぬ、胸先づつぶれぬ、取る手もわなゝかれぬ、一目見し目もくらみぬ、氣をしづめて、猶よく見るに、紛ふ方もなく、けふなん、みまかりぬるとの、文字なり。今更のやうに、悔いなげゝど、せん方もなく、直ちにみ雪ふみわけて、只々心もそらに、走り惑ひて家に歸りぬ。（未完）

梅妃傳

赤松景福譯

本傳は唐曹鄴が著せるものにて、梅妃とは唐玄宗皇

帝の妃江氏をいふなり。當時宮女寵を爭ひしさま、皇帝これにおぼれて遂に國を傾けしことなど、今なほ、見るが如くなれど、聊こゝに譯載して大略を似す。

編者つけていふ。國體ことなれど、彼の國には、かゝることもありけるなり。皇帝の女におぼれたるは更にもいはず。女の時を得がほに、恣なるも醜からずやは、我が國にしても、下ざまには、かゝる類なきにしもあらじ。女も心すべきなり。よし、恣に、身をもち得べしとも、自、愼までよからんや。

梅妃姓は江氏、その家代々醫者にして、父は仲遜といへり。梅妃僅に九歳の時、詩經の周南召南の詩を誦しけれど、父これを奇しき材ある者と思て、采蘋といふ名をつけき。（此采蘋の字詩經にあり）唐の開元年中高力士といふ者、時の帝玄宗皇帝の御用にて、閩越地方に使に出ける折、采蘋の年少く顔好きを見て、都に連歸りて、宮仕せしめけるに、大に皇帝の寵愛を得るに至る。さて長安の都にては大內、大明、興慶の三宮、東都にては大內、上陽の兩宮、宮女の數併せて、四萬人に殆き程ありけれど、一度梅妃を得られしより後は、皇帝の目には、他の宮女を塵芥の如く見られ、宮女自らも及ぶましく思へりとなん。梅妃素より文才ありて、自ら昔の謝女（謝道韞）に準らへ居れり。常に淡き假粧し、雅やかなる衣著て、容儀の優美しき樣は、繪にもかき難き程なり。その性尤も梅花を好みて、住居のあたりに、梅を幾株も植たりけれど、皇帝は梅亭といふ額をそこに掲げさせつ。梅の開時は皇帝詩を作りなどしつゝ、御覽じて共に花の本を離れず、或は夜半頃に至ることもあり。皇帝戲に此妃を梅妃と名づけ賜へるも、その梅を好めるを以てなり。梅妃作れるものに、蕭、蘭、梨園、梅花、鳳笛、玻盃、剪刀、綺窓の八賦あり。此時天下太平にして、皇帝諸の皇族と親遊びて、その御酒宴のある度ごとに、梅妃は侍らざることなき程になりて、自然寵愛を恃む樣に至る。一日皇帝

梅妃と闘茶といふ戯をせられしに、梅妃の方勝けれど、皇帝諸王に向ひて、此梅精（即ち梅妃の事は）世に勝れたる者にて、今日の闘茶も朕に勝りと曰へど、梅妃答て申すやう、草木の戯（即ち闘茶の事を云）辱くも陛下に勝ぬ、されど天下を治むる鹽梅を調へ賜ふ事は、（此語其座に取合せて面白し）素より陛下の御事なれど、賤しき妾どもの、いかで申すべき所ならむゝと答へまつれど、皇帝甚悦び賜ひけり。しかるに楊太眞（即ち楊貴妃）の宮に入てより、梅妃の寵愛はそれに奪るること丶成ぬ。皇帝はさのみ疎み賜ふにはあらねど、貴妃と梅妃と二人目を反めて、道を行くに互に避などせり。皇帝貴妃梅妃の二人を以て、昔の娥皇女英に準へ賜ひけるに、此娥皇女英の二人は、彼國人が古くより崇し舜帝の妻なれど、今の皇帝の世に相比ていふべきものならずとて、時人の笑柄となれりと云ふ。さて貴妃は妒深きのみならず、その智巧なりけるに、梅妃はそれに異なり、柔和なる性にて、何事も得勝ことをせず。後竟に貴妃の爲に上陽宮に遷されて、そこに詫しう月日を過しけるに、皇帝さすがに梅妃を忘れ兼て、夜潛に御使を以て召て、翠華西閣に入て、何くれと元の情好を語らひける程に、皇帝いと憐に悲しう思召て、その明の日覺す寐過し賜ひければ、侍御の者遽しく申すやう、貴妃最早閣の前まで參られたり、いかゞ成賜ふべからむと申上しかど、皇帝御衣を着て、梅妃を抱て幙の間に藏したまふに、貴妃參て、梅妃いづくにかと問まつれど、皇帝僞りて、彼は東宮にありと曰ふに、貴妃それをすかさず、然れど爰に召賜へ、今日共に温泉に行むと乞申せど、皇帝、彼女には既に暇遣しければ、汝ともに行べからずと曰へど、貴妃益固く乞て止ず。皇帝去ども左右を顧みて、御答もあらざりければ、貴妃いたく怒て申けるは、御酒御肴玉座の邊に亂て、又女の舄あるは、怪しう、誰參て昨夜より御寢に侍ひし、愉快に酔臥たまひて、朝日さすまで政を開召たまはぬは如何、陛下は出立して政を開召賜

ふべし、妾は還御まで爰に待候はむと迫て申けるに、皇帝、今日は病あれど、政を聞べからずと曰ふ、貴妃愈怒て、直に私第に歸去れり。梅妃も程なく出ける後に、皇帝使してありつる舄などを持せて、梅妃が許に返し賜ふ。梅妃その使に語るやう、皇帝は最早我を棄給ひけりといへど、使、皇帝は御身を棄給ふに非ず、只貴妃の情なき故にかやうに成なりと云ふ。梅妃笑ひて云く、皇帝我を憐む時は、彼肥婢（貴妃は肥たる女なる故、貶めてかく云也）の機嫌の傷ふを恐れて、我をかやうに遠け給ふは、是即ち棄給ふにあらずやと云ふ。

（次號完）

浮世いかだ舟

作者不詳

浮世坊主君の御子息に異見の事

今はむかし、主君の御子息ことの外のあら物にて、町人をみせつけ、百姓をおどし、喧嘩すきして悪行をいたす事かぎりなし。浮世坊ひそかにいさめ申けるやう、およそ人の子たる者は、あるひは文學の道あるひはおのおの〳〵の家業をつとめ、人にほまれを取、家をもおこし、我身をたてゝすゑ久しくさかえん事こそあらまほしけれ。たとひ其親よく仁義の道をつとめて、もしは一國一郡のあるじとなり、まつりごとすなほに、めぐみひろくおこなはれ、人みなその跡をしたひ、そのめぐみをかたじけなうよろこびしも、その子として世をつぎて、おこなふ所道にたがひぬれば、親のほどこしける仁政のめぐみまでも、いたづらになきがごとくになりゆくなり。いはんやわが身もつひにほろぶべし。もろこしに狄仁傑とてまつりごとたゞしき人有、魏といふ國のあづかりとなり、國中に仁政をほどこし、百姓をあはれみ玉ひしかど、民此めぐみにほこり、そのうるほひをたふとみけり。既にして、てきじんけつむなしくなり玉ひしかど、民そのわかれをなげき、狄仁傑を木像につくり、やしろをたてゝ神にいはひ、うや

まひつゝしみてまつりけり。その子に狄景暉といふもの、すなはち魏國の司功參軍となりて、百姓をむさぼり、りんじのくわやくをかけて金銀をかすめとり、年貢をぞすこしもゆるさず、もぎとりてきとり、たかがりのあそびにでんぞくをあらし、民をくるしめけるほどに、村里かじけおとろへ、田地をうり、妻を沽却しけれど、おの〳〵うれへなげきて、狄景暉をにくみ、うとみはてゝ狄仁傑のやしろをこぼち、その木像を引出して大路にさらしけり。これひとへにその子のあしきおこなひの、なき世の父におよびけるためし也。よく〳〵心得玉へといふ。御子息きこしめされて、大に無興し玉ひ、うき世坊がかしらのはげて侍りけれど、何をはげめが異見がましき申事かな、いきはげのにふだうかなと仰られしに、うきよ坊申ていはく、さのみにはげをしかり給ふな、はげをしからぬ本歌の侍るぞかしと申す、その歌はたれのよみけるぞとの給へど、源の俊頼朝臣の歌に、

うかりける人をはつ瀨のやまおろし
　はげしかれとはいのらぬものを

と侍べるからは、はげをぞさやうにしからぬものにて候といへど、大わらひになりてやみぬ。

昔ふんどし

金津常十郎

客曰、褌をシタオビといふは、下におぶるもの故の義なるべけれども、フンドホシといふは、何よりいでたる譯ぞや。

主曰、フンドホシは、踏通の義なり。昔の褌、今は股より引足て、脚の甲までのぞしたり、夫故に股より引のぞしたる義を以て、世上に股引と名づけて、着用するものは昔の褌の遺風なり、昔は、わづか股までにて、股より下の方はなし。唐土は、今も、昔の儘の由なり。是に両足を踏みいれて通すゆゑ、フミドホシの

義なり。ミの字を、ソといふは、ミム相通ふゆゑのよみくせなり。又、フンドホシを略して、フドシともいへり。今代省畧して、一筋の布を用ひて、褌の代りに腰に引まはして帶ぶるゆゑ、俗に、マハシとよべり。又、四國邊の者は、褌をヘコシといふ。是は屁を漉て、通すの義にて、尤下賤のつかふ辭なり。

やまのかみ

客曰、おのが、妻の事を、人に對して、俗にヤマノカミといふ義を、或人の説に、ヤマノカミは、もと病神と云ふ事を畧したる言にて、其のこゝろは、取付て、命をちゞむるといふ惡口の異名なるべきかといはれたれども、予が考は、山神の義にて、其の譯は、奥に居る者といふ意なるべし。夫は、表の方を主り、妻は、奥向を司る者なる故に、俗に人の妻を奥樣とよぶなれど、山の神と異名するも、またおもしろきか、しかし、貴所は考ありやいかゞ。

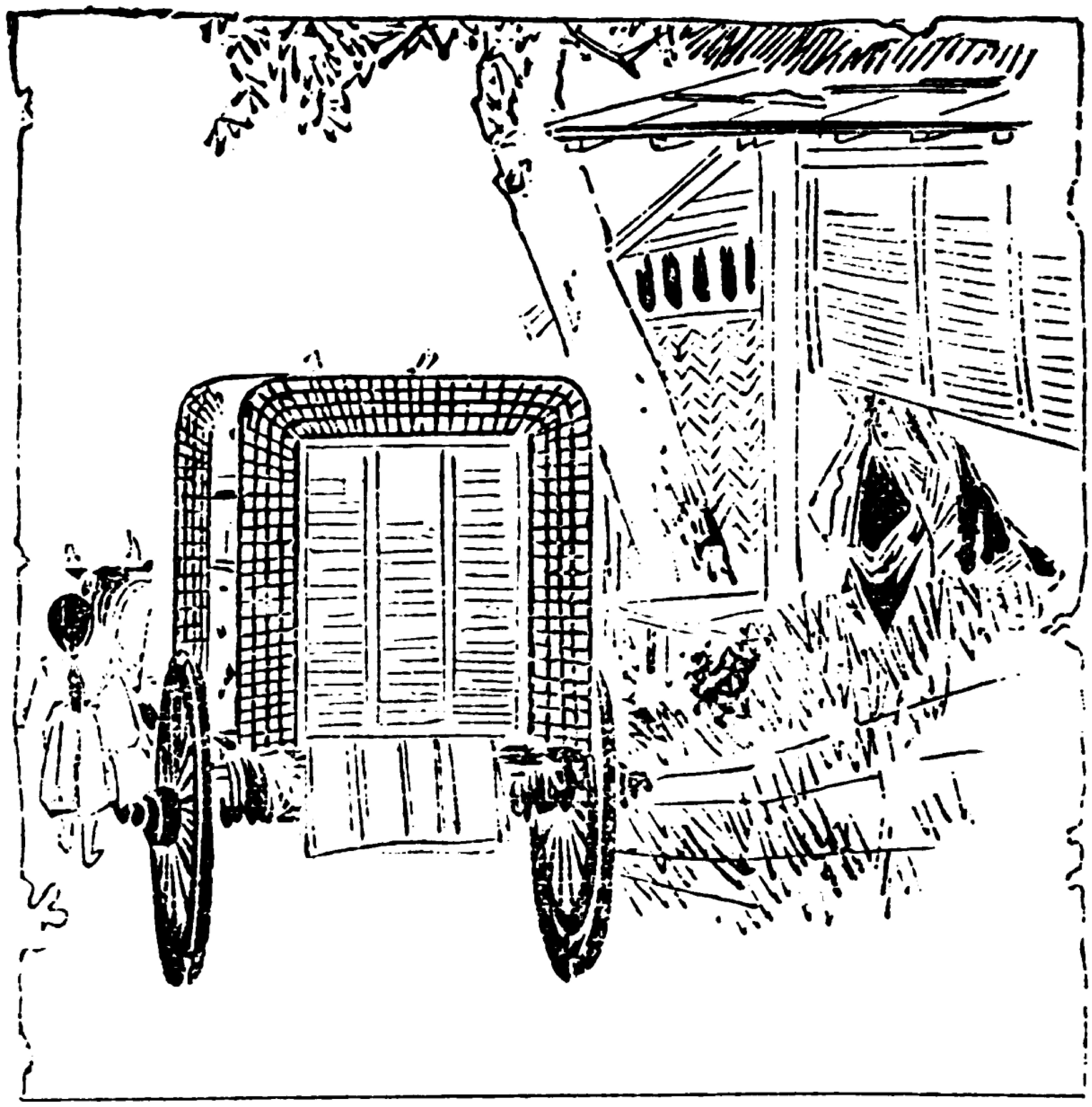
主曰、公が考のごとく、奥に居るの義なるけれども、予は、別に考あり。是は、イロハのくさりを順にいひて見る時は、オクヤマとつゞきて、則ヤマの上は、オクなり。それゆゑ、假名にて、ヤマの上といひて、奥の事になる隱語なるべし。

才くらべ

蓬生の屋女史

むかしもろこしにては、駿馬の骨をかひて、以てよき馬を得ましと思ひ、又郭隗と云ふものは燕王に己をすゝめて、賢臣を致せり。之は、それと事變り、己を罪して人を戒しむ、長歷の帝の御世なりけり、庶官の衣の袖、やう〳〵廣くなりゆきけるに、帝、よろこばせ給はず、侍中をして、小野右府藤原實資に諮はせ給ひけるに、實資答へ奉るやう誠に聖意の如く世の中太平にまかせて、奢りぬるぞゆゝしう候。請ふ、臣、まづ罪を受けなば衆必ず云はむ、臣、老臣を以てすら亦なほ是のごとしと、更ば知らず〳〵、餘を懲し得らる

べしといふ。上其の意に從はせ給ふ。明日、實資長袖を着して入朝ありけるに、上大に誡しめ給ひて遂に朝



をとゞめ、門を杜づること數日、それより後敢て朝衣、制に踰るものなきに至りしとぞ。延喜の世にも、時平罪を得て衆をこらしゝよしなり。誡に衆をこらさんとには、先づ己をつゝしむ事、此の如くすべし。

禽獸の言行

田端の隱居

湯屋の煙を見て火事ぞと、ひとりわめけば誰れも〳〵れどろき火事ぞ、火事ぞと呼はり。夕づ方取りこむを忘れて夜中なほ木にかけある裕衣にれどろきて幽靈ぞとかけこめど、之に同じて、げに足なしあなまぐさやとわなゝきかけこみさては、墓場にとぶ燐を人だま鬼火とわめきたて、云ひどよみ、一人わめくを二人傳へ三人語り、はては百人、萬人怪を傳ふ。多くは根なし草、浮きたることの多きぞかし。かゝるを一犬虚を吠へて萬犬實を傳ふと云ひて、思慮ある人間のなさぬ事なり、食を見るごとに喰はまほしがるあり、これは

蠅に類せる人にて、さやうの者は胃を損んじ、腸をそこね、これら赤痢のはげしき病をさへ引き起す最もいやしき動物心、動物にても鶴龜に聞かれんは耻づかし。されど動物園のつるは、鳩、つゞめの食をさへとりて食す、をかしきことなり。動物園の猩々、酒を飲みしや我はつにひ見も知らず。人の中によく酒を飲みいつも赤き面して、舌もまはらず、業をもせぬを猩々と人呼べど、猩々は、酒を飲むにやとをかしくぞおもふ。また物を惜しみ、食はかびはへ、くさりそこぬるまで、貯へ置き、金錢ふところを放すをいとふ、これむぐらもちに似たる人にて、さやうの人は遂には穴倉に命を終はることもやと中々にあやふくぞ思はれぬ。

繰言　　石南

首に十斤の錘をかけよ

近頃のわかき者、殊に教育をうけたりと、いふもの丶首には、余程太き骨の出來たるらしく、イカナヽ下らず、教育の力は、實に恐ろしき者なりけり。親に向ひて、夫に向ひて、兄姉に向ひて、その他世間の長上に向ひては、尚更のこと、輕蔑するを以て得たりとなす。或人、そは教育を受けたりとて、いまだ眞髓に至らぬなりと曰ひぬ。げにさもありなん、よく實れる稻は益々穂を下ぐるものなれども、さては彼れ等の首に十斤の錘をかけたらどいかに。

舊弊と新弊と

老翁、その孫兒に向ひて曰く、「御身は氏神樣に詣で丶、常に拍手拜禮したることなきが、今日は必ずかくせよ」と、孫兒答へて曰く、「斯の如き舊弊をの玉ふ勿れ、拍手は無意義の舊慣のみ、大工の築きたる家を拜して、何の有り難きことかあらん」と、己れはこの子に敎へていはん「此くの如き新弊をいふ勿れ」と。己れもまた、若き者の一人なれども、大方の若者が生かぢりの學說に、我儘の上塗をして、國体をも問はず、人情にもあはぬ、

突飛的の理想を、實現せしめんとして、社會の長上をも敬することを知らず、世にある禮儀の眞意をも悟らず、品格の第一要素たる虔敬の念をも欠げるを慨くものなり。己は實に新弊の多きに呆るゝものなり。

編者つけていふ、我が神洲に斯る見あるか。吾人は之を想像にだも思ふ能はず。之實にあらざるなり。必すあるなきを信ず。石南子が此の言をなすものは只其類例を云へるのみ。讀者幸に惑ふこと勿れ。

彼れ何物ぞ

大臣彼れ何物ぞ、吾も遠からず大臣たらん、何爵夫人彼れ何物ぞ、己もやがてかくならんのみと、口にもいひ、心にも思ひて、頻りに名譽ある人の惡口をなし、之に遇ふも、わざと頭を上げて、過ぎんとするが如きもの、往々見る所なり。これ壯は則ち壯なりと雖、やがて高貴の人たる資格なき者たるを表するに外ならず、今若き人の内にても、何れ大臣となる人もあるべく、何某夫人とあがめらるゝ人もあらん、されども、現在その地位に立てる人は、大方それ丈けの名譽ある、資格ある人にして、國民は何人と雖も、相當の尊敬をなさゞるべからず。己れが後來、なるとならざるとには、更に關する所にあらず。またたとひ、意見の異なるも、主義の異なるも、そは別物として、交際上の尊敬は、決して失ふべからず。新聞雜誌に、高貴の人を攻擊することあるも、名を呼びすてにし、或は惡名を以て、呼び罵るが如きは、いかにも下品なるを表はし、卑劣なるを表はし、無智なるを表す。すべて尊敬すべき位置にある人を相當に尊敬することを知らぬ人は、自らも決して、人に尊敬せらるべき價値なき人たるに相違なし。

我利々々亡者

舊時代の整理轉倒して、新時代の秩序、更に修まらず、人は各々我利我利を主として、眼光更に廣からず。舅姑は己れに都合よき嫁を娶らんとして、子の好忌を棚に上げ。夫は妻に貞節を責めて己れは放蕩に身をくづし。妻は夫の己れを愛せざるを攻めて、しかも己れは役者にくるひ。商賈人は只目前の我利を得んとして、永

遠の信用を見すて。教育者は給料の高きをのみ望みて、教育には至つて頓着せず。僧侶は、金儲けに熱心して、法の事は第二にたき。汽車に乘るに、我さへ早くのり、よき座を占むれば足れりとて、老人小兒をはねとばし。先祖の祭り、公けの式日にも、地獄の沙汰も金次第金儲けに外れて溜るものかなとて、更に頓着せず。さても〳〵世は我利々々亡者の集りなりけり。誰か立て之を濟度するものぞ。

尊敬と諂諛と

神に向つては、虔敬の念を有たざるべからず。必ずしも宗旨の異同を問はざるなり。世の先輩に向つては、相當の尊敬なかるべからず。必ずしも意見の異同を問はざるなり。これ人間の義務にして、社會の秩序、之に依て有たれ、高尚の念慮之に依て養はるれむなり。然れども、神の怪しき靈顯を語り、不淨の祈禱をするは、これ諂諛なり、罪なり。世の先輩に向つて、ひたすら機嫌を取り、是も非もなく、その意を迎へんとするは、これ諂諛なり、惡なり。

梅の下風（十八）

白魚女史

今日の御詮議、何となうたのみありげと馮司お早はよろこびて旅宿へ歸り、明日はまた双方白洲に呼ばれたり。何事も奥を悟られぬやう、肝を据ゑやと馮司の心付けに、おはやもゆう〳〵、平氣をよそほふさまに引きかへて、傳吉はなき罪ながら繩めの耻辱にいともしほ〳〵、やぶれし髮髯、くだけし骨をひきずり〳〵、やう〳〵席に就きて、平伏すれむ、之も、日來食を絶ち水にうたれ、思ひ碎けて、よわり細りしいとの身のお專は、我故に、上を煩らはす、ゆゝしさに、夫がゑりへに、面も上からぬを、越前守さま、つく〳〵と御覽せられ、御聲もやさしく、そちが、傳吉夫妻なるやと訪はせ給ふ。兩人は、はつと答へて、いよ〳〵ぬか



づくどかりなり。

さて越前守様は、馮司が願書を讀ませ給ひ、如何に傳吉、此の願書のさまにては、そちは其の妻とかつて通じ、前妻を逐ひ出し、村を押領し、玄かも恨みなき人を怨みて刄害に及ぶ、大惡至極、惡むにあまりあり、お專、そちも、不義者との給ふに、傳吉はたゞきり／＼齒をかみて物も云はず、ひれふしをるに、馮司夫婦はいよ／＼面を起し、これ、傳吉、もはや逃れぬ證據は充分なるべしとはさすを、越前の守ははたとにらまれだまれ馮司、詮議は此方にて致す、强欲非道のなまくら武士の詮議の庭とは違ふぞ、たしなめ、殊に正しき證とて、何かはたのまるゝ證據ぞ、見れど傳吉には羽もなく、翼もなき人幷み／＼の者と見らるゝに四十町の道程りをあゆみ來て、その道には跡もなく、飛石のみに血のあとある不思議の証ならずや、傳吉そちは、猿島河原に何にしに何時ごろ行きたる、おくさず申せ、お專、無實と致すべき證據を擧げよとの言葉に、流石たけく／＼しき、二人も赤面しつゝ、なほ口の中にて、何をかつぶやきたり。

傳吉は、叔父伯母を相手どる悲しさ、まして伯母は母が遺言もあれど、誠に忍どれぬ思ひ、一層このまゝ罪を得て死なんかとは思へど、何も天、天我に明白にせよとての今日の御詮議云はぬは天に背くなりと思ひ決し、はじめて首を上げ、恐れながら申し上げます。馮司は私が叔父、おはやは私が伯母、昌次郎は從弟、お花は從弟女、如何で殺ろしなど致し申すべき、猿島河原へまかりこし候は、私も妻もその前夜あしき夢を見候て、心にかゝるあまり卜者に訪ひ參りしは夕陽、折りしも、知りたる人にあひ、その伴れなる人にはなれて、尋ね迷ひ居りしに、私も氣の毒に思ひ、とも／＼尋ね候て、夜半深く、九つ半ともればしきころ立ち歸り候。その折り、何かにつまづき候ひしかど、暗夜なれど何とも分かずそのまゝ歸り候を、明朝わが裾を見てはじめて死人なりしとおどろきたるどかりに候。今

思ひ合はすれど、それが昌次郎夫妻にて、誰れかに殺され候を、私、知らず、つまづきたるが災のたね、傳吉人を殺ろさぬ證は私が差添を御覽じて疑ひをはらさせ給へ、血のあとなどゆめ御座なく候とかしこみ申せど、して、火打袋に傳吉としるしあるが、彼れは汝のに相違あるまじなど仰せらるゝに、否、私のには候はず、役所にてはじめて聞き、さては其の折り落せしにやと見候ひしかど、それは私のには御座なく、不省の手とは變り居り候との答へに、大岡殿は、ふと憑司夫妻をうち守らせけるが、お專さやうか、傳吉の申す如くなるかと尋ねさせ給ふに、はいさやうに御座ります、其の日傳吉は、夕づ方すぐもどるやう申して家を出で候ひしに、夜半深くまで歸らず、私あやしみ思ふほどにやがて歸り、その夜は心もつかず翌朝祖先へあかしかゝげんとして、はじめて夫が衣の裾に心づきいぶかしく思ひをり候に、又、外へ出んとすれど飛石に血のあと、返す〳〵あやしと存んじて洗ひ清むるほどに、御役人衆の御迎人、たゞ〳〵あきらるゝばかりに候とあるに、ふん、して、その衣の血と云ふは、裾のみか、但しは外にもつきをりしかと、問はせ給ふに、お專、裾ばかりなりと答ふ、越前守はつく〴〵と思案の腕こまぬかれ、傳吉、汝はさきにはや罪に服したるよし、明白ならば何とて罪に服したるぞとなど訪ひ給ふに、さやうに候、不肖さま〴〵云ひとき候ひしかど數ならぬ言は取り上げに相ならず、さま〴〵の拷問、苦痛に堪へがたく、何も天なり、命なりとあきらめ候ひて罪に服し候ひしなりとあるに、越前守殿長歎息して、此の頃は遐鄙の役人、往々横しまの振舞あるよしなげかはしき事なり。詮議は明日に讓るべし。立ちませとて、白洲は其の儘に閉ぢたり。





文林

海邊霞　東久世通禧

わだの原沖つ志らなみた丶ぬ日に
いよいよ立はかすみなりけり

深山瀧　佐々木高行

そゝたてる巖ぞよみてたかねより
碎けてれつるたきの志らなみ

大原女　津輕承昭

うちつれて小柴いたゞく大原女の
姿やさしく見えわたるかな

山家梅　水野忠敬

世の中の春にれくれしやまさとも
いまこそ梅はさかりなりけれ

河氷　諏訪忠元

筏士のさをさすれともけさたえて
こほりとぢたるたにかはの水

石川丈山　宮地嚴夫

唯をしめ君がみことをうけながら
せみの小川をわたらざりしを

倭姫命　北郷久政

つるぎ太刀とくもはかりて白鳥の
神をたすけしひめゆりのはな

孟母　手塚光榮

居どころを三度うつして一すぢに
まなびの道をさとしけるかな

島　鎌田正夫

風あらき程も志られてしまびとは
いしをつみたり家のめぐりに

雨夜燈　遠山英一

ふる雨に人影たえてみやこ大路
照すもさびし辻のともし火

藤原百川公　　加藤義清

流れての末の世までもそのかみを
くまぬひとなきもゝ川のみづ

寄神述懐　　松浦辰男

何れを是いづれを非とも分け難き
よのひとごとは神ぞさだめん

田家烟　　藤井行麿

わさけぶり霞と見えてのどかなり
たづらにきほふ年のはつそら

新年朝　　三輪義方

ふるとしをはなれて明くる横雲に
にほふあさひの影ののどけさ

身まかりし子の年祭に　　草野隆道

けふといへど手向けん花も冬がれて
なみだのみこそ氷らざりけれ

新年旅　　赤松景福

みやこべの寒さをさけて年たてど

旅をするがのしづらに行く　　磯野徳文

雪

わけぬとは思のほかぞ見いだせど
こは夜も深くつもるしらゆき

又

雪ならぬところなきまで降りしきて
消ぬれどけさの跡だにもなし

松上霞　　足立正枝

友よばふ田鶴のなく音も長閑にて
かすみになびくまつがうら島

老後思往事　　伊藤純三

なにごとも忘れがちにて渡る世に
過ぎしむかしの思はるゝかな

池水作鏡　　宇井正夫

水をくむ妹がすがたをみまはしと
いけはかゞみに氷りはてけん

寄木祝　　安齋篤敬

とかへりの松の花さく春にあはん
かしらに白くゆきはふりても

旅宿梅　木庭芳香
東路のたびのいそぎにあしとくも
はるにさきだち匂ふうめが香

溪梅　近衛貞子
渡るべきはしもなけれど谷がはの
うめの木かげに行れざりけり

道臣命　柳原愛子
大鳥のゆくへをとめてみいくさの
みちをぞ君がひらきそめたる

早春柳　西四辻茂子
庭の面はゆきものこれど青柳の
いとふくかせに春たちにけり

早春雪　松平健子
かきくらし降とはすれどかつ消て
春を見せたるけさのゆきかな

窓前梅　保科節子
窓の戸をあくる朝日もうちかをり
みつよつさけり梅のはつはな

社頭杉　小池道子
神風のふくこゝちして三輪のやま
すゞろにさむし杉のしたかせ

仝　北島糸子
かみがきの内はやすしと宿るらん
とりがねしげし森のすぎむら

寒樹風　大谷籌子
みやま木の冬がれにける梢より
吹おろすかせのれとのさむけさ

拿破崙　大谷章子
千代までとちぎりし妹に別れても
さらにや國のもとをたてけん

日野阿新丸　常磐井文子
なつ虫に燈けたせてれやのあだ

討ししわざのさとくもあるかな

徳川光圀卿　　原田蒼生子

徳がはのそのみな上にさきいでゝ
末までにほふはなあふひかな

國旗　　河村重子

門ごとにかゝげて祝ふ日の御はた
くもりなきよのためしなる覽

元旦試筆　　安東菊子

老の波よせくる身にもたちかへる
としのほぎごとかきや流さむ

嶺炭竈　　土岐いく子

山かつがなすいとなみもひと筋の
けぶりに見ゆる峯のすみがま

山霞　　内田遊歌子

消ゑがての雪にかさねて佐保姫の
かすみをまとふ春のやまゝ

冬田家　　足立三尾子

山田もる賤がかりほのとましろく
れく霜さむし夜やふけぬらん

億百二萬々　　岡部讓

四四八四四七二八億九十百三九二二三
四九十四萬々四二三四萬六一十
一十七三二一十十八五二百一十七三二
億十八一十九十七四四九十七四
七二九十百四二十六九三百十百十三六
三八萬二二百二八七十百三千八

譯文

おもふまゝ

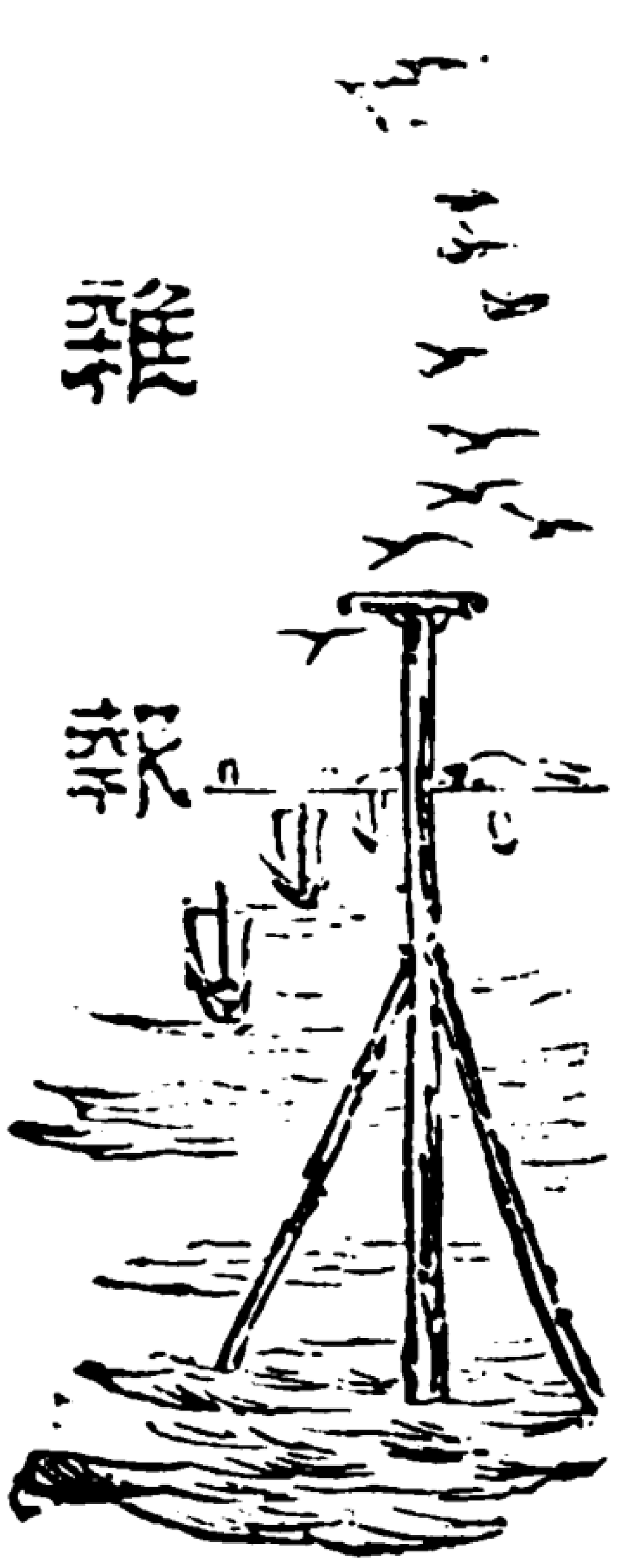
縱やよしなにはおくさも御國ぶりよくぞ讀まゝし我よまむ人
人なみに人さはいふも人並に縱やひさこさなしゝこさなし
何事も世にそむく身も友さ見む深山ににほふ花さもみちは
これは爲念相添へ申候

天壌無窮の意を詠る歌並反歌

岡　吉胤

道速振神代のむかし　久方の天しらすと　天照す皇大神は　菰枕高木の神と　諸共に並びゐまして　皇孫の饒の命を　天下の君と定めて　大みことのらし給はく　汝がみこと治め給はん　高御座天つ日つぎは　天地のいやとこしへに　神ながら　守らひまさむ　あもりなは神籬たてゝ　公のみも仕へまつれと　菅の根のねもころ〳〵の御さとしをかしこみまして　此の國にあもりたまひて　神たちをいつきあがまへ　人草を治め給ひて　樛の木のいやつぎ〳〵に　千代八千代かはることなく　大地の君と座るも　外國につたへなけれむ　唐人はいかでかしらむ　尋常の國とおもへや　なみ〳〵の君と思へや　おふけなくいむかひまつり　かしこくもそむきまつれる　くなたふれしこのこきしは　天にます神やきためん　國にます君もゆるさし　あはれ〳〵　此のことわりを　唐人もはやくさとらむ　二つなきわが大君に　つかへざらめや

天つ日とわが大君はふたつなき
ものとしらずやあたし國人



●孝明天皇御例祭　去し一月三十日、宮中にて行はせ給ひ、又、東山の山陵へも、御使を遣はして、御祭を行はしめ給へり。

●貞宮内親王廿日祭　おなじき卅日、青山の離宮にて、行はしめ給ひ、又、豊島が岡の御みかどころにも、御祭を行はしめ給へり。

●恩賜　從一位勳一等嵯峨實愛氏は八十歳、從一位侯爵醍醐忠順、正三位侯爵伊達宗徳、從二位勳一等伯

爵佐々木高行、正三位勳二等子爵黑田清綱、正三位勳二等男爵伊丹重賢、從四位男爵津守國美、正三位奥平昌服、從三位松井康英、正四位米津政明、從五位菊池忠、同澤田泰綱の諸氏は、七十歲の高齡を重ねたるをもて、去し卅一日、御紋付御杯、及、酒肴料を賜はれり。

●歌御會始　去し廿五日、兩陛下、鳳凰の間に出御せさせ給ひて、御式を行はせ給へり。さて、詠進詠草の數は、すべて、一萬千四百三十枚にて、之を府縣に、わかてむ愛知縣は、千二百八十九枚にて最多く、高知縣は、五十八枚にて、內地にては、最少く、又、この外、沖繩縣は、二十三枚、北海道は、百十四枚、臺灣は、十一枚、海外よりは二枚なりといふ。

御製

小山田のさとのけふりもとしくに
立ちそふ世こそ樂しかりけれ

皇后陛下御歌

われとむとみそなはすらし遠近の
田つらの畑にきはひにけり

皇太子殿下御歌

かきりなき山田のさとのにきはひも
たてるけふりにしられける哉

詠進

海軍少將大勳位二品　威仁親王

去つもみなゆたかに年やむかふらん
けふりそしけき小山田のさと

勳一等　慰子

をちこちのたふせのいほの日の御旗
けふりとともにうちなひきつゝ

侍從長正二位勳一等侯爵藤原朝臣實則上

あしひきの山田も野田もひらけゆくよは畑のみたちまさりつゝ

宮內大臣少將正三位勳二等子爵臣藤原光顯上

御心にかゝらぬひまやなかるらん田ふせのいほのほそきけふりも

宮内次官從四位勳二等男爵臣源朝臣武定上

しろたへにゆきふりしきて一すちの烟めにたつをやまたのいほ

題者點者　樞密顧問官兼御歌所長從三位勳一等男爵臣藤原朝臣正風上

年のたつあさけのけふりうちかすみ冬かれしらぬをやまたのささ

讀師　從二位勳三等伯爵臣藤原朝臣基修上

田も畑もしつかかまさの數ましてけふりにきはふ君かみよかな

奉行　御歌所參候從三位勳四等伯爵臣源朝臣詮上

をちこちの田中のささにたちのほる烟にきはふきみか御代かな

講頌　正三位伯爵臣源朝臣重朝上

あけわたる田中のささになく鳥のこゑよりたてるあさけふりかな

發聲　御歌所參候侍從從三位勳五等子爵臣源朝臣有長上

やまたもるしつかふせやの朝けふりゆたかにみねて年たちにけり

講頌　御歌所參候從三位子爵臣菅原朝臣利邕上

こさたらぬ田中のいほもあさゆふのけふりはたねす立つゝきつゝ

同　正四位男爵臣源朝臣文仲上

をやまたのささよりささになひきあひて烟にきはふ君かみよかな

同　從四位男爵臣物部連有麿上

きつれのみすみしなすのもけふりたつ田中の里さなれるみよかな

奉行　御歌所參候掌典正七位臣藤原朝臣嚴夫上

みつきものをさめしたみのさかなる心も見えてたつけふりかな

預選

沖繩縣士族譜得久朝久上

をやまたのけふりのすゑにみゆるかな年の貢のあまりあるよは

東京府平民水原慶夫上

いつこまてしつか家居のつゝくらん山田のすゑもけふりたつなり

大阪府平民高山保次郎上

いへこさに八束たりほのたれりさはそらにしられて立けふりかな

神奈川縣平民管井清元上

立のほるやまたのささの朝けふりよはゆたかにもみねわたるかな

岐阜縣平民渡邊俊明上

にひはりのいその田つらも人すみてしほかまならぬ烟たつなり

●香椎宮追遠會　福岡縣下なる官幣大社香椎の宮は、いにしへ、仲哀天皇、熊襲御親征の御時、及、神功皇后、三韓御征伐のをり、大本營地たりしをもて、元正天皇の養老七年課役を九州全島に徵して、社殿を營ましめ給ひしが、後天正十年、兵燹にかゝりて、やけうせたりき。かくて、又、造營し奉りしかども、舊觀に復せず、のびて今日に至れり。さるを、ことし千七百年に當るをもて、來ん五月、紀念大祭を行ひ、なほ、社殿建造をはからんが爲に、追遠會といふをたてして、寄附金を募集すといふ。

●少貳資時の墓　昔、弘安の役に、元寇をふせぎて、忠死せし太宰小貳資時が墓所は、世に知るものなかりしが、このごろ、これを發見せりといふ。塚は、壹岐國、許々良岐濱の小丘の上にありて、里人訛りよびて、正二位樣とひい、又、軍神樣といふとぞ。なほ、この近きわたりの畑中に、七つの古塚もありときく。

●勝伯爵逝去　伯は、七十七歲の高齡をかさねて、去し一月廿一日、つひに、みうせられぬ。天皇陛下、きこしめして、深く、いたませ給ひ、御使をつかはして、物を賜へり。なきがらをば、荏原郡、馬込村、千束に葬れり。又、遺言によりて、葬儀を質素にし、費を省きて、金二千圓ばかりを、貧人に施せりと。

●栗田文學博士逝去　博士は、もと、水戸の人にて、碩學の聞たかく、甞て大日本史の志表編纂に與りて功大なりき。後、文科大學敎授に任せられ、力を斯道に盡させたりしが、去し一月廿六日、病みて、つひに、みうせられぬ。天皇陛下また、御使をつかはし給ひて、物を賜へり。なきがらは、卅日、茨城縣茨城郡六段田村なる六地藏寺に、神式をもて葬れり。實に、いたましきかぎりなり。

●師岡正胤翁みうせぬ　翁は、もと、號を節齋といひ、國典、和歌に長ぜられき。維新の後、刑法官、大巡察、彈正臺監察知事を經て、宣敎權中博士となり、官幣大社松尾神社大宮司、宮内省文學御用掛たりき。晩年伊豫松山に寓し、子弟を敎導せられしが、去歲の夏のころより、病にかゝり、東京にかへりて、專、療養せられしを、しるしなくて、去し一月廿三日、つひに、なき人かずに入りぬ。享年七十。廿七日、神式によりて、谷中の多寶院に葬れり。

●孝貞の志操感ずべし。下文を見よ。

東置賜郡屋代村金子喜右衛門母　か つ

資性温厚克く養母に孝事し夫長病中節食薄衣以て湯藥を購ひ衣帶を解かずして看護し家計漸く衰頽に歸するを憂ひ辛酸多年遂に家產を恢復するを得其貞操

を堅守し一家を齊正すること爰に二十餘年誠に特奇とす仍て其賞として木盃一組下賜候事

明治三十二年一月十四日

山形縣知事正五位勳四等　曾根　靜夫

東置賜郡屋代村金子喜右衛門祖母　とく

資性温厚克く婦たるの道を盡し且つ心を家事に注ぎ夫沒後嗣子長病に陷り多く資産を失ひ家道衰頽に傾くを以て婦と協力して嫡孫を扶け其後見となり苦辛遂に家産を回復するを得、志操を變せざること爰に廿餘年誠に奇特とす仍て其賞として木杯一組下賜候事

明治三十二年一月十四日

山形縣知事正五位勳四等　曾根　靜夫

●又、福井縣の人、關留吉が妻にやいといへる女あり。頃、中風をわづらひて、たちゐもまゝならぬを、つる隈なく看護し、夫は、常に外にあれど、自、五人の子女をはぐゝみながら、家政を治めとゝのふること、こゝに、十三年一日の如くなりけれど、知事に聞えて、金五圓を賜りて、褒賞せられたり。

●孝子　阿波の國に、日和谷勝三郎といへる孝子あり。母は、年老い躰おとろへたるを、勝三郎、ことし十四歳なるが、三歳になれる弟を撫育しながら、介抱おこたりなく、常に、麻裏草履を編み、其の料をもて、この代に充てつゝ、數年このかた、他念もなしといふ。さて、常に、いへらく、「われ、家貧しくて、專、學業を修むること能はず、僅に、尋常小學二年の學科を修めしのみなるが、いと口惜し」といへりとぞ。心ばへ、いとあはれむべし。

●孝女　三河の國の人、磯谷定六が女に、かねのとて、ことし十一歳になれるがあり。父定六、去歳の十一月のころより、病の床にうちふせるを、かねの女、心も心ならず。毎朝、とくおき出でゝは、そこより、一里半をへだてたる猿投神社に詣でゝ、父の癒平を祈り、さてもなほ、昇校に、遲刻せしことなしとぞ。こも心ばへ感ずべし。

●雪中梅　近き頃まで、東京、牛込なる早稲田の里に住みし伯爵徳川篤守氏の長女芳子といへるは、こと

し十七歳なり。父は年ごろ、身もち修らず。家いたく衰へて、華族の禮遇をさへとゞめられ、あまつさへ事によりてかすかなる所につながれ、母は、數年以前に、離別して、さとかたに歸れり。芳子、さきに、しば〳〵、父を諫むれども、きかれず、家政日にせまり行きて、はては、烟しげくも立てかぬるを、母にかはりて、覺束なくも、今日をすぐし、常に、四人の弟妹をはげまし、はた、雨風をいとはず、日毎に、二人の妹を伴なひて、徒歩より、華族女學校に通ひ、一日だも遲刻せしことなく、ひたすら敎課をはげみ、終れば、急ぎかへりて、家事をとりまかなふを常とし數年が間、懈らずといふ。家には、たゞ、六十歳に餘れる老僕と老女のみにて、父は、おほくは外にあれば、みづから、弟妹を敎へ導き、ひたすら余念なしとぞ、身、ひくからず、あてなる生れにして、かゝる、辛酸を忍び志操をみがきて、たゆまざる、實に、涙ぐまるゝことなり。いでや、梅は、雪霜のなかにも、にほひ、かぐはしけれこそ、人もめづめれ、巖に矢のたちし例もあれば、なほたゆまずは、いかでかは、また、もとのさまに、立ちかへらざらん。やよや。

●生徒の奇特　伊豫國、北宇和郡なる八幡小學校の生徒に、山口千太郎といへるがあり。家より學校まで、道二里をへだてたれど、入學の折より、敎を受けし師に別るゝに忍びず、風雨をいとはずして、一日も通學を怠らず學業品行ともに、優れたりといふ。

●晩學　八十歳にして、始めて、學に志しきどもきけど、これなほ、一へに晩しとのみはいふべからず。いよ〳〵たゆまずは、などか業を遂げざらん。晩しとて、自、棄つるの心なし。こゝに、鹿兒島縣に、遠藤七次郎といへる人あり。幼かりしころ、小學校に入學しつるが、幾くもなく、よしありて、退學せり。かくて、ことし、卅五歳になりて、再、學に志し、今、高等小學四年級にありて、首席を占むといふ。

●石盤廢止　兒童をして、石盤を用ゐしむれど、石

筆の粉末、或は、口中に入りて、身躰をそこなふ恐ありとて、大阪府にては、學校にて、之を用ゐることを廢止せりとぞ。

●高齢　我が國にて、(臺灣、及、附屬諸島を除く)ことし、齢、百歳をこえたる人數は、左表の如しといふ。男に比ぶれば、女の方、まされり。よしあることにや。

年齢	男	女	合計
百歳	七十三人	百二十一人	百九十四人
百一歳	三十九人	八十七人	百二十六人
百二歳	二十八人	六十三人	九十一人
百三歳	八人	四十八人	五十六人
百四歳	九人	二十二人	三十一人
百五歳	五人	二十四人	二十九人
百六歳	五人	十一人	十六人
百七歳	三人	七人	十人
百八歳	二人	四人	六人
百九歳	……	二人	二人
百十歳	十人	一人	十一人
百十一歳	……	一人	一人
百十二歳	……	一人	一人
合計	百七十三人	三百九十二人	五百六十五人

●生兒の健否　こゝに、掲げたるは、ハンガリーの統計家、コンロといへる人、小兒、二萬四千人の上にて、調査せるなりときくがまゝを。

(1)夫の年齢二十歳以下なる時は其小兒は羸弱なり、
(2)夫の年齢二十五歳以上四十歳以下なる時は其小兒は强健なり、
(3)夫の年齢四十歳を超ゆれば其小兒多くは强健なる能はず、
(4)母の年齢三十五歳以下なる時は其小兒は最も强健なり、
(5)母の年齢三十五歳以上四十歳以下なる時は其小兒は八「フロセント」羸弱なり、
(6)母の年齢四十歳以上なる時は其小兒は一〇「プロセント」羸弱なり、
(7)父の年齢母より高き時は其小兒概して强健なり、
(8)父母同齢なる時は其小兒概して羸弱なり、

●就學年齢　は、或は、六歳をよしとし、或は、七歳をかなへりといひ、又は、八歳を、度なりといひて、世界各國、一定せず。わが國にては、現に六歳を制とせり。こゝに示せるは、文部省、衞生主事三島通良氏みづから巡視せる學校によりて、調査せるなりといふ。

	平均	最長	最少	調査人員
九州五縣	七年二ヶ月	十年十ヶ月	四年一ヶ月	一三、二四九

奥州五縣	七年一ヶ月	十八年八ヶ月	二年八ヶ月	一七、三九六
四國山陽六縣	七年一ヶ月	十二年八ヶ月	三年八ヶ月	二三、九七五

かくて、此調査人員總計は、五萬四千六百二十人にして、平均年齢は七年一ヶ月强なり。

●慈善　東京、日本橋區、蠣殻町、一丁目三番地に住みて、理髪を業とする田中清太郎といへる人は、慈善の志厚く、日毎に、金一錢づゝを貯へおき、こをで、養育院、其の他に寄附せしこと數多度なりしが、此度また、食パン二千個をわがなひ、養育院にれくりて、孤兒をめぐめりといふ。感ずべし。

●徳感人　かの梁上の君子の唐ものがたりは、今は、こと古りたり。今こゝに、福島縣の福島町に住める某が家に、或る夜、盗賊忍び入れるを、主人、捕へて、之に、金子若干を與へ、理を説きて、深く、ゆくさきをいましめ、放ち遣らんとしけるに、賊、忽、心をひるがへし、感泣して、奴僕たらんと請ひてやまず。主人、更に、言をつぎて、男子と生れながら、人の僕たらんを願ふこと勿れ。ひたすら獨立、獨行せよと諭しけれど、賊、いよ／＼感激して、去にきとぞ。美談といひつべし。

●特志　久留米市の人、星野房子といへるは、久留米運輸會社の社長にて、博多、門司なる支店は更なり、九州鐵道各驛の代理店をもすべをさめて、社業いよいよ、隆盛なりといふ。房子ことに、教育、慈善等の事に、志厚く、曾、久留米高等女學校設立のをりには、敷地三段三畝餘歩、及、基本金として、金五十圓を寄附し、なほ、去し卅一年より、來ん卅五年まで、年毎に、金百圓づゝを寄附せんことを請へりき。なほ、資を給して、男生徒二名を中學校に、女生徒五名をで、高等女學校に通學せしめ、又、熊本第五高等學校、東京工手學校に在學中の學生二名には、毎月、學資の補助を與ふる等、特行すくなからず。さきに、去年、十月、賞勳局より、銀盃一個を賜はりて、褒賞せられたりきとぞ。感すべき女丈夫なり。

●奇特　北海道、標津郵便局の脚夫、佐々木儀三郎

といへるは、恪勤の聞あり。一日、郵便物を遞送して、歸らず。妻某、心もとなくて、一晝夜が間、郵便線路を、くまなく、さがしもとめしに、氷塊の下に、壓死したるを見いでたり。妻おどろきながらも、まづ、其の帶びたる郵便物をときて、直に、之を、送るべき局に達せしめ、さて後、人をやとひて、夫のなきがらを運び歸れりといふ。かゝるかなしみの中にも、公事と私事とをわきまへて、よく順をたがへざりしは、まことにあはれにも、亦、感ずべきなり。

●寄書

時計の鍼の喜びと悲しみ　と、せ、

時計の針の、たゆみなきに倣ひて、勉めよといふよりも、己は寧ろ、その針をよく使へといふ方の、優れるに如かざるを思ふ。明治の始めには、一つの懷中時計を携へて、廟堂に獨り、之を喜びきといふ話しもあるが、今や、都も鄙も、貴き賤きも、時計を持たぬ者は少きに至りぬ、持つものは斯く殖ゑたれども、彼等そも何のために時計を持てるか、己は時計に若し心あらば、嘸や泣くらんとぞ思ふ、何となれば時計は、裝飾物として弄ばるゝを、喜ぶ者にあらざればなり　虛飾の金鎖に、縛らるゝをのみ喜ぶ者にあらざればなり。

時は幾億萬年、またその幾億萬年の昔より、この後幾億萬年又その幾億萬年のさき〳〵まで、實に無始無限の者なり、それによく限りをつけて、人に勤むべき時と休らふべき時とを知らしむるは、時計の鍼なりけり。つゞれ纏ひ、飢に倒れし赤貧兒をして、玉の臺に富貴を覩するに至らしむるも、時の効なり、飽食暖衣、十數人に侍かれし貴公子貴女をして、木椀をかゝへて市に乞はしむるに至るも、時なりけり。親より子につぎ、子より孫に、孫より曾孫までと、辛苦艱難して、機械の大工夫をなし、眞理の大發見をなし得しむるも、時なるぞ。時は心なくして、しかも人の求むるまゝに、流離轉沛、立身榮達の余地を授けて、曾て私心を挿みたることなし。

時間の利用を知らず、時間の整理のつかぬ時代は、開けざる時代なり。時間の利用を知らず、時間の整理のつかぬ人は、文明的の人にあらず。田舍にて集會の時間の、不規律なるには、腹の立つこともあれど、かはゆ

そふにもあるなり。すべて事業繁くなり、事多きに至るに隨て益々時間の整理をなす必要あり。用の少き時には、仕事出來ずして、忙しき時に反つて、多くの用を辨じ得といふも、止むを得ずして、時間の整理をつけ、氣のひき立つによる。かく止むを得ざるに出ずして、積極的に常に時間を利用しなば、その得所實に多かるべく、積り積りては、大河も移すべく、大山も築かれ得べし、巳れ寄宿舍にありけるとき、自習終りの號鐘より、消燈の號鐘まで、二十分の間を、孟子を調ぶる時として、勉めしことありしが、人の全く遊ぶ間に、一月余にして大略を調べ得たり、己はをかしくも、自ら之に感心して、爾來時の利用を心掛け、今にては睡眠中病氣中の外は、山に行くも、川に行くも、芝居にゆくも、炬燵にあるも、常にブラツトして居ること能はず、自然活き活きとしたる心地を覺ゆるに至りぬ。學生時代は、最も簡單なる時代なりと雖も、矢張遊歩、勉强の時間を限り、秩序を立てゝなすと、然せざるとにより、數年の内には、實に畏るべき差を生ずるに至るものなり、例へば何を復習して、そのさきに何を下調べし、その先きには體操をやるとか、散歩すとか、勉强も、運動も、時を計りて適當になすときは、試驗前に至りて、徹夜して、頭痛を病む憂もなかるべく、運動足らずして、胃病、衰弱病等を來す憂もなかるべし、從來の秩序ある生活は、反つてこの簡單なる學生時代に養はるゝものなり。

旣に一家の主婦となり、社會に出でたらんには、時間の利用、整理の必要は、いふも愚かなることにて、若しこの事の下手なる主婦ならば、萬事不始末なるべく、不經濟なるべく、常に夫の事業の邪間をなすなるべく、子弟の敎育亂りなるべく、下女下男不平多かるべく、交際上に手ぬかりいと多き人に相違なかるべし。兎に角時間をよく利用して、秩序整然、短き一生の間になるべく多くの善事をなすは、實に愉快の事なるべし、利間の利用下手なる人は、從來到底望みなき人なり。

新刊紹介

●日本敎育　一月廿日第一號を發行せり

獨り學校敎育に止まらず廣く社會萬般の事物に涉りて所謂廣義の敎育を講ぜんとするものゝ如し。百事に付て敎育の進歩を計ること洵によし。坪内雄藏氏

の方今の倫理敎育に就ての意見。大舘謙村氏の音字一致私見等あり。訪問。時評。雜報等有益の記事多し。

發行處　麹町區麹町　經世社

●大日本文章學會講義錄　第一號一月廿八日發行

會員を募集して之に頒つものにして非賣品なり杉敏介氏の日本文典。田岡佐代治氏の漢文評譯あり大町芳衛氏の矢口の渡(平賀源内作)の評譯おもしろし。松本道別氏の日本文章史。其他大沼鶴林氏の漢文法解剖。江藤專三氏の日本文章家列傳等あり。

發行處　神田一つ橋通町大日本文章學會

●海洋　第一號一月二十八日發行

我が國民に最も必要なる海洋的思想を喚起せしめんが為に發行せるものにして、實にうれしき企なり。文學技術の進歩するにしたがひ斯る思想を養成せんことは文弱に陷るの弊を避くるに於も最も緊要のことなり。富國的慣海性の養成(肝付兼行)。說夢錄序(福地源一郎)。海岸御備大意。海事敎育論。伊豆半島論(志賀矧川)等の記事あり。

發行處　麹町區一番町　帝國海事會

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

……………………

……………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　住所　姓名

……、……、……。……。

……。……、……、……、……、

……、……、……。……、……。

……、……、……、……、……、

……、……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總て沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得



二月五日兼題　尋梅

天　東京四谷區南伊賀町四十九　牧瀬かう子

類なき香をなつかしみとめくれは
うれしく匂ふうめのはつはな

地　三河國室飯郡下地町　永井さい子

やまざとはまだ雪ふかしうめの花
ふもとの野べをまづや尋ねん

人　下野國足利町　川田こう子

道かへてわすもたつねん吹く風に
いづこともなく梅の香ぞする

秀逸（二十首）

たづねわびかへる山路の谷かげに
ひと木のうめの匂ふうれしさ　肥後　平山政子

鶯にゑるべせられてうめのはな
たづぬるみちは迷はざりけり　東京　佳山せの子

かをりくる風をゑるべに尋ねみん
のずゑにさける梅のはつはな　東京　佳山靜子

うぐひすの霞かくれに聲すなり
なれも梅をやたつねわぶらん　北海道　畠山清子

たづね來し袂にまつぞかをるなる
野中のうめもわれをまちけむ　羽後　谷口婦佐子

はるをしもまたでさくてふ梅の花
いざたづねみむ風さむくとも　東京　奈良美智子

みちかへていざやたづねむ梅の花
ふきくる風をしるべにはして　東京　舘脇ます子

うれしくもみ出しけりな山かげの
ひむきの庭のうめのはつはな　東京　諸井久良子

吹く風のかをるあたりを心あてに
うめさく宿にたづね來にけり　備前　西艶子

うぐひすに我身をなして今日も亦
梅のはやしのありかたづねつ　伊勢　河村君子

鶯にわれたくれじと日めもすに
梅のはつはなたづねくらしつ　伊豫　仲田榮子

ふく風も香に匂ふなりたづねつる
うめのあたりや近づきぬらん　尾張　村手英子

うくひすの聲よりさきに尋ね來て
みるぞうれしきうめのはつ花　横濱　綿野りき子

ふく風の薫るまに〳〵とめ來れば
かすみのおくに梅そさきける　出雲　山根久子

香をさそふ風のまに〳〵尋ねきて
れもはぬさとのうめをみる哉　丹波　羽室象子

薫りくる風をしるべにたづねみん
かすみのおくの梅のはつはな　大阪　日吉あさ子

なつかしき風の薫りを志るべにて
梅さくさとにたづねきにけり　磐城　坂田のぶ子

たつねこしひとの心やかよひけん
身にしむばかり梅が香ぞする　甲斐　名取正代子

うぐひすのこゑを栞にとめゆけむ
かすみのおくにうめぞ匂へる　横濱　篠子茂子

たにまいでしはつ鶯にあらねとも
梅をたづねてけふもくらしつ　東京　住山幾子

(以下原稿到着順)

尋ねわびかへらんさおもふみやまちに
いつこなるらんうめかかそする　森やす子

たつねわびしはしやすらふ山かけに
に任ふもうれしうめのひさもさ　根岸盟子

おもふさち尋ねわひたるかひありて
うめのさかりにあひにけるかな　志茂多展子

香をさめて花をたつぬるうめか枝に
こゝろありけのうくひすのこゑ　長野孝子

うくひすのはつねきかんさ尋ぬれは
やまふさころにうめそに任へる　佐々小琴子

こゝろなき梅にはあれさたつれいる
ひさいさなひてはなそに任へる　佐々有鄰子

年たてはしつかかきねにゆきかへり
たつねてそみるうめのはつはな　坂本遊多歌子

うくひすのこゑをしるへにうめの花
かをるかなたをたつねてや見ん　中山富子

こゝろあてに霞む野末をたつぬれは
うめのかをりの深くもあるかな　橋本さよ子

枝かはす木すゑをみれはゆくりなく
うめたつねにてうれしかりけり　宮田源子

かにに任ふ梅をたつねてうくひすの
はつねもさもにきこゆつるかな　吉富彦子

はる雨の日をふるやま路たさりきて
うめのはなかさかさしぬるかな　村上昌子

ふく風のかをりをさめてきて見れは
うめのはつはなほころひにけり　松永信子

うくひすも來啼かぬうめにたちよりし
ゆきにまかへるはなみつるかな　古島甚子

母きみのやましきさこのきよめには
ゆきふみわけてうめをたつれむ　久米貞子

をちこちの野へのうめか香慕れつゝ
たちよるもさにうくひすの啼く　川西孝子

ふきに任ふ風をしるへにたつれきて
しらぬのきはのうめを見るかな　佐々敏子

たつれゆく野路の梓かせこゝろあらは
うめのありかをそこさつげてよ　吉田季子

あしなれぬみちをたさりて賤の男に
うめのはやしをさひにけるかな　碓井武子

たつれきしかひもなくして梅のはな
いつこもおなしつ任みなりけり　河原芳子

たづぬれはけふは霞もたちまちに　四條駒子

ふしみのさとはうめのかそする

こゝろあての里とひゆけはわつかにも
うめの立枝にはなそさきける　中村壽枝子

いさけふは谷のふる巣におとつれて
とりをたつきにうめをたつねん　稲原菫子

いかにして梅のはつはなたつねんと
しらぬやまちにまよひきしかな　高橋照子

香をとめてゆけとも見えぬ梅のはな
かすみへたつるこすゑなるらん　村田たけ子

香りあるかせをしるへにいさやいさ
たつねてをみんうめのはつはな　岡部八代子

はなうりのなきなにとはん年ことの
うめはいつちにさきにほふかと　本庄志雅子

梅のはなきのふは野へにけふはまた
いつれのそのにたつねゆかまし　河田いし子

おもはすもはつねきゝけり梅のはな
たつぬる野へになけるうくひす　羽田三緒子

おもひねのゆめにみし野を心あてに
けさはたつねんうめも咲くかと　畠山百合子

うめのはなたつぬる道のそここゝに
すみてもみたきいへはありけり　畠山千代子

うめの花咲けるあたりは知られねと
かをりそみちのしるへなりける　畠山美子

みなみよりまつたつね見むはる風に
にほひそめたるつきかせのうめ　小村信子

うくひすの鳴きつる方をしるへにて
はなのあるしをたつねてそとふ　名倉節子

うくひすの聲をしるへにたつねきて
しらぬかきねのうめをみるかな　宮崎せん子

家つとにならまほしきを野へのうめ
咲けるやいつこかをりのみして　高橋ちた子

かをりくるあしたのかせを心あてに
やまちのうめをたつねつるかな　谷口てち子

人つてにかをりそめぬと聞きつれて
いつこかうめのはやしなるらむ　小野久良子

梅のはなかせのたよりにもとめてん
なくうくひすのこゑをしるへに　石井豊子

薫らすはなにをよすかにたつね見む
ゆきに見まかふ野路のしらむめ　山田婦美子

こゝろして尋ねてもみようめのはな
世にめつらしきたねもありけり　田中ひろ子

うくひすははやおとつれぬ梅のはな
こさしはなさてかくはおそきそ　駒澤まつ子

花やいつこかすみをもるゝうくひすの
こゑをしるへにまつたつねてん　小池芳子

尋ねわひしはしたゝすむみちのへに
ありとやかせのおくるうめの香　佐藤與孝子

春かすみたちかくしたる野邊のうめ
香をたつねてそみるへかりける　森つや子

かをりくる梅はいつこに咲きぬらん
さたかにみえす野へはかすみて　寺館よし子

まとふともたつねて見まし野邊の梅
なくうくひすのこゑをしるへに　春野きよ子

山かけのうめのありかはしられとも
かをりしるへにたつねても見ん　伊勢うた子

梅のはなたつねて今日もなかき日を
しらぬやま路にまたくらしけり　小野けさじ子

尋ねこしうめははやくもさきぬらん　原敬子

いつこさもなくはなの香そする

尋れゆくみちのゆくてのうめはやし
名さころよりもあはれなりけり
横山柳子

吹きおくる風にいつしかしられけり
ひさめにさほきかきのうめかえ
椎野ぬき子

まちわひし園生のうめもさきぬらし
かをりしろへにいさたつれ見む
井上よし子

うくひすもさひ來ぬものを道さほき
ささまてきたりうめをたつれて
白石りん子

梅みむさたつれてやさはいてしかさ
おもへはさしてみろはなもなし
萩原章子

ふきおくろ風かをろなりたつれてし
うめもまちかにさけろなろらむ
中桐杏子

またほかにたくひなけれはうめの花
かをしろへにていさやたつれむ
池谷宮子

うくひすのこゑをしろへにうめの花
にほへろかたをいさたつれてむ
新海わか子

あろしさへしらぬかさへにきつろ哉
にほひ初めたろうめをたつれて
杉浦糸子

里の子にさへさかひなしたつれこし
うめのはやしやいつこなろらむ
甲斐ちか子

さひのこすさここそなけれ春たちて
まつさくうめのはなをたつれて
戸塚てつ子

うくひすの鳴く音を道のしろへにて
いつしか來ぬろうめのしたかけ
加納花子

いましはしさひこゝろ見ん朝かせの
ふきくろかたにうめか香そすろ
西村章子

眞こゝろをつくして今日も尋れけり
ゆきのふろ枝のうめのはつはな
德永九艮子

春かせのかをろまにまにたつれきて
いまをさかりのうめをみろかな
德永萬壽子

春かせのおくろかをりを尋れゆきて
いさなつかしきうめのはなみん
德永廣子

ひさ枝をりゆくひさにこさゝはん
うめのはやしはいつこなろかさ
友永章子

山ささのきはにに任ふうめのはな
今日めつらしくたつれにけり
堤彬子

梅のはなにほひたつれてやまふかく
いれはみちひくうくひすのこゑ
中原虎子

消えのころゆきふみわけて野へ濵く
たつれてをみんはやさきのうめ
永目甚子

梅か香はむかしなからにかをろらん
すき田のささにいさゆきてみん
那須昌子

うくひすの聲するかたをたつれみん
うれしくうめのはなやさくらん
村崎包子

うくひすの聲ものさかにきこえけり
うめかをろらんたつれゆかはや
黒田明子

いつこさも梅さくやさはわかれさも
かをりしろへにたつれてをみん
小森田輝子

たつれすはそれさはわかし朝かすみ
たちかくしたろ野路のうめかえ
虎口貞子

ふたつみつよにかくはしき梅のはな
今日こゝろよくたつれてそみろ
佐々宮枝子

咲くさみし夢もあたにはあらさりき
うめのはなかさ今日はかささん
溝口良子

のろ駒はつかれたれさもゆきてみん
かのはやしにはうめやさくらん
下田龜子

うくひすのこゑにさそはれ梅見んさ
新井登代子

やまちふかくもわけてけるかな

みちかへていさや尋ねむしらゆきの
　つもれるやまはうめかあらぬか　清河照子

うくひすの聲をしるへにたつれ見ん
　いやなつかしきうめか香そする　道廣彌榮子

吹く風によりくる香をはさめ行けは
　ほゝゑみ居たりしらうめのはな　近藤波留子

のさかなるみやまの奥にきて見れは
　むかしなからにうめさきにけり　横手こう子

朝またきうめのありかをたつぬれは
　やまのあなたにさきにほひけり　横手たつ子

たつれゆくかたやまささの梅のはな
　さくやさかすやしろひさもなし　足立富子

花もみちみにこしみちもわすれつゝ
　こゝろをうめにかりくらしけり　柴宮信子

みちかへてなほもたつれんこの里に
　ありてふうめはかれぬさそいふ　足立松子

ちかきあたりたつれぬ里はけれさも
　うめさくやさはすくなかりけり　足立宗子

いひしらすうれしかりけり心さす
　うめのはつはなたつれあたりて　足立ますこ

やまささに咲きけんうめの初はなを
　香をしるべにていさたつれみん　河田八重子

かくはしき匂ひをあてにたつぬれは
　いまをさかりにうめさきにけり　池澤天與子

たつ日はやさしものさけき春かせに
　いまをさかりのうめか香そする　石川樂子

なかく〳〵にさくさ聞かすは梅のはな
　けふもひれもすたつれわひした　石川類子

梅のはなさくはいつこかしらくもの
　かゝるやまちをいさたつれ見む　石川南江子

香をさめてしけれるやまの奥までも
　たつれてを見んうめのさかりを　石川久子

梅のはなかをなつかしみたつれ來て
　かへさもわかすまよひぬるかな　竹村貞子

思ふさちむれてきつるをつきかせの
　うめのさかりはまたしかりけり　吉岡すみ子

咲きさかすたれにかさはんうめの花
　かせをしるへにいさたつれみん　吉岡歌子

こゝかしこ咲きくる風をたよりにて
　わけ入りにけりみれのしらうめ　中山濟子

うくひすの聲をしるへにたつれはや
　うめのはつはなさきぬさ思へは　穴水わか子

うくひすもいまた來なかぬうかの花
　おのかものさやたつれてをみむ　仲田紫子

うくひすの聲をたよりにたつれきて
　たゝひさねたのうめを見しかな　吉田ひさ子

吹く風のまに〳〵かほるうめのはな
　ありかやいつこいさやたつれむ　山下たつ子

いひしらぬ梅かはつ香にさそはれて
　あしもそゞろにたつれけるかな　賀屋壽子

うくひすの聲もにほひてきこゆなり
　いさたつれみむうめのはつはな　眞島千鶴子

たかためにまよふさかなるうめの花
　香をだつれつゝけふもくらしつ　中島みち子

そこさなき梅のにほひをたつきにて
　かへるさゝほきささにきにけり　中島つれ子

いささはん風にまかひてわかまさの　矢島しけ子

ひまよりもるゝうめのうつり香

眞鐵路もふな路もあれさはるの日は
つゑをたよりにうめをたつれん　櫛田秀子

うめの香を吹きくる風のなかりせは
いかてたつれんはるのやまささ　武藤しげ子

かくはしき風をたよりにゆきてみん
うめつのささのうめのはつ花　絹川ますゑ子

ゆくりなくみやひの友にあひにけり
やまふさころにうめをたつれて　仁科しま子

春かせはまたかをられはうくひすの
こゑするかたにうめをたつれん　尾多福子

うくひすのこゑをたつきに見出けり
たにの戸ほそのうめのはつはな　三浦鳩子

いかてわれたつれ得さらむうめの花
このやまよりそ子等はおり來し　杉山絲子

ゐ逢はれさ匂ひはそてにみちにけり
うめのありかやいつこなるらん　白岩ちさ子

たつれ來し甲斐はありけり嬉しくも
かたゑにに匂ふうめのはつはな　八木沼里子

うぐひすの聲をたよりにたちよれは
はるにおくれすうめは咲きけり　三苫ふみ子

をちこちさたつれ來たりて嬉しくも
かに知られけりうめのはつはな　三苫ふき子

うぐひすのなくべき山のけしきかな
日は暮れぬさもうめはたつれん　江本せつ子

たゝならすふき來る風のかほるなり
うめさくささのちかくあるらし　江本さち子

梅のはなかすみふくさもたつねれは
なくうくひすのをしへぬるかな　百瀬いさ子

香をおくる風のまに〳〵たさりつゝ
おもはぬかたのうめを見るかな　名取よし子

ふくかせの香にこそにほへ梅のはな
さけるあたりやほさなかるらん　坂田喜美子

うれしくもたつれゐてけり梅のはな
たくひなき香をしるへにはして　名取千代子

やまふかみたつれ來たれは梅のはな
ちりにけかれぬいろそにほへる　敷島花子

里の子のみちひくまゝにさひきつゝ
おもはぬたにゝうめを見るかな　佐治玉子

尋れつるうめのあたりになりぬらん
ふきくるかせにはなの香そする　青木春子

ふくかせに折ふしに匂ふうめかかの
はなのさかりをけふはたつれん　齋藤俊子

野にやまにたつれわひつゝたち歸る
かさたのくろにうめか香そする　田中さよ子

かをる香にあくかれのほる里かはの
みきはつゝきにうめそにほへる　田中ひさ子

うくひすの聲をしるへにたつれきて
ほゝ笑むうめをひさり見るかな　田代喜和子

さく梅のありかたつれておもふさち
ささにやまへにけふもくらしつ　田代艶子

はる風のふけるまに〳〵たつれきて
おもはぬかたにうめを見るかな　田代綾子

さき初むる梅のありかをたつれんさ
今日もたさりつをやまたのささ　三野芳子

たつれつゝ見いてし梅のはなの香を
うくひすさへもおさつれにけり　菅貝芳子

はるかせにしるへせられて山ささの　青木たま子

かきれのうめをたつれてそ見る

ゆくまゝに風かくはしくなる見れは
うめ咲くさゝはちかつきぬらし
目黒佐喜子

ゆけさ〳〵かせのみかほろ梅のはな
咲くこの本はいつこなろらん
廣田さめ子

この春もまたうくひすにさきたちて
うめのはつはなたつれねにけり
高市とし子

さめ來れはまたこさ方にかほろなり
いつくかうめのはやしなろらん
森こさ子

折りさりてかへろ少女よそのうめは
いつこののへににほひそめたろ
野中あさ子

梅か香はそこさもいはすにほひ來て
ひささそふなりいさやさひみん
佐伯きぬ子

そこさなく春のゆふかせかをろなり
うめまくささやまちかゝろらむ
上杉みつ子

はろかせににほひをおくろうめの花
かをりしろへにいさやたつれん
高島壽子

かさしゝてかへろ少女にあひにけり
たつぬろうめやまぢかかろらん
高砂菊代子

梅のはなたつれもあへす今日もまた
かすむ野なかに日をくらしけり
高砂きよ子

さきつらん梅はいかにさこゝろ行く
野邊のほそみちかせかほろなり
高砂武子

いく里かこねてたつれしかひもなく
今日もみさりきうめのはつはな
松島きみ子

うめのはなさきしやいつこ佐保姫の
かすみのたもさかをりのみするろ
齋藤よし子

そこはかさ尋れくらしてうれしくも
けふ見つけゝりうめのはつはな
羽根田米子

吹きおこる梅のにほひをたさりつゝ
しらぬやまちにまよひぬろかな
笹本さほ子

さめてこし梅のかをりはなくなりぬ
たつぬろみちやふみたかへけむ
賀茂笹子

しは人のなり來しみちはこれならめ
ゆけさもゆけさうめはかをらす
加藤加壽子

しは人のたきゝにそへしひさねたの
うめなしなりにやまちたつれす
山口千枝子

ふく風はうめさきたりさつけれさも
はろこそきたれはなやたつれむ
服部蔦子

ふく風はまたかをられさゆきてみむ
はろはたちねのうめのあたりに
村田多豆子

うめのはなにほふ春へのくらまやま
くらくもかにそひさはしりける
橋本きく子

花の香ひさゝめつゝ來れはあし引の
やまふところににほふうめかな
野口三子

たつねきし甲斐ありけなり風そよく
さゝわわたりにうめか香はする
北原すゑ子

いつこへかたつれゆかんさ駒さめて
たゆたふそてにうめかかそする
日高かす子

あの聲はいつくなろらんうくひすの
鳴きつろ方にうめをたつれん
勝山しげ子

いつれより先やたつれんかににほふ
うめはにしやまやまたひかしやま
小向きみ子

いつこにかたつぬろ梅のはつはなは
はろなほあさきそらにさくらむ
小松靜子

なか〳〵にたつぬろ人のこゝろをも
しらていつちにうめやさくらん
錦織孝子

うめか香も春日もあさきそらなから
錦織操子

ひさねもかなさたつれわひけり

ふく風にもろゝかをりをよすかにさ
そゝろながらにうめをたつれむ　錦織やよひ子

名にしおふ松田のささをたつれねて
はしめてにほふうめを手折らむ　錦織涼月子

あすはまた道かへてましうめのはな
たつれあたらてけふもくらしつ　降田蒴起子

かに匂ふゆきまをわけてたつぬれは
けさめつらしきうめのはつはな　魚住愛子

たつれわひかへるふもさの賤か家に
みつよつにほふうめのはつはな　服部かつみ子

うくひすにしろへせられてわけいれは
うれしくも咲くやまささのうめ　藤井よし子

二つ三つみなみのまさのうめさきぬ
いさたつれみむかめゐさのささ　藤井うめ子

はろかせのかに匂ふまてなりにけり
いさたつれましうめのはなささ　齋藤千子

暮れぬさもよしや尋れんうめの花
なくうくひすのこゑをしろへに　林瑟子

まよひつゝ尋れ來ぬれはやまささは
いまをさかりにうめそ咲きける　杉田のぶ子

ささ人にさはて知ろまてうめのはな
ふきくろかせのかくはしきかな　小林文子

うくひすのさもさなりつゝ梅のはな
にほふあたりをたつれてやみん　宇野さだ子

ゆけさ〳〵うめの香ならぬ風もなし
はなはいつくに咲きにほふらん　高橋かれ子

なつかしき香にさそはれて尋はすも
さほやまささにうめを見しかな　阿保松子

いさゆかん松間かくれにしらうめの
それかあらぬかかせかをるなり　岸なみ子

うくひすの仄かなろ音をしろへにて
うめ津のささにわれは來にけり　小川淸子

吹くかせにかをろもゆかし梅のはな
咲くはいつこかいさたつれみん　池谷こう子

梅のはな咲きそめぬらむうくひすの
さそふまに〳〵ゆきてたつれん　石野よし子

さめこすはまつさく梅も見さらまし
なれぬやま路のうきはものかは　佐野幾代子

二月五日兼題

婦人慈善會に入會を勸むる文

天

甲斐國甲府市山田町　名取正代子

つゝしみてきこゆ、さいつ年何がしの君、外數名の發起にて、催し給ひし婦人慈善會の義、其後ます〳〵盛になり侍りて、會員も百名にあまり侍れど、こたびれほやけの認可をうけ奉りしに、其志のほどをめでたまふ方々、あまたいでき侍りて、今やかしこくも某の宮の御息所を會長に戴き奉ることゝなり侍りぬ。此會の光榮、何かはたぐへ侍るべき。されど、會員こぞりて感喜の余り、いかでいよ〳〵世にひろめてんとて、こたび又しも會員をつのり侍り、いかでつね〳〵御いつくしみ深き其君にも、とく加はらせ給ひて、何くれの事賛けさせ給へや、夫につきては、會のつとめなど、委

しうまをし聞ゆべきも、拙き筆にはつくし難う侍れど、別に會則一部御らんぜさするになん、幸に御志もれはしまさむ、なは知りたまふ方々へも御すゝめ給はりたく、なめげながらこのことねぎ奉るになん、あなかしこ。

地　　大阪市西區立賣堀北通一丁目六十三　日吉あさ子

昨日今日は寒さも一しほにて侍るを、いかにすぐさせ給ふにか、何かと取りまぎれて、心にかゝりながら、遠遠しくうちすぎしむらいの罪は、ゆるさせ給ひてよ。さてこのたび敎の庭に名ある君達の起し給へる浪花婦人慈善會は、夫の名利の爲め、あるは外國の敎などを基としたるにはあらで、專ら幸なき同胞をめぐむと共に、神代ながらの倭なでしこ、進みゆく世につれて、あだし色香にそまん事を防ぐの目的にて、會員も年若き人の多く、毎月一度づゝ、集まりて、互の交を暖め、會長幹事の君たちの、事業の報告の外、女子の道につきての談話、又は歌合茶の湯などの設けもある由、されど君とはよろづを共になす身なれど妾のみいらん事の心細くうしろめたけれど、君にも入らせ給ふまじくや、いづれ近きにさふらひて、委しきは申上ぐべけれど、一日も早く入會せまほしくて、取りあへずこゝに會則一片添へ侍れど、よきに見そなはし給ひて、否やの御かへりごと給はりたくなん、かしこ。

人　　伊勢度會郡宇治中之切　河村君子

文して申上げまゐらせ候、さて先つ日對面給はりし折、御約束致しゝ瓜生岩の書物、添へ申候間、御らん下され度、なほ其の節聞ゆまつりし婦人慈善會、いよいよ當地にて初會をひらかれ、慈善談などもあるよしに候へど、このとき御入會あらせられては如何に候か、御返事承りて、こなたよりまた御入會の手續きなど致すべくなん、かしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

天下はすべて慈善よりまさるわざはあることなし、寒に堪へかねて衣をもさむるすべなき人に、衣服をあたへ、暑をしのぎかね、病にかかりて藥を服しかぬる貧者に、藥餌をあたへて療治なくはへしむるなど、皆これ慈善ならざるはなし、今茲にその美事を發し、慈善會を起して、人々をすゝめて、此事に心を用ゐんと欲す、あはれ四方の貴孃將學友の婦人等、入會せられて、妾等とひとしくちからを天下國家につくしたまへと、一言を綴りて中がきのへだてなき松子孃の御もとにまゐらするになん、かへりごとを待ち來る、あなかしこ●

谷口婦佐子

過ぎづる日は、たゞにて久しき御對面のうれしさに、春の日影の傾くをも知らで侍りしが、今も猶忘られすなん、さてそのをりいさゝかきこえ上げつる、慈善會に御入會の御事、如何に思定め給ふらん、彼の會はいさやんごとなきあたりにも御賛成あそばせられ、またあまたの貴婦人貴孃たちも、競ひて入會せらるれば、會員は日々に增り月々に加り侍るよしになんある、されば、あなた樣にも、御心を定めさせ給ひて、必ず御入會せさせ給へと、又々あながちにすゝめまゐらするになん、あなかしこ●

東野さく子

凡て天地の間に生れ出でたらむ人は、何れか同胞にあらざらん、さるが中にも、幼なきが早く父母に離れてよるべなく、はた病にかゝりて看護すべきものもなく、或は赤貧洗ふが如く、朝な夕なのけふりも立ちかれ、又は溫厚柔和にていと〳〵孝心深きも、家貧しきたくひは、わきてびんなき人にぞありける、それを憐み救はんは、人たるものゝ義務なるべし、いと見捨てがたく思ひ侍るを、こたび慈愛深き人々を集ひて、婦人慈善會と云ふを設けて、さるびんなき人を救ひ、吾等の無益の費を去りて、もろ〳〵の宿世惡しき事ともの出で來たる折柄の使にもせんとすなるを、已れも事足らぬ身なれど、人々にそゝのかさるゝまに〳〵、會員に列り侍れば、君も御多忙の中甚だ申し兼れ候へども、いかで〳〵御入會遊されたく伏してねき參るになん、かしこ。

河原よし子

文して申上げまゐらせ候、先つ日は、御家にまかりいでゝ、こよなうあつきもてなしにあづかり、まことにかへしまゐらすることさへおぼえぬほどにこそ、さてその折柄、御かたらひ申しゝ、婦人慈善會のこと、おもとには、ほゞ御贊成のよし承りはべりしが、なほいかゞにかと思ひ立ち候ふまゝ、その會のなりたち、おきてなぞ、とくと御覧じてこたび會員蒐集のみぎり御入會なさるゝ方よろしからむとぞんじ、別に會則など添へまゐらせて御伺ひ申すになん、かしこ。

吉岡歌子

四方の海波穩かに、世は太平を謳ひつゝあるに、食ふに食なく、寢ぬるに褥なき貧しき者の上こそいと哀なれ、知し召させ給へる如く、當地方にては、去年の春より、海士の漁りもうる物なきを、米價さへ日に日に高うなり行けば、浦屋の烟日にそひて細り行く樣のたゞならねば、一日某夫人と共に、戸毎にとぶらひみ侍りしに、誠に其哀れと見るに忍びざる者數多く侍りき、最地方有志の方々も、夫々救の道を講じ居らるゝものゝ、未だ其運びに至らずとかや、聞及び候、さりながら、今にしてこの急を救はずば、後の千金もかひやなからん、と思ひ侍りしまに〳〵、親しき友とはかり、此度婦人慈善會てふものを起し、かの某夫人を會長と仰ぎ、會員をつのり候ところ、何れも同情の淚をそゝがれ、直ちに御入會ありて、もはや會員は百にあまり、四方の方方の寄附金と、諸姉が暖き惠の手に造りなさるゝ工藝品とにより、かすかながらも一時の急を救ひ得侍るは、何よりの樂みに侍り、さるにても、かねて慈善の間にたかき君の在さましかばと、存じ侍りしに、昨日御かへりの由承り侍いとうれしくて、とりあへず會規細則などとりそへ御覧に入れ參らするを、善しとうべなひ給ひて、いと疾く御入會ありたらんには、いかにうれしからましと思ひ侍るにこそ、あなかしこ。

賀屋壽子

都にまゐりてよりは、何吳の雜事に取紛れ、心の外に絶えて〳〵しう過しぬるを、君には平かに物し給ふ由承り、此上なき事に存じ侍り、さても明けく治まる御代のしらへにて、四方の民草の悦び謳ふ聲は、けに不二の御山もどよまむばかりなれど、猶廣きくぬち、彼處此處の隈隈尋ぬれば、打續く不幸に、糊口もなし難く、徒に世を恨み身を嘲つやから路頭に迷ふあはれの孤兒など、また多く侍るを、心ある人ども、みる目たへがたくおぼし、遂に婦人慈善會といふものをくみたてられ、廣く會員を募らせ給ふと聞き、いとよき事に存じ、去年夏の比入會いたしゝに、誠に善には做ふ人々多く、其後申入るゝ者日にまさり行きぬ、さるを君にはかねて慈善の御心深く、里の貧兒などへ惠ませ給ふ事たび〳〵なりと聞き及びぬるに、いかでこの美擧に漏れ給ふにかと、いといぶかしう、かつはれたう思ひ侍れば、かくすゝめ參らするを、御聞入れたまはゞ、いかにうれしからまし、手つゝきは妾よりはからひ申すべくなん、かしこ。

都水春子

日外聞え上げ候婦人慈善會の儀、いよ〳〵こたび同志の友と謀り、設立の運びに至り候處、某子爵の北刀自には、殊の外此擧を嘉し給ひ・基本金として若干金を寄附せられ、次に某家の令婦人を始とし、續々贊成の

方々を得候が、加入の申込亦夥しく、日増しに盛大に向ひ候は、此上なき幸にて、力を盡しゝ甲斐ありと喜び居り候、扨、此會は、末永く持續致させたき心組みに候まゝ、醵金の方法抔も、行はれ易き樣に、例へばおのがじゝ日々の冗費を省きて、是を會に積み、其利子をもて救濟の途に充て、あるは品物にまれ、着古しの衣にまれ、有志の寄附せられたるを貯へ集めて、貧しき者にわかつてふ方により候、御許樣にも、何卒右御贊成の上、御入會下されたく、趣意書相添へ、切に御勸め申上候、かしこ。

美濃君子

人誰か慈善の心あらさらん、さはいへ、貴姉の如きは、また稀ならむ、然れども、貴姉に向ひて、不幸者に逢はるゝ毎に、滿足を與へられしかと問はゞ、必ずこたへ給はん、否只我應分の惠をなし得るまでにして、我心に滿足を得し事なしと、貴姉にして此御言葉あらしむ、いかで私等の愚かなる身、殊に一私人の力をもて、かぎり知られぬ不幸者をば扶助する事の出來へきか、さればこそ世に慈善會といふもの起りて、同志をあつめ、互に力をつくして、遺憾なからんとするになむ、然るに、貴姉にして今まで何れの會へも御入會なきは何ぞや、これ從來の會は、多くは流行的の物にて、慈善を專とせず、衣服の競爭會にあらざれば、浮薄婦女の娛樂會なるが故に、貴姉の如き眞慈善家の御入會遊ばさるべき眞慈善會なかりしが爲にて、慈善會員となられさりしこそ、かへりて眞慈善家といふべけれ、然るに、今度設立せられたる大日本婦人慈善會は、此等の弊なきのみか、從來の會をも反省改良せしめんとするものなれば、貴姉にして御入會なさるとも、決して御心に反く如き事なく、滿足を得るとを信ずるなり、且つ同會に於ても創立の際なれば、貴姉の御盡力を要するといと多からんを察し、こゝに貴姉の爲め、將た同會の爲め、切に御入會を御すゝめ致すになむ、あはれ貴姉よ、別紙規則書御覽の上、遂に御入會あらん事を、我は願ひて止ますなむ、かしこ。

石野よし子

春とは云へど未だ御寒さ強く候折から、御障もあらせられず、目出たく

存じ上げ候、倩こたび某々夫人令孃の君等の發起にて、親なき子達の爲に叫び、あるは老人のたつきを失ひたるなど、哀の者をすくふてふ會を設られ候、實に慈善てふわざは、其身に應じ、眞心をもてなすには侍れど、女の事にては、とかく思ふやうには成りがたく、日頃思ひ居りしに其君の御紹介をもて入會致し候、御前樣は、常々此道に御心掛遊ばす御事故、さためし御入會の御事と存じ候へども、念のため御進め申上げ候、別紙規則書御覽の上、御友人にも御進め下されたく願ひ上げ候、かしこ。

學生に喫煙を禁ずることを勸むる文

高松市　長谷川春子

近頃學生の風儀を見るに、實に歎くべきことこそあれ、己が學業に汲々として、寸陰これ惜しみて勉勵すべき時なるにもかゝはらず、途上を歩みながら卷煙草を口にし、揚々として自得せるが如きこと、全く世の普通の如くなるを見る、實にこれ何たることぞや、彼が輩、まづ己が身分をかへりみるべし、父兄より學資を仰ぎて修業する身分にはあらずや、既に其業を卒へ、己と身を立てし後ならば其心にもまかすべし、實によその見る目にだにいとゞはづかしきの至なり、たとひ一錢二錢の費にもせよ、そを何處よりか得たりと思ふか、或は北風凜烈たる冬の日に膚をさき、或は炎陽燬くが如き夏の空に頭をさらし、汲々として田圃の耕耘に身を勞し、思を焦しつゝ、只管子弟の學成り業遂げて、身を立て世に出づるをこよなき樂とせる父兄のたまものならずや、嗚呼父兄の膏血を絞り、有害無益の品を購ふ、之をしも不心得といはずば、何をか不心得といふべき、されば一時も早く此の弊風を嚴禁せんこと、是れ學校として今日務むべきの急務ならんかとおぼゆるなり。この事いふは分を超ゆるに似たりといへども、知りていはざるは不忠といふ本文もあれば、一言きこえまつるになん、若し幸に、妾と感を同じくし給はば、直ちに實行せられん事こそかへすがへすも願はしけれ。

春來　畠山千代子
おく山もはるたちぬらしけさみれば
こほりながるゝいしかりのかは

早春梅　仝
ふきおくる風こそかをれゆききえぬ
かきほのうめもさきいでぬらし

初春　畠山百合子
あさかせの寒さはふゆにかはられど
四方のけしきははるめきにけり

鶯　山田婦美子
谷の戸を出でしばかりのきのふけふ
まださきなれぬうくひすのこゑ

庭敎　谷口なほ子
たらちねの庭のをしへのあらさらは
いかでにほはんなでしこのはな

海邊初霞　仝
野も山もまたしらゆきのきえなくに
はるをふかめてかすむうなばら

春雪　加藤けい子
朝めよきはるしきぬればそのゝ木に
ふるあわゆきをはなとこそみれ

明治三十二年女鑑歌文月並兼題

二月廿日〆切　歌　霞隔行船
　　　　　　　文　同返事　五日兼題文の返事　二月十日

三月五日〆切　歌　閑居春雨
　　　　　　　文　某高等女學校入學の手續を問合する文　二月廿五日

三月廿日〆切　歌　曉歸雁
　　　　　　　文　落第せし人を慰むる文　三月十日

四月五日〆切　歌　花滿山
　　　　　　　文　花下に月を賞す　三月廿五日

四月廿日〆切　歌　汐干狩
　　　　　　　文　遲咲の櫻を見て　四月十日

〆切期日に遲れたるは總て採用せず。

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人

●月謝參拾錢束脩參拾錢●詳細なる會則希望者は郵送料貳錢封入して申込あれ●卅年十一月女學講義第壹卷發行爾來毎月引續き發行●此程再版出來したるに付き各卷共缺本なし淑女達此際疾く入會あれかし

◎女學講義世評一斑

●『時事新報』女學講義は着實の方針を取り組織甚だ宜しく婦人の自宅教習書として最も適當のものなるべし第一回は滿二年を經て先頃講了し今度第二回の第一卷を發行したるが三宅秀氏の家事衛生、後閑菊野子の家事整理、三島通良氏の小兒衛生、關根正直氏の國文、土居弘氏の漢文其外理化學日本地理文法作文作歌裁縫禮法活花點茶及び史傳小說詞藻等ありて華實兼備はりて浮華輕躁の風なく實益を主とする好雜誌なり●『讀賣新聞』本邦女子教育の甚だ達せざるは實に慨歎せざるを得ず地方に在ては高等教育を受けんと欲するも就て學ぶの校舍なく爲に小學校卒業後直に學を廢するは遺憾の極と謂ふべし大日本女學會茲に見る所あり通信教授の法に由て女學講義を發刊せり(中略)高等教育を受けんとする女子の爲には極めて良好の講義錄なり●『都新聞』女學講義は大日本女學會より發行せる者にて高尚にして優美なる講義錄なり同會は畏きあたりの御賛成もあり貴顯の奧方も多く贊助し居らるゝを以て其組織も亦確實也●『東京朝日新聞』女學講義は卷首にて皇后宮の御歌を掲げ奉り次に學科(中略)等を精選し其用意の周到なる所を見るべく優に女子必讀の講義として掲揚するを得●『教育時論』大日本女學會は女子教育の不振を慨歎し通信教授の方法に據りて女子教育の普及を圖り賢良貞淑の品性を涵養するを以て目的とす(中略)而して女子に必要なる學科手藝にして其擔任講師の如きも華族女學校女子高等師範學校教授(中略)其他博士學士等なれども少しも申分なし●『帝國文學』中等以上の婦女にして高等教育を受けんとするものゝ必讀のものにして又此等のものゝ中にて最も中絶したるものなることは夙に世の認むる所今更に予輩の喋々を要せざる也(中略)予輩は編者諸氏の誠實熱心なる盡力によりていよ〳〵ます〳〵この女子教育の普及發達を圖りかねて賢良貞淑の品性を涵養する目的を果さんことを切望す

一月廿五日第十五卷已刊

東京市麹町區土手三番町二十八番地 **大日本女學會**

● 中學界之新旗幟 ●

編輯主幹 松[illegible] 副

學園餘談

第一卷第五號目次　一月二十七日發行

本紙實價

一冊金拾五錢。六冊前金八拾七錢。十二冊前金一圓六拾八錢
郵稅一冊金一錢五厘宛
郵劵代用一割增
爲替は江戶橋本局宛

挿畫

各國帝王大統領肖像並國旗(大附錄) ● 新造軍艦敷島 ● 西鄕南洲銅像 ● 植物標本龍眼……(中村不折畫)
樺山文部大臣　肝付海軍少將
維納大學空中航行器

發行所　東京日本橋區通四丁目角(電話本局五十一番)　春陽堂

肝付海軍大佐題辭
伊東海軍中將手翰
●西主一
●野口甯佐美合著

小笠原海軍大尉序文及作歌
木村海軍大尉校閲

訂正三版

新案海軍遊戯法

菊版美本
詳圖入
全一册
定價金二十錢
郵税金四錢

本書は我海國男子を養成するに最も適切なる良書にして其の要旨を海戰に擬したる兒童の遊戯法を至極面白く簡易にしつ明瞭に解きたるものなり世の父兄たるもの宜しく一本を繙て以て家庭の資とすべき有益の書なり

●●●學校用としては殊に妙なり●●●

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

孝明天皇御遺德

先帝御製御歌挿入　全壹册　實價廿五錢郵税四錢

事蹟　聖德　實歷　逸聞　事蹟

恭く按するに先帝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして時運晦に屬し未だ外に露れず是頗る憾むべしと爲す此書は震翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の談に依り以て汎くを網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一班を示せむ左の如し

御一代の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成の章は御幼時の御言行を示し

慷慨の上編は醜夷掃攘の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を悩されたる事蹟を叙し

孤憤の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御は識見卓出の實際を明らかにし

豁達は言路洞開の聖德を輝かし

忍耐は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛は側隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て**先帝の聖德を頌し奉る**

國民たるものゝ必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地　（電話新橋八八）

發行所　國光社

再版　生田目經德編　再版

製本　大和綴　頗優美

定價　金二十五錢
郵稅　金四錢

標註

雅文消息集

日用消息文の摸範は之を中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし

この篇専ら心を用ひて古人の消息文中より高向にして雅致なるものを採り

春の部　廿七編
夏の部　十六編
秋の部　十九編
冬の部　十一編
雜の部　二十四編

の各部に別ち註釋最も懇切に參考者の便よからんことをはかれり……又

北畠親房の　吉野御事書案
源頼朝の　三河守範頼に答ふる書
島津忠の　垣人におくる書
德川家康の　二代將軍の方への教誨文
俊寛僧都女の　父の鬼界島にあるにおくる文、
大高源吾の　母におくる書
小野菊女の　夫来女正に遺す文

の三十七頁の附錄を添へたり

斯道に志しあるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること大なり

杉谷正隆編

家庭歌訓

修身百首

本書は我が國古今の和歌の中に就きて格調高遠旨趣純潔にして修身の訓誡となすべきもの一百首を撰び之に明快なる義解と假名とを附し讀人にも一讀其本義を了得し大に發明する所あらしむ四方の淑女諸士進んで此篇を讀みて德器を養ひ給へかし

＊＊＊＊＊＊

全一冊　美術版　美本
定價金二十錢
郵稅金四錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊前金(三ヶ月分)	十二冊前金(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十二年二月六日印刷
同　年二月七日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木頁雄
發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）　國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所東京國光社印刷部）